

演劇会議

発 言 1

■ 座談会〈われら何をなすべきか〉
 林田時夫・熊本一・嶋田三郎・沖本敬朗 2

東リ演中部ブック巻のまとめ 栗 木 英 章 15

戦後新劇の悲劇的体験③! 宇津木 秀 雨 25

□ 劇団通信 37

関西における戦前プロレタリア演劇の研究④
 大 岡 敏 治 55

■ 劇 評

「人形の家」(こじか座) 藤 野 建 介 65

「左の胸」(潮流)を観て かたおか・しろろ 67

「白い星流」(岡山歌演集) 岸 本 敏 朗 70

「雪の墓標」(山形) 早 川 寿 72

「妾婦の人」(進化) 高 尾 豊 74

「吹雪のうた」(支木)からの教訓 黒 沢 参 吉 76

観劇雑感 萩 坂 桃 彦 78

戯 曲 ともだち 中 村 おがわ 82



中国料理

浜松華勝楼

本 店 浜松市有楽街 TEL (0534) 53-6532・6534
 サゴ-店 浜松市モール街 サゴ-プラザ地階
 西 武 店 浜松市鍛冶町 西武デパート地階
 天 竜 店 浜松市西鹿島 天竜オークラ・ボール内
 食品工場 浜松市馬込町 231



発言

ふたつの芝居をみた。ひとつは私が心血をそそいで書いたつもり作品であり、もうひとつは、私の後輩であるA君が、これも心血をそそいで書いたであろう創作劇である。

作者が心血をそそそがそそくまいが、できればは両者とも、質こそ違ふ惨たんたるものであった。一般の観客は、惨たんたるものとまでは思わなかったかもしれないが、私は意地でもそう思った。――作者が心血をそそくまいが、私に意地でもそう思った。――作者が心血をそそくまいが、私に意地でもそう思った。――作者が心血をそそくまいが、私に意地でもそう思った。

作者が心血をそそくまいが、私に意地でもそう思った。――作者が心血をそそくまいが、私に意地でもそう思った。――作者が心血をそそくまいが、私に意地でもそう思った。

な〃おもしろい〃を突き抜ける具体的なものが舞台で発見される様に、あらゆる努力を自分に課することではないだろうか。――こんな白々しいことを云ったりした。

白けたあとは、どっとばかり疲れ、もの云うのさえおっくうになる。だが、こんな思いをするのは俺一人なんだ、ザマはない、俺というやつはいい気なものなんだ――と思えてから、不思議と気が楽になった。というのは、たとえば、舞台成果がどうみても自作よりうわまわって、いや、何もかも、どうも、勉強になりました、ありがとう」という結果だったらどうだろうと考える。でもうっかりしていると甘えてしまうことになりはしないか。よほど、性根を据えておかないと妙な錯覚におちるのでないだろうかなどという、なぐさめかたもあるのだ。哀れな作者はかくして這い上る。

こんなものには同情など一切要らない、公演がスターにはまっ先に作者名が出るのだ。それ相当の敬意を払ってある。だからいわないことではない、良い戯曲、しっかりとした、見通しのつく戯曲をえらべば、多少まずくとも、一応の舞台成果は得られるんだ。年に何回も公演をもてれば失敗作もあっていいだろう。しかし現実それは許さないことはわかってきている。創作劇の生れない現実、きびしい現実とも作者は孤軍奮闘することになるであろうか。そんなことはない、いいされるかどうか。

(演劇集団未踏・立川雄三)

深まる課題にこたえて 今日をきりひらく劇団創りを

— 東西り演・ゼミナールで学び合おう —

'76 東り演ゼミナール

と き 8月21日(土) 午後5時～22日(日) 午後4時

ところ 藤沢市民会館 江ノ島竜口寺

(藤沢市鶴沼2121・藤沢駅徒歩5分) (宿舎及び分科会)

モデル上演 〆 坊やお馬 〆 湖南アートシアター

分科会(10) 経営制作/集団強化/美術/照明/舞台監督
専門劇団の課題/自治体との関係/児童劇/
モデル上演/特別分散会

— 参加費 〆 4,000 〆 —

[東り演第14回総会 8月20日～21日 於竜口寺]

ゼミナール事務局 京浜協同劇団

(川崎市幸区古市場2-109) ・ (044 511-4951)

'76 西り演ゼミナール

と き 8月21日(土) 午後3時～22日(日) 午後5時

ところ 福岡県志賀島・しかのしま苑

(博多港志賀島渡船場より1時間半・車なら半島廻りで)

モデル上演 〆 鳩 〆 劇団きづがわ

「スパイ」 劇団どろ

「ぼく生きたかった」 生活舞台

記念講演 「私のリアリズム」 中里喜昭氏

分散会/船上交流会

— 参加費 〆 4,500 〆 —

[西り演第15回総会 8月20日～21日於しかのしま苑]

ゼミナール事務局 劇団道化

(福岡市中央区春吉1-7-18) ・ (092 731-0977)

われら

何をなすべきか

— 地域にいきづく劇団をめざして —

林田時夫 (劇団きづがわ)

熊本一 (劇団大阪)

嶋田三郎 (尼崎ファーベル)

— 発言順 —

司会・岸本敏朗 (四紀会)

記録・久保孝 (四紀会)

まず自己紹介

司会 新しい稽古場は気持が良いですね。
(注・尼崎ファーベルの新しい稽古場で座談会が行われた)

林田 うちはいまだに稽古場もなく、争議団を転々と……だけど劇団大阪のあの立派な稽古場は刺激になってるね。

熊本 いや、この間岐阜のはぐるまへ行きましてね、その間々まで利用されてるのにびっくりしたんですよ。うちなんかまだまだ大雑端な使い方やと思って……

林田 未来なんかも今度新しい稽古場を持ち

はったし、ここはどの位?

嶋田 始め百万の敷金に六万五千円の家賃やったんやけど、この座板をうつのに30万位かかるというんで家主にやっってもらって百五十万の敷金にしろたんなんです。その方が出る時、返してもらえから。(注、約20坪と2坪程の台所付の四階全フロア)

司会 一寸、窓か、下の方の入口にでも何か表示してもらわなサッパリわからへんで、まだなんにも書いてないなあ(笑)。

嶋田 すみません、あるんですわ、あるのは司会 兎に角、今日は御苦労さんです。まあ総会前に発行する演劇会議なので要求は大

大きく劇団というものについて話し合ってみて欲しいのですが。私がまあ、昨年从今年にかけていろいろ見せてもらったりして、今日集っていただいた三人の方達が割合良いお仕事をされて来ていられるのではないか、演出として、劇団代表として……

しかも、皆さんともそれぞれ劇団なりサークル名なりを変えられてその決意の程を示され、一方では西リ演の中でも年数からいってもう中堅の劇団に属されて、やはりこれからの演劇をもっとも積極的に考えてもらわねばならない人達だろうと思ってお願いしたような次第です。

熊本 やっぱり今日来んかった方が良かったようです。(大笑)。

司会 まあ、気軽に頼みますが、兎に角、皆さんの演劇に入った課程、そしてきっとそれは劇団の略歴なりとダブっているんですよから、そんな方からの劇団の歴史も含めて話し始めてみましょうか……林田君からでも。

林田 僕は途中入団者なんですわ。その前身の南大阪演劇研究会は一九六三年の一月ですわ、大阪の関西労働学校の出身者で、現在の赤松、山本、等が中心になって始めた、当時からですね。彼等も20才そこそこの素人から出発したんですが、けたばきで見れるような芝居作りというような事とか南大阪に根をはったというような事はずーっと一貫して言っていましたね……僕自身は六七年ですか、学校卒業する時に役者が足りないからといわれて、勝山俊介作の『黙秘』に出て、それからですね。

司会 六七年からやったら、五年ですか、いや、十年ですか、もう。

林田 その前に関学の学生の時に、市岡高校の恩師がつくっていた『状況芸術の会』というのに加っていたんです。これはアング



ラでないんです。和田澄子さんの『身検』なんかも取りあげてやっていたんで……

す。まあモダンダンスなんかとり入れたら……で更にさかのばれば高校の時からやっていたんですが、個人的なこみ入った話をすると僕は双子の一人なんです、むしろ弟の方が積極的で今でも林田鉄夫創作舞踊研究所というのと九人劇場の会というて……

司会 モダンダンスですか。

林田 いや、モダンダンスと……えー、お芝居とですか、最近又年に二回位の公演をやっています。

司会 僕は演出として双子にもものすごい興味をもっているんですわ、是非一辺芝居で使ってみたいと思って。

林田 そら顔は良く似てますわ。けど、考え方やなんかは弟の方がはるかに芸術的ではむしろ全然ちがう方やと思ってたんです

司会 で高校の時から。

林田 二人でやりました。専ら弟が演出し

て、私は……まあどうにもならない役者として……

司会 ややこしいやろなあ。(笑) それで、次は熊本君の方にうつって……

熊本 劇団が出来たのは一九七一年十一月ですわ、今劇団は一応五周年という事で宣伝してやっていますが、四年目で五周年というて、うちは何でも先に先になっちゃうんです。(笑)

司会 うちは何でもおくれめおくれめ。

熊本 その前身が昭和40年四月に出来た金融演劇サークルですが、これは当時に金融青婦懇という労働組合間の交流会があって、一つ一つの職場で出来ない事でも、集ったら何か出来るのではないかとという事で、演劇をやってみてはとって当時全損保大阪地協演劇部のリーダーだった金沢氏なんか呼びかけて、金融演劇サークルを作った。まあ、私はその地協演劇部にいたんですが持ち前の出しゃばりでその代表になっちゃったんです。それで六年半位やって、だんだんサークルでの演劇という事にあきたらなくなって、サークル活動の行きづまりというか、やってくるもの要求がだんだん高まって泉の如く新陳代謝するやり方

に対する不満というか、それと、同じ職場の同じ観客を対象にいろんなサークルが相手にするのは不都合ではないか、もっとその職場の人達の要求にもとづきながら質の高い芝居をしなければ、というような事で、当時の若手の演出なり活動家の大同団結をはかって、結局、先刻の金融演劇サークルと地協演劇部、それから日産火災演劇部という三つが一緒になって「劇団大阪」が出来た訳です。その頃から創作劇をつくり出して行くという方針が固っていて、銀行のうちそと、なんかをやった後ですが、陸橋の上演を通して静芸と知り合い、西リ演よりはむしろ東リ演には良く出かけて行ったものです。私は、大体小さいから小学校の頃から人の中心に出ないとおさまらないところがあって、中学なんでも演劇部をつくったりして。

司会 中学ですか。

熊本 ええ、高校は逆に硬派で演劇なんかとはなれていたんですが、福岡大学に入っちはむしろ演劇部に通ったという感じで、現代劇場はその頃から知ってまして、富原さん、それから篠崎さんか……。それから、大学の演劇部の先生で石井っていわれるん



ですが、非常に強く影響をうけて、今でもしんどなったり行っている色お

話さしてもらうんですが、自分はここで芝居の面白さ楽しさを良くも悪くも知らされたように思うんです。で卒業後はカメラ屋に丁稚奉公しまして、演劇は出来なかったんですが、8ヶ月でやめて日産火災に入ったんです。そこで地協演劇部に入ったんですが、最初は特に政治的課題が先行する芝居が嫌い嫌い、そやけど、芝居やるからには集団が要るし、お客さんが要るし、そんな所で仲間説得しようと思うと、ある程度妥協したというか、まあそういう出発ですが、ただ、僕はそんな中で、僕自身変えられて来たというか、兎角出しゃばりて人を説得しようとする自分もある程度やらねばならない。そんな中で変って来たと思うんです。

嶋田 うちは、元々「くまんばち」いうんですが、一九七一年十二月に、当時、大阪労演

の「しおのぎ枕瀬サークル」として鑑賞運動をやったんですが、このサークルでパティをやるというんでその時に芝居をやるという事で、発足しました。その時、六ヶ月位かけて、煙突のあるオアシスをやったんですけど、サークルの中から、お前やれへんかお前やれへんかと誘いまわってやったんです。芝居はまあ無茶苦茶やっただけ(笑)、それでまあそれからいつつぶれるかいつつぶれるかと思いつつやっつて、一九七五年五月に劇団尼崎ファールになったんです。

司会 一周年やね。

嶋田 そうです。僕は機械関係やから最初会社へ入って技術者になろうと思っちゃったんです。それでも小学校、中学校の頃から学芸会はいつでも舞台上に出て、必ず役をやっ

てて……。

司会 皆ようやるなあ(笑)

嶋田 高校卒業の時、東京芸術座の横のな川を見たんです。それで、これが新劇いうものかと興味をもち始めて、それから労演の観賞運動をやり始めたんです。——それでもやがてどうも労演の芝居が面白くない、それから僕はコーラスやってたんで

すが、これも面白いという時期があった僕自身が作ってみなあかんと思うようになってたんです。その頃、専門家に対する偏見があって彼等は僕等の創るようなものはない、だから僕等労働者が創ったものと交流していくなかで彼等自身ももっと良いものを創っていくだろうというよ

うな気持ちで「煙突のあるオアシス」をやったんですが惨憺たるもので……。それで二年位してかなあ、岐阜の東西合同セミに出席して、それでほんとに働さながらやっている劇団活動の実際を知りまして僕自身の転機になった。印象に残っているのは現代劇場の「筑豊の女唄夫」の創作体験の報告で、それから僕ら自身の芝居を創っていいこととするものになって来たと思うんです。

それで、昨年、先刻熊本さんがいわれたように、サークルサークルした所からは良い芝居を創っていけないというんで、三人しかいなかったんですがほんとにやりたいものがやらないといけないというんで私のかわいそうなマラードをやって、三人で出来るものはそれしかなかったから。(笑)でも、やはり人数が少いといかんと思っ

まくいなくて結局、うちはうちでやりますといって、昨年劇団としてスタートしたんです。

演出の実際について

司会 まあ皆さん演出としてありながら舞台に出て表現しようとした意欲が若い頃よりあったという事に私なんか驚きを感じますねえ、僕なんか演出はするが舞台に出るのは恥かしくて……。それで皆さん何本位演出されました？

熊本 えーと、サークルからいえば20本位かな、数えた事ないですね。

司会 僕も数えた事ないです。それを数える時は終りの時かなと思ったりして、林田君は？

林田 高校時代は別にして……南大阪が、おふくろの歌までのぼりつめた時期があったその後「メコンデルタ」をやったんですがこれが新人を育てたという事で僕がやって、これが始めてやから一晩ものといえばまだ……。

司会 別に一晩ものでなくても詩の朗読だって演出だから。
林田 そういうものを入れればちよくちよ

やって10本位ですか、一晩ものでは4・5本位でしょう。

司会 嶋田君は？

嶋田 ちっちゃなものも入れれば、10本位ですか……。

司会 それでその中の快心作はどうですか。熊本 自分ではそれがわかんのですよ、どれが駄目どれが良かったのか、まあやはり最近のやつで考えて——最近はわりと仕事をさせて頂いたので。ばんどり「豚」って牛「白衣の告発」と

それで、何かこう自分が見えて来たというか、本と自分のからみみたいなのが感じられて来たのが「白衣」なんです。それがですね、大体僕はそれまでカーと燃えてやるんです。だから後で良くおぼえてないんですよ。ところが「白衣」は燃えられなくて困った。が、逆に自分を見つめながら出来たように思う、まあ苦しかったんです。

林田 僕はまあ「メコンデルタ」の後、あげても「若者たち」と「立ちん棒の詩」を赤松ちゃんの後やって、それと「希望」と「傷だらけの手」一寸最近多いですけど。さめる話ですけど、五年前「若者たち」を

やってこれは劇団としてもへたっぴで、何かせないかん、という事で、本を読んで映画も見て大変感動して、まあその矢先に配転くらりして、まあ大変燃えたんで。僕なんかも演出しながらポロポロ泣いてやったりして、この芝居を皆に支えられてやった事が今もこうしてやっている事につながったんですが、今度再演して、テープなんかその最初のを掘りおこしてみてもまあテムボのない、たっぶりの芝居をしていると感じてしまったりとか、どうもさめてしまつて「傷だらけ」のつかれか、自重や、役者の不ぞろいやらでどうもあかんのですわ。

司会 それで結果はどうですか。

林田 ようないのか、まあテムボを出さしたんですがせりふがわからなかったとか、一寸自分ではわからなくてねえ、自分の演出した芝居は、客観的には。

司会 「傷だらけ」は非常に勝れた作品やと思うんですがねえ。

林田 まあ、快心作といえればあれかも知れませんが、あの——原爆の問題というか、実在の福田さんのあり方を知るにつけ、何かこう簡単にいけないような気がねえ。

司会 演出の燃え方というところという事ではないのですか。

林田 なんかもそこでないしたら良いのかわからなかった。それで、兎に角、その事を出るだけ知って、——本とか、フィルムとかねえ——なんかイメージとしてうまれてくるものを沈澱させていきながら芝居を創っていったみたいなの……でも、それで、創造課程では役者の方からは演出何考えてるのかわからへんとか相当いわれて困ったんですけど……。

司会 嶋田君はどうですか。

嶋田 僕もやはり演出やるものが一番燃えないかんという事を持っていてやって来たんですが、今度の「銀河鉄道の恋人達」で、は反対にだんだんさめて来てねえ、シラけて来て、それはまだ僕がつくれきていない所があるんやろなあとと思って、それで本番の後、なんで火が付ききされてないのか考えてもやはり考えきつていないのやなあと、う所が見えてくる。

司会 演出はむしろ火をつけてまわるのであって自分が燃えるのはどうですかねえ。

嶋田 僕も演出がポコッと燃えてしまつては、いかなのかなあと思っている。こういう

表現をしたのにならそれがなっていない、それならそれをどうオクターブをあげていくかという事を考える時にさめていない、という関係は生れて来やへんのやないか。

司会 演出やつてて演技者が一歩すすんだ発見をやるのを見る時に演出のダイゴ味があるように最近思うのですが、「傷だらけの手」はどうでしたか。

林田 アノねえ——自分のカメラの事やら余り言いたくないんやけど——あれは、一ぱん参ったというか。(注・主役の福田さんを林田君のおくさんが実に見事に演じた。)

司会 そやろあれは、そう思う。

林田 演出やつてて、なかなか一人一人の演技のイメージまで手がとどかへん。特に僕は全体というか、底上げに力を入れる傾向があるので、やる人はまかしっぱなしみたいな傾向が最近出て来て困って来ているんですがそんな中で、自分が創造出来る所を越えてやってくれると——ねえ……それはもう自分が演出したというより、そういう芝居を役者が創ってくれた、たまたまその時の演出が僕であった(笑)、というぐらゐの事——うれしいというか参ったと

いう事はありましたねえ。

司会 うれしい参り方やねえ……。

林田 まあ、僕は働ながらやつてるわけやけど、割合シリアスな現代の生活を素材としていくものが多い。それで役者はその人の体、思想なり、生活なり、みにくさも生活体験なりも、にじみ出るものとちがうかなと思うんです。その事と役の性格なり個性というものが火花をちらしてぶつかり合う時に創造が生れるというか、そんなつくり方をしたいかないと存在感というか実在感が得られないと思う。

司会 その事を役者につっこんで行く時、何故、皆さんは演出なのですか、何故、役者をやらないのですか。

熊本 僕は役者をやりたいんですよ。

林田 僕も最近とみに役者をやりたいんですよ。

司会 やりたいんですか?!

林田 やりたいんですよ、久しぶりに。

熊本 やりたいんですけど、僕なんか使ってくれないんですよ。

林田 熊本さんなんか役者タイプというか、役者のやれる人やと思いますよ。

熊本 一寸先刻の「白衣」の話ですけど、

この技術の問題ですね。演出の方でここは絶対笑うだろうという所が笑わない、一回目二回目とあって三回目で一寸笑った、何故かと考えてみるとしゃべり方なんです。

ね。「患者さんがぐっすりねむってるの、にくらしくなるわ」という所で、「ぐっすりねむってるの」で切つて「二三、「にくらしくなるわ」というんで、全然なんです。三回目は知らずにそれをつづけてしゃべった、それで少し笑が来た。なんかそんな事ですね、先刻の嶋田さんの話ですが、やっぱり一人一人にそんな技術の事も含めてどう方針をもちたいのだろうというよくな事を考えているとまず自分が燃えなくなる。なんか今までは自分さえ燃えれば、と思つていた事がちがって来たんですね。特に今度はママさんがやって気持はカーンとなつていくけどシラケた舞台になりはせんかと心配したものだから余計そうなのではないかと。

司会 まあそういう役者との関係をいろいろ持つわけだけ演出として一体自分が舞台で創り出そうとしているのは何なのか、という事ですね——自分の一連の仕事なんかを考えてみるとおのずと何らかのつなが

りがあったりするんですが……。

嶋田 今、自分としてどういう風に芝居をつくっていくかかなかなあと一生懸命考えているんですけど。一つは演劇というのはやっぱり総合芸術やから、一つの場面が舞台にあつて、ビシャと一瞬のうちに社会というか、歴史が分るといふような——役者は舞台上でドラマティックという個性のある世界にトータルとして生きるような



——そのためには音楽も美術も絶対必要で、それがなかったらそんな社会全体は描かれへん。で僕等の場合、今は映画テレビ、いずれにしても、歌にしても、機械が入つて来て、人間の声なんかでも増幅されているけど演劇の場合、それが何らかで人間自身を増幅させなあかん、それが素晴らしいと思つている。だから機械を通しての他のジャンルよりも、演劇がもっとも魅力的になるだろうし、人間自身ももっとふくらんでいくと思ふやけど。

司会 かなり楽観的やけど、嶋田君はクロス
を良く使うねえ。

嶋田 役者は一つの個性的な生活を舞台で生
きている、それに対して全体的なものとし
合させていく合唱隊、集団化された個性、
これが一緒にあってその時代をパチャッと
写し出す、そんな場面をどこかにつくりた
い。音楽だってそういうものを手伝うもの
であって単なる場面転換のものではない。
一つの個性を出しながらそれをどうポンと
全体の上に出せるのかみたいな。

司会 そういう所は熊本君とは一寸ちがうよ
うな気がするけど……。

熊本 何か挑発されているような(笑)、自
分の仕事の系譜を考えてみると、まあ、舞
台と観客が会話するわけですけど、僕の場
合はどれだけ舞台に異様感がみなぎり、迫
力がつくり出せ、舞台が観客を支配する
とか伝え得るかというようなそんな事を
ずーとやってるなと思うんです。僕の場合
はまだ正直、演劇は生だという事が良くわ
からんです。生だから良いというのが僕
自身よくわからない。だからやった事はな
いのですが機械でも、映画でもテレビでも
使えるものならなんだって使えばいいじゃ

ないかという考えがある。人間をどう深く
面白くとらえるかという事がこれからの任
事なんだし、僕はリアリズムの人間なん
だから、何かをとばす事なく、基本として
それがズシリとあってそれとの斗いの中で
これからのものが生れてくる、そういう世
界をこれからの仕事にして行きたいとい
う——一寸抽象的だけど……。

林田 僕自身は音楽も美術も弱くて、劇団全
体もそう強くない。いつかそれも克服して
いきたいが、今の所は芝居というものはや
はり役者のものやな、お客さんのものやな
という思いがあってその事をもっと追求し
て行きたいなあという気がする。そんなな
かで脚本を読んでも上っ面だけで役者に要
求してしまったり、ポドテキストも深くつ
かまないでやってしまったりする事がすこ
く気になる。僕らは、涙と笑いのある芝居
をつくるという事を目標にしているのやけ
どやればやる程面白くない(笑)。どこで
どう笑うのかサッパリわからずにやってい
る。その辺が演出としてけいこしていて一
番苦しいですね。

熊本 うちの場合は幸いにしてというか、困
った事というかいつも信じられへんとい

う事から出発して、演出だけが先に信じと
って「この気持は実によくわかる」(笑)
とか言ってるわけですねえ。それ
で、すぐにうちは現地調査をやるんです
わ。これをやるとなんでもない事でも感動
してわかる、芝居ががらっと変わる。出来る
だけ多角的にやるんですけど、そこでのムー
ドは非常にいろいろあって来て劇団の団結を
高めてくれる。

劇団の方向をさぐって

司会 さて、そこであらう一つ本論だけど、皆
さんは演出であり、又劇団の代表としても
大変いろいろ考えていかねばならない。た
またま、いずれも劇団、サークル名を変え
られた事でもあるし、この、ひとりに文化
の荒廃といわれる中でですね、劇団をやっ
ていく、その劇団の使命というものは今、
何だろうという事なんですがね、どっちみ
ち皆さんは毎年々々劇団の方針を書かれる
のでしょうけれどそのあたりはどう考えら
れてるんでしょうね。

林田 まあ、今の文化状況という事になると
やはり地域の問題という風に考えられてく
る。——そうですね——やっぱり商業文

化なりマスコミナリは……画一的やし、中
央集権的やし、なんかいつも受身やし、

そういうものやしに、各地域の人々な
り、まあ働く人達なりですね、おっさん、
おばさん達が自分らのものとしてとりもど
すというか、つくりだすというか、そうい
う事の一つでありたいと今思うんです。

司会 それが、今、実感がもてる？それで。
林田 ウーん。

熊本 それが、比較的「さずがわ」の場合も
てるんじゃないかなあ。

林田 もてない事はないですねえ——だから
その事で自分らの活動の展望なり方向をも
つ——。これは劇団さずがわと改名するのは
非常な冒険やったわけだ……大変せまく
なるし、ぬけさらないし。でも、こつこつ
やっていけばある意味で見えてくる、芽生
えてくるという実感はあります。

司会 具体的にどういう風に？
林田 まあ、あの地域には劇場がないんで
ね、それで区民ホールを借りるわけが、
その地域の人達と一緒に椅子を並べ
たり片づけたりしてもらいながら、木村快
さんのいわれるような、その人達と一緒に
劇場を作るんやというような実感はあり

ますね。今度の若者たちには思い切って
宣伝カーを出したり、ピラをまいたり、地
域の青年団や高校生を稽古場に連れてもら
って交流したり。今までのここでやりますか
ら来て下さいではないやり方ですね。それ
で芝居が面白くて成功すればわが事よう
に喜んでくれますね——夜9時には会館を
出ないかんですけれどその片づけ、装置の
運び出しのエネルギーになったりして——
そういう事で三回四回打っていけばまあ芽
生えとしては……。

司会 若者たちほどことごとく？
林田 二回で、住之江と大正です、まあ年一
回はこれやっていくつもりで、それが二
ヶ所三ヶ所とやがてはふやしていけたらと
思ってるんですけど……。

司会 お客さんは？
林田 ふえましたですねえ百名程ですけど。
まだ、希望と若者たち二回目で
すけど、——ただ今度共通券でやったもの
で片よりましたですねえ。住之江が二百で
大正が六百ですか、一週間の中あきですが
……。でも大正で六百集めたのは、明
い会以来やと(笑) いわれましたです。

司会 着実に根ざしていきよるといふ実感は
ありますか？

確かにあるねえ。

林田 ありますねえ、少しですけど。

熊本 僕が行ってないんですけど行った人の
話を聞くと何かいいお客さんをつかみ始め
てるという評判を聞くんですけどねえ、いつも
林田 いつもそういうわれねえ、芝居はと
もかく、お客さんがええ(爆笑)、劇場の
ふんい気がいいといわれます。

熊本 そういう話を聞くとうちはどうすれば
いいんだろう(笑)と思うんですけど。う
ちの客というのは割合さめてるんですけど。僕
らの場合は、まあ職場のお客さんが多いん
ですけど僕らの汗と努力のたま物で集めて
来てるんですけど、僕も一時的自信を失
いましてねえ、僕の職場で切符は買ってく
るんですけど、まああいつが一生懸命やって
るんだからという具合にですねえ、でも全然
こないんです。そういう時がありました。
劇団大阪の芝居はやる前からわかっている
っていうんですけどねえ、僕達にしたら、
だとか海の幕だとか相当思い切ったレ
パートリをえらんだつもりなのに彼らにす
れば同じなんです。それで今度の、
しめき合う不毛の季節からには思い切って
宣伝カーを出すとか、京橋ストリップ劇場

並みのポスターをはったり、こんな大売り出しみたいな(取り出して)チラシをバラまいたり。

司会 成程奮文払いのチラシやな(大笑)

熊本 ディスクジョッキーに「先着五十名は無料にする」としゃべってもらえないかなあとか、大阪での一つの演劇的事件をひきおこしたいと思うんです。大阪労演でも毎年減って今年はどうとう三千名台ですよ。

林田 創造が言うように新劇は確に大阪では市民権を得ていないですよ。それでまだうちは集団のエネルギーがありますから、二千八百の会場になんとか三千集めようと今から頑張っているんですよ。

林田 宣伝カーですけど、当日流すだけでそれでも10名位来ましたよ。只や思うて(大笑)家で飯くって風呂に入ってもう終り頃にくるんですわ、まあ10人位只で入ってもらいましたけど(笑)。宣伝カーいうたら政治宣伝カーしか知らんのですね。

司会 ストリップの宣伝カーか、政治宣伝カーか。

林田 まあそれで、芝居とか、まあそんな文化関係では珍しいんですよ。

熊本 「ファットベル」で年四回とすると券売

りが大変でしょう。

熊本 もう借金と次の券渡しが同じで——でも最近はお金のことも前日までの入金より当日に入った観客の方が多いです。

司会 その町なり市に、その劇団があるという事をまずどれだけ知らしめるかという事から始めないかん感じやな。それで、そう広めて——創造ですね、こいつがしっかりしていないとどうにもならない。劇団としてこれをどう具体的に強めていこうとしているのですか。

熊本 個人的にはいろいろ考えているんですけど、例えば、うちなんかは割りに五ヶ年計画とか三ヶ年計画とか立てるんですよ、それで八〇パーセント近くはやりぬいたですね。その——稽古場をもつとか、劇団員をふやすとか、観客数をふやすとか、専従をもちたいとか。

司会 専従ももてたんですか？

熊本 そうです。それでその中に必らず創造活動の強化とあるんですね。演劇の学校とか、日常の訓練とか、裏方の強化とか、それが一番ボシヤリ気味なんですわ。

司会 なんでやるか？ わからんなあ、そこが一番楽しいところやないのやろか？

熊本 うちの場合、昨年から今年にかけてのスケジュールというものは正に殺人的やっ

たわけですね、切符の問題もありますけど、どうもこう、やると疲れる(笑)やられないといらだつ(大笑)。皆が舞台に出るとい問題もあって、やったのですが、それで確に皆が舞台に出るとい事は実現したんですが、皆ちっとも喜ばない(笑)、そんな事で集団非常にぎくしゃくしとるんで、下手すると空洞化する恐れも持っている。まあ五周年という節を迎えてそんなものを早めに直していかないと、うんで、稽古場公演とか、大阪には力のある人で今は余りやっていない人がたくさんいるのでそんな人に集団に加って頑張ってもらおうくらいに聞かすもとうとか——それからまあ私案なんですけど、例えば集団の中に甘さがあるんですよ、これがどうして

も集団の創造活動を弱めていると思んです。それで、今では失っているような生き生きとしたものを持った集団を思い切った作ろうかとも思っているんです。

司会 おー、別に？

熊本 ええ。

司会 えらい危険やねー！

林田 それはまったく劇団の内部にという事ではないんですよ？

熊本 うーん、例えばうちの劇団、わりに若い人が入ってくるんですよ、テレビに出しても入るんではないかと思つて(笑)、それが入つてしまつてシラける、自分の大事な青春をこうちこちもつて、役にもつてもらえないし、じつといるだけで良いんだらうかと思うんですよ。それから、劇団の中でも、もっと芝居がやりたいし、やるのに劇団大阪の舞台には余り立っていない人達がいますね、いろんな事情で……。その人達は劇団大阪としてもう要りませんよという僕達の運動というのは大変小さくなると思つて、そのあたりを魅力的に組み合してはと思つて、その一つ

——それから自演連にしても一向に増えなくなつてしまつた。まあ今年「十年実」が入つたけれどその代りに「へちま」がぬけてという風に……演劇というのはお客が先にあるというより、なんか劇団があつてお客さんを作っていくという風に思つてですよ。そこでこんなに劇団がふえないという事でなくもこう蜘蛛の巣のようにはりめぐらされて劇団があつちこちに



るといのが自演連だと思つてですよ。そういう文化運動の底辺を僕ら働くものの劇団が作つていかないかんと思つてですよ。

司会 そのイメージは、戦後自立演劇がはいとして起つて来た非常に短い時期であつた。僕達もその時期に直接に生れたわけではないがまだそのあたにかみがある時に生れて来たんだと体験的に感じるんですよ。

けど、問題はそれと同じような歴史は再びあるんだらうか。いいかえるならば、僕らが創り出しているかなければいけない文化の土壌というものはその過去の時期の復活という事ではなく、もっと今となっては創造的なものでなくてはならんのではないですか、そんな過去と同様のものではない底辺のひろがり方というものはあるんじゃないかという気はしませんか。

熊本 その、もう少し本音をいいますと、今劇団大阪は借金をかかえているんですよ。月28万払わねばならないが今我々は10万しか払う能力はないんですよ、それで18万はどっから、こうもうけてこなならんのですわ。それで僕は大体集団が空洞化したらやめたらいと、まあこれは極論で心から思っているわけではないですけど、まあそんな意見だつたわけですけど先刻の借金が15年続くんですよ、それで15年はやめてもたら困るんですよ僕は、皆僕の名義で借金してますから(笑)。それで新しい集団がそれになるとは思わないけど、さしたたて底辺がですね、もっとガツと広がらんと僕らの運動はもうどうにもならんというか、その、人数ですねえ、僕らの劇団の人数がふ

える事がそういう土壌を広げると思ってますわ。だから別の集団という事をやるやらないでなく、そんな事を考えてるという。

司会 成程なあ……苦しいなあ……。そこでや、熊本さんから一寸いわれた劇団の空洞化やねこれは皆さんの所ではないですか。

嶋田 うつとこでも、この稽古場が出来て、阪神間に僕たちの文化をつくらうというて月五千円も出してあって、もっと勤ける答やのにやっていない人達がいます。今の所僕らの劇団ではその人達をよう含みこんでないう風にしてるんですけど……。

林田 うちが十三年になるんですが、まあ、創立以来四、五年はのほりつめてあとにはボシャってた。それを十周年記念で再生して、今は三年目なんです。今は十五周年を目指して三ヶ年計画の最中で、地域に根づいて行く事で、稽古場建設、内部で創作劇をつくりたいとか、演劇教室の事とか、いろいろ……だから空洞化という風なシンディ問題はむしろその後、十五周年の後ではないか……。僕の性格としてこつこつしかようやらないから思い切った飛躍が出来ないです。
熊本 この人に対してこういう意見を持ってゐるのにもうそれをいわないというか、こ

うせないかんという事をいわない。あの人はこういう人やと認め合ってしまうわけですね、そこに空洞化が生れる。出て来ない方から、出てやってゐるのを見てもあれはああいう奴やというし、逆に一生懸命やっているものも出てこない奴にあればああいう奴やと見てしまふ危険性ですね。

司会 成程、変革の観念がないのやなあ。
林田 ソレはありませんね。
司会 それはこわいねえ！

熊本 それから最近うちでこわいのは、「フアーベル」さんなんかでしたら新人が来る

と皆のよろこびになるでしょう。
嶋田 ええ。

熊本 それがうちでは余りよろこびになれへんのですよ。ああそうかという程度で興味をもたんのですよ。一ぱいのみたいたか話をしたいとかいう風な。ひどいのは「あ、何ヶ月もつかない」(笑)というよう

な事をいう人もいましたね。
林田 ほんとはベテランがそんな新人に働きかけないかんのに、ベテランの中で接触をもつ人と、シラケてしまふ人となつて、そんな層の分け方もある。

熊本 なんてこうなつたかと考えてみると、

劇団の始めの頃は、もっと劇団員が要るとか、創造を進めていこうかという運動意識があつたわけですねえ、それが最近では、自分だけの創造ですねえ、もっと良い役につきたい、自分の勉強になる良い役につきたいという事ばかりで、集団の創造というものより自分ですね。だから全体の創造が悪かっても自分がほめられていけばそれで良いという事になって運動の意識がなくなって来ている。そういう事のためにも、もっといろんな人の協力をしてもらうとか、別の集団の事とか個人的には考えているんです。

司会 それで皆さんはレパートリーの事ではどうですか、まあ演出として面白い作品を作りたいと思っておられるんでしょうけれど本はありますか？

嶋田 まあ僕としては本はあるんですが劇団の力がな。

司会 具体的に例えれば？
嶋田 テネシー・ウィリアムズの一幕場ですけど、やっぱりコーラスをあつかつて……それから「天明のマリア」(石崎一正作)とか

司会 うん、そういうえば、「天明のマリア」も合唱隊を使っているなあ。

嶋田 おどりの場面、唄の場面もあって……

それで今年に劇団はそんな唄って、おどれて、それで芝居もあってというか、そんな基礎的な事をやらんならん。うちは後からやから他が三年でやる事を二年でやらんならん。昔の五年は今は二年位や、というて(笑)

司会 死んでまうがなあ(笑)
熊本 それ運動意識だと思んですよ。それがある時は集団が活きる。

嶋田 尼崎なんかは大阪や神戸に比べてまだまだ集団が少いと思うんです。だからやれば出来ると思ってるんです。たくさん青年層もいるし——只、今まではモンタージュ的な作り方が多かったと思うんです。そうではなしに役者の魅力というか、

そんなものから作り出していかないかというか、そんな表現の豊かな役者を多く作り出していかないかと思ってるんです。

司会 それが二年計画やな。
嶋田 そうです。

司会 林田さんの方は？
林田 昨日の運営委でもめたんですけど、はつきりすつきりしない。只、書く事を考えているんですけど……。

司会 でもそれだけお客さんの気持があるな

らばすぐ次をバツと出していかねば……

林田 うーん結局、おっつかないですね、こちの力量が……。只、レバの問題という事ではなく、うーん、大衆性のある、まあそれこそあそこの芝居はそんなに下手という事もなく、結構おもしろいという……。

司会 それこそ、無法松がかいな。
熊本 いや——僕ら若いからそこへいく前にもっと今の若い人達の気持をどないしたらつかめるやろうというような事をまだ五年やそこらは追求しようかなあ。

熊本 まあ僕らも大阪で、名前も大阪だし、大阪的な芝居をですね、多少、試行錯誤があつても、やってみたいと思ってるんですよ。例えば寛美先生に弟子入りして作品を一本かいてみる、そんな義理人情の中で

も僕らなりのものが出せると思うんですね。それと大阪の時代劇ですね。前に「大塩」をやったんですけどその続編のつもりですね、そういう意味でも大阪はまだまだ

素材はたくさんあると思うんです。で、一寸作者のやりたいという素材もあって目下検討中です。一寸今公表出来ませんけど。

司会 まあ大分抱負らしきものに話になつて来たわけですけど、皆さんの劇団は目下、

一周年目、三周年目、五周年目とかいう事で、十五年先、二十年先というまだまだ

かも知れないですけど、どうですか、十五年、二十年を迎える時、劇団はどんな形というか、その時はどんな素晴らしい劇団として持っていたいですか。

林田 どうも、僕はこつこつの方で(笑)。余り向うの……かい夢を追うのは苦手でしてねえ(笑)。

熊本 僕の方は逆でしてねえ(笑)ない夢もあるかのようにばらまいて盲進する方です。(笑)うちは最初に三ヶ年計画という事で稽古場とか専従とか移動公演とか立てたんですけど、それが二年の内に実現してしまひましたね。

司会 ホー。
熊本 そこで新三ヶ年計画というのを作りましてね。契約の更新をしたんですね。で、今は舞台と観客という事なんです、その第一期目当時の稽古場が欲しいとか劇団の仕事を昼間出来る人が欲しいとかいう具体的な運動の目標があつた時に比べて、今はその十周年を展望しての方策という事がなかなか見つからないんですね、——集団としてエネルギーをなくしたとは少しも思え

ないんですけどね。

司会 やっぱ最終は自分の劇場をその地域にもつという事ではないのですか。

熊本 いや、それは住民とか、行政の問題が
ありますから、そんなものとの関わりが
しょと出て来て欲しいんですけど、それより
小山内薫ではないけれどやっぱり観客で
ね、例えば観客なんかいくらでもあって、
只、創造をより深めるためにオルグする
というような事でありたいですね。

司会 切実やねえ。

熊本 で、まあ一つ一つの公演が大阪での事
件になる、というようなそういう劇団にな
りたいですね、早く。

嶋田 うつとは劇団大阪が実現した具体的
目標に目下進みよるところですけど、確に
稽古場を持ったのは早かったですわ、それ
で今度は二年計画で五千五百人を集める集
団になろうという。

司会 一年間にですか、五千五百人。

嶋田 そうです。それだけ動員出来れば稽古
場の費用を払えて、一人の専従もまあ、持
つ事が出来るのではないかと……。

司会 しかし、どうして皆、そんなに専従が
欲しいんですかねえ……。僕は大体劇団の

専従制度は反対なんですわ。だから僕の劇
団の視野には余り専従が入って来ていない
んですけど……。

嶋田 僕たちは働いていてそれは深いところ
で僕達の創造に非常に役立っていると思う
んですけど、僕の場合やっぱり絶対的に時間
がもっと欲しいという思いがある。

司会 それはわかりますよ、しかしそれがす
ぐに専従にむすびつくかなあ。

林田 うち専従はもてないし、もとうと
もしてないんですけど、実際にはそれに近い
人は必ずいる、絶えず必要としている。

司会 うん、何かを犠牲にしてね。

林田 僕なんか斗争中は半分専従みたいなも
のでしたけど今はうちのカミさんがそれに
似たような事をやっている。まあそんな自
己犠牲的なものでうちの集団やってるん
ですが、大体うちはものに非常に弱い、稽古
場もなけりゃ照明器具なんか全然ない。

それがこの頃一寸目覚めて来たというかそ
んな事からこつこつやっつていなかんな、
その上に自分らの夢を描いていかないと過
去の精神的ものだけの失敗になるなあとい
う思いは出て来ます。

熊本 専従が欲しいというのは僕の場合、僕

の要求でしたねえ、他の人はそんなに思っ
ていなかった。専従がいれば、こうい
でも出来るんじゃないかという(笑)

林田 まあ、木津川地域といっても八十万の
人達が要る。高知なり徳島なりと同じ位で
すが、劇団名を木津川と変えて小さくな
たようにも思ったんですけど、かりに一
パーセントといっても大変な数字で、大変な
ことやなと思ってるんです。片一方で、木
津川地域という呼び方がだんだんうすれて
いつている。運河なり、工場、コンビニ
ー、ニュータウンと、大阪の第二次、第
三次のスクラップ化が行われている町だ
らう。そこで将来は、木津川というのはこ
れは劇団の名前であったのかと、五年先十年
先には地域なり大阪に広まればおもしろい
なあと思っているんです。そんな木津川の大
きな流れの中で地域にどう根ざせば良いの
か——わからへんのですわ(大笑)。

司会 皆さん非常に慎重に遠慮して発言して
頂きましたが、内心はなかなか、意気軒昂
たるものがあるとおもうけしました。一応
時間なので残念ですがこのあたりで……。
本日はどうも有難う御座居ました。

(一九七六・六・二〇)

春の舞台あれこれ

——東り演中部ブロックのまとめ——

栗 木 英 章

(劇団名芸)

私の家が、ケイコ場兼劇団事務所を兼ねて
いることもあって、ほぼ毎日何らかの手紙や
ら通知を目にする。その中で見えない「S
ブロックション」の開設挨拶があり、あとで
わかったことだが、専務取締役を名乗る人物
が名芸の一劇団員と高校時代共に演劇部をや
り、中コン(中部日本高校演劇コンクール)

で、第一位の文部大臣賞を得たときの仲間だ
と知った。結局彼はそのことが、つまり演劇
の本質でなくて文部大臣賞が忘れられず、地
道な演劇活動でなくて、演劇商売をうろつい
ているらしいのだが、そのプロの公演一カ月
前に、「名芸の役者を二人借してほしい」と

の電話が入った。四千八動員するという。公
演一カ月前に、役者集めしているところが、
はたしてどうい舞台をつくり、四千八動員
できるかどうかなんていうことは、わかつち

ゃっていることなのだが……。どうせ一年も
続かないであろうブロックションとやらの先
を思うと、今さらながら、「地域に根ざした
ねばり強い演劇活動」を目指す東・西り演の
方針の大切さが重い意味をもってくる。

さて、東り演年度でいう後半期、つまり今
年春の、中部ブロックの舞台と普及はどうだ
ったろうか。中部といっても範囲は広いし、
それぞれの貴重な仕事を簡単に云々すること
はできないが、一つの討論素材とする意味で
も誤解を恐れず、前半期に引き続いてまとめ
てみようと思う。

舞台の創造上の評価は、前回と同様にプロ
ックの創造委員の合評でまとめたかったのだ
が、演集の丸子氏を除いて全体に創造委員の
観劇も数少なく、かみ合わせもむづかしいと

判断して、個々の劇評をお願いした。本稿で
はそれらの批評も含めつつ、さらにブロック
会議で話し合った内容も加味して、できる限
りブロックの全貌に触れるよう努力した。言
葉足らずや認識不足による不足分さはお許し
願いたい。

まだ、この原稿をまとめている以後にも、
演集の『ヘッダ・ガブラー』や、はぐるまの
『竜の子太郎』などかなり話題を呼びそうな
公演が続いているが、現在までを一区切り
にしていうならば、意欲的な舞台を制作的にも
ほぼ成功させてやり遂げたといえるのではな
いか。久しぶりの、演集の創作劇場、三千人
動員を達成した劇団名古屋の『あゝ野麦
峠』、ロル力に挑戦して見事舞台化に成功し
たはぐるま、異色舞台と評価される名芸の
『文七元結』、悪条件を克服して重い『勲章
の川』をあげた岡崎、健闘する三重勢の諸活
動などバラエティにも富んでいる。公演順序
に従って記していこう。

まず、つむぎ座のテネシー・ウィリアムズ
一幕劇連続上演であるが、東り演の演劇大学
と重なって、ほとんどの仲間が観ていないの
で詳細不明だが、客数二百、若い人たちを組

み入れて昇り調子であったことを報告するに止めて、演集の創作劇場へ行く。

『しあわせの日々』(鬼頭ちか子・浦はじめ演出)と、『青春の広場』(島田たろう作・木崎裕治演出)の二本、名演小劇場の上演で客数七百三十、丸子礼二氏の作品をかって上演して以来、とだえていた創作劇だが劇団内創作委員会の準備が実って今回の舞台化となった。久しぶりということもあってかなり期待もされ、結果「身につまされた」「生き方を考えさせられた」という評価も得た舞台になったわけだが、仲間うちで二本ともみたという人が少ないので、池田博氏(もと名芸)に私の感想という条件で劇評をお願いした。

『しあわせの日々』(二幕)

第一回創作劇場ということ、主役をのぞいて全員仮面で登場するという紹介記事を読んで、かなり実験的なところを期待して劇場へ向った。が、この期待は充分満たされたとはいえない。作者の職場体験から疼き動かされたものという執着はわかるが、構成が弱い。経理課長の中年男が、無能のレッテルをはられて追い込まれていくこの物語りは、開

は大きい。第二回創作劇場では、ゾクゾクするような劇的空間をつくり出されるよう待ち望んでいる。

しかし、スピーディで巧みな演出処理にくるまれて展開するドラマの世界は、残念ながら風俗的次元から飛翔することがない。新しくきりひらかれている、なにかがあるとは思われないという不満が残った。ないものねだりかも知れないが、何よりも創作劇場に期待するのは、まさに生々しい現代状況のただ中で呼吸している作者が、その鋭い現実認識と想像力によって、生々しい現実をジャンプ台にし、そこから先へ飛ぶ力を起させる何か、いや飛ぶ力とまではいなくても、暗い劇場の椅子に黙って座っている観客(の頭痛と全身)を覚醒させるような、なにかをかきりひらいて見せてくれることだと思ふからなのです。(以上・池田博氏)

次は、革新名古屋市政の手で実現した「青少年のための芸術劇場」第二弾の、劇団名古屋による『あゝ野麦峠』の再演である。これは市から八十万円の援助があり、市教育委員会もかなり積極的に普及活動参加をしてくれ

幕直後、その中年男(丸子)が一人、正面向きで歩きながらのモノローグではじまり、面白い展開を予感させはしたが、まず商社内の仕事のほとんどわからない。だから一人ひとりの動きが何の目的で進められるのか理解しにくく、Zと対照的に出世階段を昇っていくM(渡辺)のありようも一般的で、また続いてアメリカ(研修に)行って、突然自殺してしまふ(竹林)も、単なるエピソードとして処理され、ドラマの展開とかみ合っていない。人物設定が図式的で、日常性をきりひらくするどさに欠けるため、怠惰になる。

この何かありそうで結局ない舞台にかなりの客がとまどっていたような気がする。さて仮面使用のことだが、やはり意図がよくわからない。仮面をつけて演技できるだけ戯曲が煮つまっていないこともあり、演技も表情をなくしてしまふことから逆に要求される身体全体の演出が不十分で、自然主義そのままやられたのでは、かえって仮面が邪魔になっってしまう。演出もふくめて、ある種の様式化にまで突っ込んでいく努力が不十分だったと思ふ。

ただ一人名前を有する梓(柴田)も、たとえばはじめのうち仮面をつけていて、この機軸を兼ねて、三千人という画期的な動員を得た特筆すべき公演といえる。

名演が、六月例会に『三人の女嫁』と『私はルビー』のダブルという、いいレバを得つつ会員が三千人に達しない状況を考えあわせると、この意義は大きい。最近各劇団の公演入場料が千円前後という中で、四百円という安さがかかり力を発揮して、ブレイガイドで二百枚、民青が百枚などと、従来の概念の枠を飛びこえたところに大きな成果を生み出した要因の一つがある。もちろん、この客を今後の制作活動にどう結びつけるかという課題があり、市の助成の反面、入場料の上限を低く押さえられる傾向も出つつあることなど手放して喜ぶことはできないだろうが、ケイコ場移転で苦勞しつつ、六百万円の借地権も得てがんびり続ける劇団名古屋に大きな拍手を送りたい。

舞台のできも、満席の客に囲まれてあふれていたが、ブロック創造委員の丸子氏に對話風劇評を寄せていただいたので紹介しよう。

『あゝ野麦峠』(久保田明演出)

A 久しぶりに若い人たちが満席の舞台、と

構の中で人間性をとり戻さなくてはと思ったとき仮面をとるとかいった使い方なら別の意味もあるのだろうか……。このドラマのつきりでは結局、仮面でなくて、ストレートな演じた方がよかったし、それができたと思う。追い込まれてゆくZの、錯乱するだけのモメントが描かれたとき、はじめてこの作品は生きるのだろう。惜しい。

『青春の広場』(二幕)

これは、『しあわせの日々』と一転して、かなりスピーディな展開をする舞台であった。大製鉄会社で働き、夢も挫折も共有する作者のひたむきさが基調にあり、演出のテンポが加味されていることだろう。裸のままのセットがはじめから提出され、高いところにオートバイが走り、やがてギターのひき語りで登場人物たち全員がジーンズ姿であらわれる幕開きから最後まで楽しくみることができた。特に印象深かったのは、恋人たちが海へ出かけるシーンのスピーディな転換である。次作を期待したい。

どうも観劇してから日数を経ているし、印象の列記で申し訳ないが、このような形で演集が、創作劇の連続上演をされたことの意味

でも気持がよかった。

B 飛騨から信州へかせぎに行く、吹雪の中を腰に縄を結びあって峠をこえる娘達の群像の幕開きに迫力を感じたね。

A ただ、構成舞台から『野麦峠』らしい雰囲気を感じられなくて惜しい。特に舞台が明るくなるよねえ……自然主義的な遠見がほしいところだ。

B 印象に残っているのは、キカヤで働かなくて家出してきた娘っ子二人に、峠の茶屋の鬼ばあさん(真津田)演集の客演)が声をかける場面。「おめえだち、腹へってるだか」で二人一緒にワーッと泣き出すところには、ぎっしりつまった若者たちが一瞬息のむのを感じたな、それから糸くくりの場。ずらりと客席に向い並んでの無対象演技が見事だった。

B それに、脱走が深夜の寮の緊張などもよかったが、後半、争議になるころから何となくドラグラしてきた。男役が全体に線が細いし、ナレーター二人も浮いたようだ。

A その差がみえるほど、女優陣の熱気が圧倒したということだよ。新人、ベテランの区別なしにね。特に終幕近く、争議にやぶ

れて、雨降る路上へ放り出された彼女たちが声をそろえて、「皆さん、出てきて。ここへ出てきて……」と叫ぶところでは、客席から上っていきたい気持を起させたな。

B ただ、最後の三人が野麦峠をこえて飛騨へ戻るラスト、もう一つはつきりしなかった。「ぼくたちの中の野麦峠」という主張もあまり迫ってこない。

A それから、全体に客演が多いせいか、登場人物のかみ合いが、サッサと行ってしまった感じがする、まあ劇団の力いっぱい以上の仕事をよくやったことを認めた上での要求だがね。

B 古い圧制の歴史の中で、「人間らしく生きる」とはどういうことか。そして現代の人間としてほくらなりの要求をかかげるといふ演出のねらいは達成できたかどうか。成功におぼれず、一人ひとり確かめ合い、それからの課題にしてもらいたいな。

続いて、四日市市民劇場の「若者たち」鈴鹿公演。再演でもあり、地元劇団のない鈴鹿市への移動ととらえられないこともないが、ほとんど手打ちで行なった今回の仕事は自主

公演と考えていいだろう。

客数三百。赤字だったらしいが、全体に移動を経験している劇団から、「既存の組織だけに頼っていては制作面で失敗する」という苦い教訓をかみしめる必要がある。細かい舞台評については、丸子氏より劇団宛文書で送られたはずだが、二年前の舞台もみた久保田氏（名古屋）の、「キャストも色々変っているが、前回よりよかった」という感想の中に、劇団員もふえ活気づいている。四日市のエネルギーをうかがうことができる。

さて、色々話題を呼んだはぐるまの『血の婚礼』（ロルカ作・渡辺浩子訳・波田正子演出）へ移ろう。

一九三六年、三六才の若さで当時スペインに生まれたばかりの人民戦線政府を圧殺したフランコ独裁によって虐殺されたというロルカの詩や戯曲は、一部で強い関心をもたれ、本も出はじめているが、まだよく知られていないといえない。この詩的で幻想的な悲劇に取り組んだ波田演出とはぐるまの仕事は、貴重な成果といえるだろう。全体の批評は、雑誌「文化評論」六月号に、議長の黒沢氏が適格に述べられているところだが、再び丸子氏の対話風劇評を借用する。尚、制作的には客

数一三四〇、全劇団員が最低ノルマ十枚を達成したというから、その葛藤やら過程をいっか、プロダクション制作部会で討論素材にしたいと思う、以下丸子氏の劇評から。

A さすがにはぐるま、演技といい、踊り、歌といい迫力があつた。

B しかし、よくわからなかったな。筋は単純ではないのか。恋の炎が消えない男と女が、別の男との婚礼の日、逃走し、ついには決斗して相果てる。そこには過去の死のイメージが流れているわけだが、花嫁の武藤、花婿の三島もこなれていなし、女中役の加納は生活感にあふれていなし。それから乞食女の岩成が、新人らしいがよく死のイメージを表出していた。金員の首飾りみたいなのを伴奏に鳴らす唄もきまっていたと思う。

B そこからドゥエンド、プログラムによると、スペイン独特の、何か悪魔的な情熱が感じられたかな。悲劇の原動力というわけなのだが……。

A そういわれるとはつきりこたえられないが……。

B 私のお好みかも知れないが、装置はやはり。観劇評は三度び丸子氏にお願いする。

『勳章の川—花岡事件—』

A （本田英郎作・浅井克彦演出）

A 大変なことだな、花岡事件というのは。戦争中、中国人千名近くを強制連行して鉱山工事できき使い、虐待に耐えかねて蜂起を起し、敗れとらわれた人々を地元の日本人たちが拷問したり石を投げたりして、結局生きてもどつたのは約半数。当時殺気に燃えた若者たちも今はおやし、おふくろ。村ごと傷をかくし続けるわけだが、教師（杉浦）から事実を聞かされた息子たちがその傷を、その罪をあばき出す。観る者にとってショックだったし、考えさせられた。

B 暗いね。

A しかし、その暗さをあまり感じなかった。高校生たちの若さがつないでいたからね。

B そうだが、その高校生たちも、弁当の話とか、夜の「共栄館」でのこわがり方、それに教師の話しかけ方全てふくめて、中学生のような幼なさを感じてちぐはぐだった。

自然主義的なつくりがほしい。風俗とか雰囲気がつたりこない、どうもスペインの農民の生活とか、宿命にぶつかっていき生の情熱へついていけない気がする。

A しかし、森の感じを秒をつかってうまく出していたのではないか。観客のイメージでふくらませたと思うよ。

B シェイクスピアならセリアにくわしく場面設定が書き込んであるからいいし、日本のことなら身体で知っていることだからイメージもふくらませやすいが、どうも生活感といったものがびったりこない。いや、びったりなんて翻訳劇だから無理なのかも知れないが、どうも情熱的に表現しようというリキミというか、スゴミが目立ってしまった。

A 村人をやったところには、新人もいたらしいが独得の魅力があつたね。

E ただ、その気楽な村人たちの中で、花婿一家の悲劇がからまわりしているようだった。それからレオナルド（青木）は、貧乏なこととはわかるが、それなりにもう少しカッコよくならなかったのかな。花嫁を奪っていくだけの男とはみえなかった。

A 最後の決斗もえらくあっさり終って物足

A しかし、不慮の事故をのりこえてやり遂げた今日の舞台は、前回の『天使が二人』より、ぐっと充実してきた感じがする。

B 父親役の浅井氏は心をつかんで好演だが、線が細くて土のにおいが稀薄だったのが残念。

A スライドがすこく迫力あったな。

B 本当だ。そのせいか、芝居の方のポイントがうすれてはつきりしなかった。殺人の暗い過去に苦しむ父親の立ち直りか、若者たち(柴田ら)が戦争の重さを知ることか、教師の勇気ある行為か、それとも現在の鹿島組社長(中田)に象徴される支配者への告発か……。

A 作者としては皆言いたいんじゃないか。

B 逆にどれも中途半端みたい。校長(石川)の演技も古くて、全体のバランスがとれていない。演出のまとめが不充分だったような気がする。

A 幕切れをどう思う。

B やっと父親が慰霊の碑へ詫言にくるのだが、そこから明かるい展望を感じさせるようにできなかったかな。

A そりゃ無理だ。最大の犯罪者、鹿島守之助は勲章をもらって厳然とした力を持ち続

まると、はなし家(宇田、大家と二役)が席につくのだが、何とも板についてない感じがあり惜しい。はなし家が客席に話しかけてくるあのダイレクトな客との交流というものは、今までの私たちの芝居創りのシステムとは違うような気がするのである。役者どうしの交流ということを中心と考えてきた俳優にとって、確かに困難な役割だろうと考えさせられた。

口上が終って幕があがると、博奕ですってんでんになって帰った長兵衛(栗木)の長屋である。書き手が役者を体験することにより、さらに彼の作品に深みが増す可能性が期待される、そういう配役なのだろうかとも思ってみる。いずれにしてもこの栗木長兵衛、いささか開放しきれず、残念であった。思考が先行してしまうのであろう。作家的イメージでは御し切れない感性が俳優には要求されることのアナチテーゼとみた。次に世話女房お兼の平沢、長屋のおかみさんのイメージは伝わってくるのだが、やはり細かいのである、更にバイタリティがほしい。身体的なものがそういうイメージを強めているとは思いますが、形象化に今一步の感を持った。佐野樞の若衆藤助(片野)も線が細い。総じてみるに

けているし、地元の人達は「痛み」をかかえたままなんだ。

B 暗いといえど暗いが、もっと皆に見てほしいテーマだなあ。おばあさん(畔柳)がかなりウエイトを占めている。追われて飢えた中国人を見かけてじゃがいもを与えてやるが、跡の土をならしっていくのを見て、この人は百姓だと感じる。その中国人を、おばあさんの息子、つまり高校生にとっての父親が殺してしまう。「おなじ百姓を殺していいか」と我が子を厳しく責める場は一つのヤマだと思うが、じゃ兵士なら殺されても仕方がないか、とも言えるし、戦争だからとはいえ、ひっかかった。

A こういうテーマに正面から取り組んだ岡崎演集の意欲と努力に声援を送りたいね。

次は順番でいけば上野のブロックゼミナールにおけるモデル上演「吉四六さん」になるわけだが、ブロックゼミの概要とふくめて後述するとして劇団名芸「文七元結」をとりあげる。主に名古屋南部に根をおろし続けた名芸が、地元の老人クラブを無料招待して特別ステージを設けるなどして評判になった公演

この一場、生き生きとした江戸下町の生き様が欲しいのだが、やや知的に流れすぎたさらいがある。

第二場、佐野樞。廓の雰囲気、提灯など使ってうまく表出されていた。女主人お駒(谷辺)もよかったが、時々口に物を含んだような発声が耳ざわり。「文七元結」という人情噺は、この場で長兵衛と家出して奉公を決意した娘お久(山田)のやりとりが一つのヤマになっていると思うが、あっさりとした片づけられすぎて惜しい。もっとのめり込んでよかったらう。

改たてて本をみると、(すすりあげて)、この場にはト書が入っているし、眞生師の対談の中に、「……お久と長兵衛の会話(やりとり)……長兵衛が娘の意見でほろりとする所など演りがいがある」と語られているように、人情噺の見せ場らしくしっかり練り上げてはなかった。このあと、シビレをさらした長兵衛に客席はどっとわくののだが、こういうアソビをていねいにやることで客にサービスをする、これが芸なのかとも思う。ホロリとしたあつい胸のうちを心地よい涼風が流れる思いである。さて、ここいらで気に

は客数五〇八、毎日新聞の劇評によれば、「地元劇団としては非常に珍しいレパートリー。ちょっと冒険でもあったわけだが、大劇団の舞台と、一味違う小屋掛け芝居的な素朴さにあふれ、今年上半年の異色作の第一に推したい」とある。その老人会向け特別ステージを岡崎演集の面々が観たので、創造委員の浅井氏にお願いした。以下浅井氏の劇評。

『文七元結』(円朝原作・大滝敏彦演出)

仲間の劇団の公演にはついぞ見られないおじいさんの受付をくぐって会場へ入ると、約百名程、激しい雨をつけて足運んでくれたお年寄りが、固い折りたたみ椅子にかけて開幕を待っていた。この企画を聞いたとき、きつと料席らしきものがしつらえられて、外廻らしい劇場の雰囲気味わえるかと思っただけは当らなくて残念だったが、開幕寸前の客席を歩くと、「どうぞ」という声があちこちからかかる。あたり前の親切が今の私にはいささかすぐつたい気持さえする。新劇をみにくるお客さんからはかからない声だから。

下座で鳴物(三カ月劇団員が特訓をうけたという生の三味線である)がやや悠長にはじ

なるのが場面転換。初舞台だったせいか、プルーの地明かりを落さずにやった転換が苦になった。そして三場。文七(中村)の印象がうすい。感情の抑揚が不足していたのかも知れない。

四場——終幕である。やはり噺の小気味よさにくらべて戯曲にはいささか冗長さがあつたことは惜しまれる。説明的すぎるのだ。

私の不満を並べてしまう結果になったが、いわばこれは私の欲ばりの部分であって本音は、すっかりお年寄と一緒に楽しんだことだと思ふ。帰ってから落語の本を二冊も読んでしまうほどひかれたし、お年寄りが隣の客に、「今度はこうなるに、ようみてりゃあ」と話しかけているのがなんとも自然であって楽しい芝居見物だったことを付記したい。幕のおりたあと、和泉屋清兵衛こと柘植洋氏がマイクの世話をしてお客ののど自慢が始まったこと、南図書館ホール座は、まさにうつつうしいつゆを忘れさせた午後でもあった。

六月は公演が連続して、次はつむぎ座の『冒した者』(三好十郎作・栗木登喜夫・木崎裕治演出)だが、若手の素直な演技が生き

て三好作品のよさが一応出ていたもの、客とのかかりで、二十何人、四十数人というステージが続いて惜しかった。「内を固める」という姿勢の現在のつむぎ座と、ブロック活動の接点があまく見出せていないが、若尾副議長への助けを借りたりして、今後の課題としていきたい。

続いて、劇団名古屋の『一黒人と対話』（マリオ・フラッティ作・岩田治彦訳・久保田明演出）、『野麦峠』から一転して小品ながら、中堅、若手六人の出演者が、キメ細かくがっちりくりあげていたと評価された。客数四一七、こころみの劇場として普及も予定通りだったようだ。

ざっとブロック各劇団の六月までの自主公演を走ったが、その他移動として、はぐるまの『狐とぶとう』、『ひしめき』、演集の『アンネの日記』、『奇蹟の人』があり、また上野の『見えない壁』、それに忘れてならないのが、すがおの『ゆきと鬼んべ』を三重の各劇団が一緒に作り、受入れてとりあげた公演である。

この共同作業は三劇場の土壤でやられたわけだが、ブロック活動の一つのあり方として上野市民劇場のモデル上演、『吉四六さん』とその好評、明け方までの交流。

そして翌日(三十日、日曜)は眠気まなこの朝のおつとめ、小雨をついでの大リクレーションと盛りだくさんのスケジュールを無事終えることができた。

参加集団は、ブロック加盟九劇団と、友好劇団の知立小劇場希求、それに岡崎芳演の人もふくめて、七十三人。各劇団とも公演が前後している中でまずまずの集まり具合といえる。尚、開会前、去る四月三十日、脳腫瘍のため逝去された劇団演集の杉山一實氏に全員黙とうを捧げた。氏は劇団演集の運営委員、名古屋劇団協議会の事務局長として活動されたと共に、全農林東海地方本部執行委員などつとめて、絶えず働く仲間の生活と権利を守る斗かいの先頭に立ってこられた。享年三十六才の若さ。突然の悲報に言葉もないが、多くの仲間包まれた葬儀の日、奥さん(菊子さん、演集の女優)が「夫の遺志をついでがらんばってゆく」と述べた決意を思い浮かべて合掌した。

さて、ブロックでの目玉は何といっても上野市民劇場のモデル上演であり、名古屋から上野まで三時間余かかることもあって日頃仲

後日、詳細報告を受けたいと思う。

研究所(期生)の卒業公演も、大作・小品各種やられたがどの劇団も卒業生が定着しない悩みをかかえている。劇団名古屋の六人が一人も残らなかったこと等典形だが、各劇団とも「この劇団活動を続けるという人間を育てることを前提とした教育」の必要性を強く感じている次第。

その他、東リ演外では、友好劇団の知立小劇場希求が、親子劇場のこころみであるヒヨコ劇場を続けたし、児童劇を目指す劇団うりんこが『グスコ・ブドリの伝記』を大幅にテキストレジーして再舞台化、名古屋の劇団再生が、つかこうへいの『出発』をアトリエ公演として上演し、三重でも劇団津演がアトリエ公演として、イヨネスコの『二人で狂う』をとりあげた。福祉大学演劇部のカルデロが『樺からの眺め』をわかりやすくつくりあげていたし、名古屋のタレントたちが劇団民芸より高橋清祐氏(演出)を招いて、テネシー・ウイリアムズの『夏の夜、突然に』を、劇団びーぶる旗揚げ公演と銘打って発表したことなど色とりどりだし、来年開館五周年を迎える名演会館の各種行事の準備など報告す

々観ることのない同劇団の舞台は、はつらつとして全体を笑いの渦にした。移動公演で鍛えられたつくりと姿勢からは学ぶべきもの大であり、困難をいとわずやり遂げてくれた労苦に感謝しつつ、スタッフ、キャストを紹介したい。

スタッフ
演出 福北 弁
舞監 杉森正美
助手 水原 要
助手 鎌田悟郎
照明 岡本 実
効果 奥沢重久
小道具 中島智子

キャスト
吉四六 福北 弁
おへま なかおみこ
庄屋 奥沢重久
平六 岡本 実

観劇評となると、まともにいいますが、あとの合評で話し合われたことも含めて少し触れたい。全体にはテンポもあり、にわたりを追う場での工夫(草履の先に長い竹の棒をつけて、その先ににわたりを結びつけて追っかける面白さ)などにみられるようにかなり練られていた。しかしその笑いが最後に盛りあがっていかないところはいくつかの指摘が集中した。

これには台本(野呂祐吉)の問題もある。

ることは多くあるが、紙数も時間もエネルギーも尽きてきたので、最後にブロックゼミナールとモデル上演された上野市民劇場の『吉四六さん』に触れる。

中部ブロックゼミナールを開催したのは何年ぶりだろうか。少なくとも五年以上にはなる。もっとも、その間若手のみの参加に絞った「新人流交流会」などは二度ばかり行なったが、しかし最近はそのも中断している。

加えて、恒例の東リ演夏のゼミが、北海道、秋田と二年続きの遠隔地であったため、中部からの参加者は多くなかった。そのせいか、最近変動した各劇団間の人的交流が充分でなく、ブロックで相互観劇を推進しても、「どこの劇団の誰々」という親しさもなく、何となくうちとけぬまま公演会場を去ってしまふという意見が出されはじめた。

そんなことがきっかけで、去る五月二十九、三十日、岡崎(愛知県)で中部ブロックゼミナールを開催したわけである。今回は地元岡崎演劇集団のお骨折りで、非常に環境のいい東公園内の寺とグラウンドを借りることができ、初日(二十九、土)は、夜七時半から

大分に伝わる民話のエピソードを連ねたストーリーは主に三つの構成からなり、まず第一は検約を検査にきた庄屋をやりこめる話、第二は庄屋に頼まれた畑打ちを、最後は鎌にくくりつけた弁当にやらせて(?)寝っころがる話。第三は、お犬さまならぬにわたりを百姓以上に扱いかえりみない庄屋を、踏み込んでこらしめる話といえるが、最後の話は生まれ年の干支(えと)がからんで、「真年生まれや蛇年生まれの連中が、寅や大蛇を放し飼いにするぞ」という脅しは、全体をしめるほどの内容でないといえる。ぬいぐるみを出したらという意見もあったが、ともあれ、たまたみこんでいくようなテンポと決めがほしかった。

役者の持ち味は色々生かされていたようだ。平六(岡本)、庄屋(奥沢)にその感が強い。おへま(なかお)の誠実な、他に巻き込まれない演技づくりも地についていてバランスがとれていた。さて、主役の吉四六。演出兼の福北氏であるが、新制作座や、山口のはぐるま座が荒らして(?)いく地で過労による倒れを何回もくりかえしてきたその熱演に頭が下がるものの、演出兼ということがわ

ざわいしてか、もう一つふっきたリズムのあるつくりになっていない。初演から吉四六を演じてきた役者がおりたためやむをえずなのだが、演出の眼は他の役者をみる眼とならざるを得ず、それがまた自分にかえてきて躍動しきれないもどかしさとなったのではあるまいか。彼のマスクとほけた土の香りのする持ち味が生かされればもっと楽しい舞台になったろうと思う。

話し合いの席上、役者側から、何回かやっている、新鮮味がなくなり、新しい発見でなくて悔性を感じるという発言がされた。これは大切な問題である。移動を数多く経験している演集などと交流すると共通する何か、それは浦氏(演集)のいう演出の厳しさが必要ということもあろうし、役者相互の刺激のし合いもあろう等々、確かめあえることだと思ふ。

スタッフでは、移動用の引き幕といい、びょうぶといい、三味線効果といい行き届いていた。ただ一致して指摘されていたように暗転が多く、それがずいぶん流れを切ってしまった。明かるいまままで進めてはどうか。そういえば、一度、狂言と取り組んだらどうか。細を打つところ、にわとりを追うところ、

ろ、走るところ……もう一息でもっともっと面白くなり得る場面に示唆を与えられるかも知れない。

上野はこのお芝居を今まで七千人余の親子に観てもらい、一万人を目指しているという。この種の舞台は特にお客とのかかわり度変わりもするし、生きてもくる。福北氏はじめ上野の役者の面々には、そのかわりうる柔軟さが備わっている。今回のブロックゼミナールでのモデル上演が、上野の努力に報いるだけの触発を与えたとはもちろんいえないが、これがきっかけとなって、東リ演中部ブロックの中でも地道に歩み続ける上野市民劇場の、一層充実した活動を願ってやまない。

翌日の大リクレイションというか、運動会は、参加した演集の田中啓子さんより感想文を寄せられているので要約紹介させてもらい報告にかえたい。

「赤、白、黄、緑にわかれ、各劇団入りみだれての珍競技は爆笑の連続でした。玉入れからはじまって二人三脚、あめ食い競走と続き、ビール早飲み競争では我がチームの大勝利。賞品のトイレットペーパーは早速使わせていただいております。最後のメインイベントは、

トは借り物競走。靴下をむりやりめがせて持っていく人、はちまきだ、水筒だ、風船だ、女の子だと全員でんやわんやの大騒ぎのうち幕となりました。演集の中しか知らない私にとって、同じような芝居をしている人たちとこんな楽しい一日を過ごしたことは素晴らしい励みになりました。夏のゼミにはゼミダンナ様もひっぱっていいこうと思っています。」……

東リ演にとつて、中部ブロックにとつて次の年度はどんな展開になるだろう。ブロックとしても、スタートさせた創造委員の活用に行きづまりがあるし、最近ふえている親子劇場についての話し合いなど課題は多い。

今後の討論や、東リ演総会、ゼミなどを通じて、ともにこれからをさぐっていききたい。おわりに、ブロック運営委員の久保田明氏の労、また東リ演事務局(はぐるま)のバックアップなどに感謝を表してペンを置く。

(六月二十九日記)

戦後新劇の悲劇的体験(3)

——所謂「五〇年問題」を語る——

宇津木 秀 甫

7の続き

私は、文工隊の移動公演と本稿で書いてみたが、実際に京芸では文工隊と呼んでいました。あれはやっぱ文工隊かも知れませんが。

古いアルバムを見ると、一九五二年夏に奥丹後へ出かけた時の写真が貼ってあって、当時を思い出させてくれます。この時私は演出助手で同時に一種の政治指導員として加わりました。劇団員ではなく客員で、劇団員五名の編成。先きのりが一名いました。

一枚の写真は、加悦小学校の裁縫室を借りて現地での再稽古のナップ。むこうで疲れた女優が仰のけに寝そべっている。吉田義夫さんが演出している。これは、劇団主宰者の岩田直二・ガンさんから、「文工隊に出た連中が農村にとまどって、のびている。激

励にいつてやってほしい」と云われて、演出といっしょに出かけたのでした。現地に着くと劇団員は実際にのびていました。私は、革命的楽天主義という言葉を持ちこんで一行を上げました。

文工隊とすれば、今日からみても、当時のレバトリーは多彩でした。

最初が人形劇「魔法の森」——これは悪い狼をやっつける動物達の、三十分足らずの一幕もの。会場に必ずつめかけてくる子供にうけたし、大人にも珍らしがられました。正義心を昂揚させるものでした。次が、まんざい。これはかなり即興的な味のある、いかに文工隊らしいもので、のちには劇団に三組のまんざいがありました。次は笑劇「次郎楽山子」、狂言脚色の、罪のないお笑いもの。笑いを大切にしていたのは、京都で労働者を

対象にして労働者そのものとして活動した経験のたまものですが、笑いを農村に持ちこむのに、新劇団としては内容が稀薄でした。これは四〇分ぐらいのものだったと思います。これで一時間十分以上は費している。かなりナンセンスが目立つ。多彩と云っても、前半ではこういう弱点がありました。いわゆる切り狂言には「脱走兵」という一幕ものがありました。これは、官軍に徴発された農民が脱して家にもどってかくれるが、捜しに来た官軍の士官に妹が手ごめにされかかるので、現われて士官を背後から射殺してしまおうという、ドラマづくりも古風なものでした。「脱走兵」の背後には、実力の武装斗争を呼びかける思想があったとも云えます。それは感情的で、被害者意識が爆発するだけのので、単純素朴で、もっぱら煽動的なもので

した。観客は幼稚に反応し、官軍の士官を怒り、脱走兵とその妹に同情し、声援を贈りました。

これは多彩と書いてしまったが、考えてみると、全体としては思想性の乏しいものであったのです。でも、劇団では多彩だと思いでいましたし、実際に人形劇あり、まんざりあり、笑劇あり、お涙頂戴の煽動劇ありで、それを五名でやり切るのでから、ある意味でバイタリティのある、たいしたものがありました。

これは文工隊として、公演のあいまに何か政治的アピールが行われるのなら、そのアピール効果は大きかっただろうし、ほんとうにたいしたものになるはずのものでした。しかし、実際にどのように政治的にアピールしたか、というと、そのへんがあまりいじりませんでした。

地域で文化活動しようとするグループを支援し、激励し、コネをつける点では一定の成果がありました。

先のが青年団をあげまして、青年団主催演芸大会ということになっているケースが多いようです。そういう時、本隊が到着する前に村の駐在警官が「京芸はアカ」と妨害をし、村人に不参加を呼びかけていたというケ

ースがありました。青年団が農協のトラックを借りて本隊を迎えにきてくれるというのを待っていると、やってきたトラックに警官もさっと乗ってくる。村にはいるとシンとして

青年団役員が困り顔でヒソヒソ内緒ばなしをしている。こっちはファイトを燃やして、創意というのか、アコデオンと人形を持って呼びこみにでかける。

夜になると村人は続々とやってくる。私たちの呼びこみが効を奏したのです。しかしよく聞いてみると、警官が「わしもトラックに乗って一緒に村へかえってきたが、一人べっぴんの女優がいた」と云うてまわって、それが宣伝力になって村人がどっと来た。……と、こういうこともありました。素朴で、まことに牧歌的な村人や警官に迎えられたわけ

で、頼りないレバトリと演技、無装置に近い舞台で、それでも村人にうけました。「大正時代に芝居を見たことがあった。もう一生見られないと思っていたらやってきてくれた。ありがとう」と云った老人がいました。今日、テレビの普及した状況下ではちょっと考えられないことも知れませんが、「脱走兵」上演中のことですが、舞台は寺の本堂

で客席も本堂、しきりも幕があいてしまおうとなくなってしまう。客席に酔ったおやじさんがいて、舞台上で貧農の娘として泣いて

いる演技者の前へノコノコとやってきて登ると坐りこんでしまった。「泣くな。わしが恵んでやる。さあ、このリンゴを喰え」とリンゴをつきつける。貰ってはいは劇にならないし、役者が困ってしまったということもありました。中国で革命後のこと、山村に新劇が

移動公演をしたところ、演技で煙草を喫っていると客席から村人が舞台へあがってきて、「煙草の火をかしてくれ」と云ったということを知ったことがありますが、同じようなことが起ったのです。とにかくこういう客ですからよろこんでくれた。「次郎案山子」は少し学芸会みたいところがあるが、「脱走兵」は、「芝居ではない。芝居ではないが、ほんまのことや。よかった」と、一定の感銘をうけてくれました。公演の翌日、帰えろうとすると道で会った村人がそういう感想をそっちょくにはなしてくれ。そうして、可哀そうな娘の役をやった女優は「元気をだしなさいよ」とはげまされるし、悪役官軍士官をやった男優は、「あんた、よう、あんな悪いことするなあ」とまだ憎まれている。人間的にも

とも悪いやつだと思われてしまっている。そういうことがあります。

泣き笑いの感動で村人と別れるのですが、いま思うと、そこまですべていながら、どうしてもっと劇的なものを持っていかなかったのか、考えさせられるのです。「脱走兵」が被害者意識をかき立て乍ら、実は、実力の武装斗争を宣伝したつもりでいる。その点は、いまになると全くやりきれぬ思いさえするのです。

もっとも、劇団にもどると、事態をそっちょくに評価して、山村に演劇の芽をみつけたのだから今後も再々でかけようと、まっとうな論議も出て、また文工隊にでかけていく決心をするという、正しいとらまえ方もありました。しかし、それは実は空論だったのです。

かつての間には、こういう私の云い方に反対する人もいるに違いありません。というのは、農村にめばえた演劇の芽を育てるために、青年団の演劇公演に援助の人を送ったり、演劇サークルを育てるため様々の手だてを尽しましたし、遂には農村青年が京都にできて劇団に加わりたいと申し立てるようなこともあったのです。このような事実があっ

ても、どうしようもないほど、この方向の努力は実は結局のところ空論だったのです。それはどうしてかという、先に書いたような村人となまなましい交流ができる、そんな山村に、日本共産党の分裂した一つの派「主流派」の「新綱領」に従って派遣された山村工作隊のオルグが潜入してはいる。党の武装赤軍をつくる目的で、どこかの谷間の小屋に潜んでいるオルグが、この公演の席にまぎれこんでいて、客に気づかれぬようにしながら劇団にちよつと挨拶して、またかえってゆく。私はそういう「戦士」から、あるとき、

「駐在は横暴で、村人はまったく庄迫されている。地主はおかげでのはほんとしておれ。村人を激励する必要があると考えた」と「戦士」君は云いました。私は、「それは必要なことですね」と云いましたし、「それはなしを聞いた二、三の劇団員は、「民衆を武装斗争で立ちあがらせるために、おたくらはそれに對してどういうことをやられるのですか。秘密の非合法活動だから、喋れないでしょうが、許される程度のことを教えて下さい。私たちの演劇による工作をすすめるうえで参考にしなければならぬと思います」と云うよ

うなことを云って、耳をかたむけました。

「戦士」君は云ったのです。「ボリ公をやっつけてやろうと計画をたてました。イノシシを捕えるワナを、貧農に訴えて貰いました。よく説明したんです。そうして、夜中に、駐在所の前にワナをしかけておいた。あいつはきついですよ。ひっかかるとパチンとはねて、殺傷できる。ところがねえ——」私は驚きました。「ところが、ボリがからからに、近所のおばさんが、用事があって行って、かかってしもうた。秘密だから、誰がしかけたかわからないが、ワナをくれた貧農と私のあいだは、せつかく近づけたのが駄目になってしまった」

私のあまりのことで、質問しました。「その貧農というのはどういう人ですか。貧農に依頼して地主的封建勢力をやっつけるという方針のため、貧農というのは具体的にどういう農民を指すのか、僕はわかりきらんで困っているんです。そのワナをくれた貧農はいったい……」私が云うのを聞いて、彼は云いました。「今夜の芝居の、あの脱走兵みたいな境遇の農民ですよ」……うまく咬み合

わなないまま、終ってしまいました。「とにかく今夜の公演はよかった。村人が

あんなに生き生きした表情をしているのは、はじめて見た」「おかげで、村の誰ともはなし合える話題ができた」——「戦士」はそう云って、まっくらな谷へ消え去りました。

このような「戦士」のしてくる評価をもっとも重要なものとする思想と方針がある限りは、山村で演劇の芽を育てよう云々でもそれは空論、論でなくて空しい錯覚、あるいは徒勞なのです。

8

文工隊は好評だったので。村人からもよろこばれて、「また来い」と云われ、「戦士」からも「ほんとにごくろうさん」とほめられて、当時の共産党京都府委員会からも、高く評価されました。その結果はどうだったか、と云うと、そこで悲劇にはまりこんでいったのでした。

文工隊は意気込みたかく新しいレパトリーを仕込みました。人形劇は「和尚さんと小坊主」(これは今日でも人形劇団京芸のおハコになっていきます)、次はまんざい、その次が歌芝居「佐渡きつね」幻燈「実力山城国一揆」そうして続演の「脱走兵」であったと記憶しています。

伝と短絡させよう云う発想で、この「山城一揆」も史実に忠実であるというよりも教条的に解釈してつくりあげたものでした。(これも後に労音によってミュージカルにつくりあげられました。)

文工隊では、スクリーンに幻燈画をうつして、スクリーンの裏で俳優が集って朗読したり台詞を云う形式でした。この様な間に合わせのものが成功する筈はありません。農村では前回の文工隊移動と同じように、村の演芸会として受け入れられることもありましたが、そういう際には全員が「これは無理やから止めよう」と打ち切りました。(ある村の敬老会では、打ち切ると上演時間にアナがあくので演出班の私がとうとうにわかに落語をやる云うような事件もありました。これは笑う人が皆無で、あわてて私は、落語のオチもそこそこに、次のレパトリーの解説を汗だくでやりました。)これと「脱走兵」とが、文工隊としては内容的につながるものでした。

歌芝居「佐渡きつね」は京芸以外でも再々演じられました。やはり狂言改作のものですが、大衆の要求としてある「笑い」を提供するものとしては、弱点があるものでした。村では「学芸会みたいや」と云われましたが、

まんざいというジャンルが劇団の中で次第に浮びあがってきました。当時の劇団内ニュースに臼井昭伍が次のように書いています。

「(京芸万才は)根強い活動力を持ってはいるが、一方では、脚本が無い芝居が面白くないと云う弱点がある。第一に脚本だが、これが出来ない。おかしいんだ。苦しみのどん底にある大衆は笑いを一番求めている。だが生きるか死ぬかの生活にあっては本当の笑いは只一つ諷刺だけである。くすぐりでは駄目なんだ。ところがこの諷刺という奴、苦しい世の中であればある程豊富だときている。江戸時代から落首、チャカボコ、オッペケヘーが庶民の中に流行したのは実にこうした需要と供給が完全にマッチしていたからである。さてそこでセンスが無いと云う問題になる。たしかに演るにしても書くにしても万才のセンス・テクニクは必要であろう。だがそれより先にこの事件をどう現せば又はどうしゃべれば大衆は(あんちゃんからおばあちゃん)楽しく理解して呉れるだろうか云う親切心の問題ではなからうか。これを皆で突込みようじゃないか。(中略)

既成の万才及び万才師の概念から抜けきれない事、何か恥しい仕事をしている様な気持ちが残念乍ら再々演じられました。他に作品がなかったのです。

相変わらず舞台づくりはおそまつで、文工隊だからそれでよいのだと劇団では割り切っていました。しかし、それゆえに次第にまったく新劇団らしからぬ舞台をつくるようになってゆきました。

ある村の、寺の本堂で公演中のことでしたが、その夜は雨でした。脱走兵を演じていた若い俳優が、舞台で、妹を手ごめにしようとする士官をやっつけよう、士官の背後にしのびよって銃をむけました。楽屋では、手のあいた役者が効果係りで、焰硝を金櫃でたたいて銃声を出すことになっている。ところが楽屋裏が本堂の外の縁側で、湿気があって、たたいもたたいも音が出ない。カチ、カチ、カチ。いくらやっても発火しない。舞台の役者、脱走兵はたまりかねて、とうとう、口で「バーン」とどなってしまった。これには射たれることになっている役者の方もびっくり。キョトンとして、脱走兵の方をみてから、(そうか)と察しがついて、おもむろに倒れて「やられたァ!」と叫んだ。幸い客はシンとしていてくれたが、楽屋では吹きだして笑いがとまりませんでした。

とその裏返し、こんな事も出来るんだぞと云うヒロイズムがついて廻る。だからテレビやヤケにさわいだりする。練習が不十分で不真面目になりやすい。」

新劇団が万才をうまくやる必要があるかどうか。それが問題にならなかつたのです。新劇団である以前に、大衆の要求としてそれが必要だと考え、それに必要なセンスがないと嘆きながら、臼井昭伍が云うように、テレビやヤケになつたりしながら、劇団はとりくんだのです。京芸独特の芸人根性(?)がこの頃から頭をもたげはじめました。(後には、京芸の芝居は面白くないところもあるが、役者一人一人は別に芸をもって面白くと云われたりします。)

特に問題となるのは幻燈「実力山城農民一揆」です。これは確か京都の民科歴史部会と協力してつくられました。(同様にしてつくられたものに「紙園祭」があります。これは最初大学生の文工隊によって紙芝居にされ、農村工作にまわされました。のちに西口克己が小説に書いて評判となり、労音によってミュージカルになり、映画化もされました。)

農民なり町衆なりの実力斗争を、日本共産党の一部の誤った武装斗争、武力革命路線の宜しくないからそういうことが起る。銃声が出なければ、銃を逆手にふりあげて、士官を打ち倒したってよい。まともな、恵まれた舞台では役者の欠陥のアラが出ないこともあるが、文工隊では欠陥がはつきり出てしまうようなこともあるのだ。もっと演技を身につけよう——こういう相互批判があつて交わされました。とは云え、役者にしてみたら、いつ何時、楽屋で銃声がでるか分からない。たまたまものではない。

これは、やはり今日の京芸では創成期のメンバーが若い劇団員に語る「神話」の一つになっていますが、大笑いの材料だとは云ってはいけないものです。そうは云っても、笑うしかスベがありませんが、ここに、文工隊の演技の一端が露出していると思えます。

新劇らしい創造の姿勢とは怖ろしくかけ離れて行ったのです。

日本共産党の一部の派(主流派)の武力革命を打ち出した「綱領」は、革命を反帝反独占の民族民主革命だと規定し、革命の主力は労働者と貧農の同盟軍だというものでした。農地改革が不充分で、村では地主と小作の矛盾が基本矛盾として残っているという判断を

して、村の地主を武力で打ち倒すため貧農を中心にした村人がたちあがる必要があると考えていたのです。中国共産党の革命斗争をそのまままひきうつしたもので、貧農に依拠して革命の主力赤軍をつくらうという方針ですから山村工作隊が組織されて、(それが前記の「戦士」君たち)その支援のための文工隊なのです。その後選ばれたレバトリーには「鉄砲伝来」「縁談」など、農村ものが中心となりました。

劇団京芸では、この様な文工隊を一面では農村むけの、啓蒙運動とも理解していたことや、それが空しいものであることは既に書きましたが、その空しさは、実は劇団にとっては何れもものでした。

質的にはあまり変らないものを、一九五五年頃には、もはや文工隊と云わないで、移動公演と呼ぶようになっていました。この移動公演に劇団は大きな力を傾け、傷を負うようになっていきました。

9

一九五五年、淡路島に出かけた移動班(班長藤沢薫で藤沢班と称した)の終決会議の報告は悲惨なものです。報告は次のようなこと

を書いていきます。

「☆吾々の弱い点を知らされ、いろんなことを学んだ。漁村で評判が悪かったところから、吾々は常に反動文化と対決しており、大衆はほとんど反動文化政策に毒されていることを身をもって感じた。特に漁村では生活が苦しいために(漁村にはきまってアンちゃんがいる)真面目になるか、デカタンになるか、どっちかで、中立はない。青年は健康な文化を求めているにもかかわらず、要求が満たされないうえ、ヤクザ的になる。反動文化(ストリップ、女剣劇)はそこへおとし入れる役割りをはたしている。福良で強い反撃をうけたとき、吾々はそれに対してどう処してよいかわからなかった。現状に合わせて少しアチャカカじみた喜劇や、内容よりも派手な舞台を見せて、音楽を入れて、観客を舞台にさそいこむと云った大衆演芸的な淡路のサークルとの座談会で教えられ、大衆の闘いを忘れて、吾々はあまりまじめすぎると考えたり、農村と漁村では生活のテンポが違うから漁村では受けられないだろうという表面的な解釈が出て来たり、あまり強いエロ・グロ文化の影響に、主催者に迷惑かけるだけだから由良公演を打ち切ってはどうかと云う意見も出

たりして、てんやわんやの状態だったが、結局出されたことは、農村でも漁村でも多少の違いはあるにせよ本質的には同じ問題で、吾々の欠陥が反応の率直な漁村で一番強く現われて来た」と理解すべきだ。

ともすれば欠陥ばかり目につき過ぎて、成果を見失い勝ちだが、吾々は成功、不成功にかかわらず反動文化の只中に新しい文化をもちこんで行ったのだという点を評価しなくてはいけない。阿那賀では一般に大変な不評だったが、一般の反撃は必ず青年団で問題にならないを得ないだろう(今までの股旅ものと京芸のレバトがどう違うか)、福良では、公演の数日後、仲仕の共同組が、風の強い日、荷物を運んでいて「こんなところを芝居にせんとあかん」と云っていた。今まで芝居といえば現実ばなれた夢の世界か、苦しみをまざらわす様な刺戟の強いヤクザものばかりだったのが「縁談」を見て、そんなことが出てきたのだろう。

阿那賀で出された意見で、封建性とか何とかむづかしいことをセリフでしゃべって考えるのはかなわん。もっと動作だけでわかる芝居をもって来て呉れ。出て来る人物に変化がない(芝居の中で発展しない)など、

いろいろなことが出されたが、大衆と共に考え、闘う態度の点でまだまだインテリ的な欠陥を持っている。」

これは藤沢薫が記したものです。いかにもまっ正直な、受難者の藤沢の文章です。それだけに、あらためて読んで、ぶっかった壁がよくわかります。

藤沢班の山本達雄は、劇団への便りで次のように書いています。

「劇団の移動公演のレバに対する考え方の貧しさ」

「(漁村の)人々にとって娯楽は短時間に全神経をぶちこんで享受したいという欲望となる様だ。ひいては目をうばう様な華やかさ、号泣したい様な悲しさ切なさ、「とーすい」させるような官能的な音楽、怒りと、極論から極論を要求してくる。だから芝居に対する期待は想像を絶する大きなものだ。」

そこへ僕達は行った。『京都の劇団』『座員六十人、少くとも四十人は来るだろう』『全国を廻る劇団だ』

幕があった。黒幕だ。音楽はない。カッターシャツを着て役者が出てきた。そこでガタンと落ちてしまう。ガラガラとくずれてしま

それで、すごい野次と怒号の前にびっくりしてしまふんだ。『何や、あの芝居』けたいな奴や、素人やということになったらしい。(略)

劇団のレバ決定のズレ。『息子』『脱走』『縁談』——『息子』の現代的意義を云々したが『まだ人情物だ、単なる』と僕は思い信じている。只アレだけのものに過ぎない。だけど街の人は人情物も欲しがっている。だから入れてもいいが、此の三本の中で考えると全体美しく、朗らかなものが一つもない。万才も、普通の服装だ。踊りはない。皆は芝居の楽しさを要求してる。『佐渡狐』的な音と色と内容の充実したものが。『次郎かがし』の様な文句なく笑えるもの。『雷神長者』なんていうともういけない。(略)

『ドサ』はいかん。これがいいとって我々の芝居をおしつけて、『ほんとにええなあ』という声がかかるかどーか。それで成功するなら革命は昨日成功してるはずだ。(略)文芸班も出かなくちいかん。岩田さんも同じだ」

もう一度書くが、これは一九五五年のことです。「革命は昨日成功してるはずだ」と書いているが、この頃、もう一種の挫折感が文

面に出てきてしまふようになっていた。この年の七月二七日・二九日、日本共産党中央は六全協をひらいて、分裂と誤りを克服する第一歩をふみだしました。六全協によって、党は「いまは革命の時期ではない」というようなことを党員に説きました。この「革命の時期」と云うのは、無論、武力斗争による革命の決定的な時ということ、そういう時期でないことは自明のことでした。しかし、それによって、忠実な党員は挫折感をはっきりと感じて、苦悩するようになったのでした。山本達雄には六全協の数ヶ月間、すでに挫折感があったのです。そうして、それは山本達雄だけではなかったのです。

10

ここに到るまで、つまり劇団員は六十名を越え、淡路に小班で移動して失敗するまで、実は劇団京芸は、既に書いたこと他に、もっと活躍し、多くの成果をあげていました。

既に書いたような、文工隊をやって、それをいつのまにか移動公演にもちこんだというような、そんな悲劇だけなら、ことは単純です。しかし、目をみはるような活躍をして、成果もあげていた。だから、六十名を越す大

劇団になっていた。それで、悲劇はいっそう深刻になったのでした。

土方与志を招いた京都の新劇合同公演「検察官」の成功は、京都労演の結成の大きな力になりました。文工隊→移動公演や、人形劇による京都市内をはじめとした西日本全域への公演などによって、一定の支持を受け、本質的に空しいものだったが、しかし京芸独特の大家路線というものから役者には大衆の生活感覚があつて、東京の新劇団にはない生々しい舞台をつくることも出来ました。第一回に書いたような京都民権戦線の力や、文化政策としては誤っていたがエネルギーシユな労働者の京芸の活動による自立劇団の発展、くるみ座の参加、土方与志の演出などプラスに作用して、「検察官」は実際にもりあがりました。

この時、合同公演に参加した学生演劇の連中のうちには、「数日中によいよ革命蜂起だ」と信じているような情況分析が全く狂ってしまった共産党員もいたのですが、それにもかかわらず「検察官」は成功しました。それは古典劇だと云うこともあつたのでした。

その頃、京都では、共産党が主催した大衆

集會が警官と衝突することがしばしばありました。警察権力の挑発と、共産党の極左冒險主義がぶつかるわけで、そのたびに純真な、戦闘的な活動家が逮捕され、負傷してしました。「検察官」の公演中、ロビーにきた谷口善太郎が、「犠牲は出さんようにせんといかん」「挑発のつてはいかん」と、暗に戦術上で反対する旨の発言を私や同席者にしていくことが忘れられません。

「検察官」の成功は、云わば火薬のうえにのつかった、古典劇ならばその成功でした。土方与志の態度からは、共産党の演劇分野のリーダーのあいだに深刻な苦悩があることが感じられました。私は、党の指示に従つて党のためにカンパ集めにまわる土方与志の抱持ちとして何日か行動を共にしたのですが、くるみ座の毛利菊枝の住み家を訪問し、そこで土方と毛利が戦前の新築地の頃のはなしをしたり、毛利菊枝と親戚になるリアズム派画家のリーダー内田殿のことなどが話題になつても、土方が共産党のいまやっていることについて云いにくそうにしている、ちょっぴり口に出すと律義な毛利菊枝が困惑してしまつたのでした。カンパの額はほんの少額で、毛利菊枝は出したくないよう、土方が来た

のだから仕方がないと云う態度でした。土方はまたその少額のカンパ額のため、その額より多額のタクシー代を自分の財布から出しているのです。そして、私に、東京での、村山知義らとの関係のむつかしさについて語ってくれるのでした。（土方は所謂主流派に忠実な党員だったが、村山は主流派から批判されていたことがありました。）

東京では、主流派中央の文化部の主導によって人民演劇集団という演劇グループがつくられていて、雑誌「テアトロ」を日見だとして、「新劇場」という雑誌が発行されていきました。京芸はこの人民演劇集団の會議に劇団代表が出席して、「テアトロ」派でなくて「新劇場」派だと劇団内では云っていました。そういう京芸が、新中国の老舎の作品「北京のどぶ」を上演して、画期的な成功をおさめました。

「北京のどぶ」は、はじめ京大の学生劇団「風波」が上演したものを岩田直二がとりあげたもので、吉田義夫の客演（確か途中から京芸に加盟）や劇団風波の学生の客演も得てくれた舞台となりました。この作品は京都だけでなく大阪でも労演例会となり、やがて東京公演、北海道公演と発展しました。

この公演の成功は、京芸の情熱で体あたり的なリアズム演技と、新中国の作品をはじめて見せることに對する民衆の期待、新中国への親愛の情がこめられて、客席も興奮するというかたがたが咬み合つてもたらされました。東京公演だけでなく、北海道の炭坑でも熱狂的に支持され、同時に「いつ中国から引き揚げてきたのか」という質問を受けたのでした。

つまり、「北京のどぶ」の成功は、創作戯曲による成功ではなく、「検察官」が古典と云うことで成功したのに対して、これは新中国の作品と云うことで成功した。それも、たまたま劇団名が京芸で、中国の京劇とまちがえられるような、だから帰還者劇団（楽団カチューシャはソ連から帰還した楽団で、すでにソ連で抑留中に公演をはじめていて、その帰国公演が熱烈に歓迎されました。それと同じに思う人が、中国で形成して帰国した素人の劇団だと京芸を感嘆した）とおもわれて拍手をうけた、そんなことも伴つて成功したのでした。

京芸にとって、「北京のどぶ」の成功は劇団の存在を示すチャンスでした。そのため、各地への移動を企画し、それと同時に、その

公演がない時は既にあげたような移動公演をやるというあんばいでした。「北京のどぶ」のような成功を移動公演でも、ということになるのですが、京大の劇団風波のメンバーの中には、京芸の「北京のどぶ」に参加して、そのまま学業に就けない人も出ました。それは、その人々にとって深刻でした。

山村工作隊に地下の党の指示で参加した、そのため家や職場を離れた犠牲的な党員がいましたが、ちょうど、それと同じように、京大の劇団風波のメンバーは劇団京芸に拘束されたのです。いまの新劇人には理解できないことですが、一種の真剣さで會議がひらかれて、泣きづらで参加している学生もいました。そうして、確か、そのような学生の中から自殺者が出ました。

妙なことに、私は、いま、その自殺者の名を覚えていません。自殺の原因はノイローゼということであつたかとも思いますし、まちがっているかも知れないが（まちがっているとしたら大変悪いことを書いたことになるのですが）、ちょっぴり女性問題がからんでいたようにも覚えています。

「民衆の旗赤旗は戦士の屍をつつむ……」と云う革命歌があります。戦士の屍をのりこ

えてすすむという気概は崇高なものです。しかし、当時は、半非合法の状態、ソ連のスターリン主義の影響もあつて、少しいびつになつて、自殺者が出て、一方で「革命的楽天主義」を論議して、平然としているむきがありました。

「検察官」「北京のどぶ」の成功は、次には日本の創作戯曲を、「日本のどぶ」を上演しようという方向に、当然ながら発展していきました。そして、上演候補の作品として、私の「米どころの報告」がえらばれて、私は京芸の悲劇にまきこまれていきました。

「米どころの報告」は、昭和二十四年度の産米を米軍が直接干渉して、強制供出させた実際の事件に、農民とともに抵抗してたたかつた私のルポルタージュでした。朝鮮戦争の前夜に、占領米軍は法秩序を無視して、日本政府の手を介しないで直接に村にあらわれ、凶作でやんでいる農民から米をとりあげていきました。この中で、農民は自衛のためにさまざまの行動を展開しました。この農民を激励し、組織するために、私はたたいの方向を指導してくれるように、共産党に求めました。しかし、党は明確な指導方針を持ち得ませんでした。

私は、当時はまだ共産党員でなく、その事件のあとで党へはいったので、会える限りの党の幹部に意見を求めて、農民が団結して生活が守れるようにしようとしてきたのです。

当時、共産党の中央の農民部長は伊藤律で、伊藤律は、貧農に依拠して上層農民のカクシ田をあばいていくことによって農村の民主化をすすめることを主張していました。これは誤った指導だったのですが、私もはじめはその指導に従って村の中でカクシ田のありそうな農民にネライをつけて、小農を煽動したりしました。私の父が村長で、農業委員会の責任者であり、秘そかに農民組合に加入していたという事情もあって、私は村の役員の会議の模様を手にとるようにわかるし、私がその情報を漏らすと、農民から一定の信頼を集めることができました。しかし、伊藤律の指導方針では、米軍の直接介入とたたかうことはできない。米軍の非道さを堂々と明らかにして、本質を照らしだすことが必要でした。

私の疑問にこたえるため、党のある幹部がとうとう中央委員会に電話をかけて、徳田球一書記長を呼びだしました。困惑した書記長は乱暴に、「俺は農民のことはわからん」ととなりました。共産党は農村の実態がわから

ないし、農民のたたかうエネルギーのありかにつかまれている。そう知った私は、事件後、「わからん」と云った中央に事実を訴えていくために戯曲で報告をまとめ、題名も意図の通り「米どころの報告」とし、この創作の中で共産党に入りました。

作品がまとまった頃は朝鮮戦争に突入して、共産党中央は分裂したまま非合法状態になってしまっていました。私は「米どころの報告」を旧知のガリ版印刷屋にたのんで印刷しあげましたが、製本できると印刷屋は米軍の監視の目をおそれて十部ぐらいづつ持ち出してくれと云う始末です。私はそれを党や各団体に配りました。そういうところがバラムドってきませんでしたが、やがて反響が方々から伝わってきました。大学の農学部や経済学部で教授をまじえて討論したというはなしや、東北の農民組合の人から激励文がきたりして、私は元気づけられました。

劇団京芸は、そういうことで「米どころの報告」をとりあげようとなりました。しかし、戯曲のまま上演することは不可能でした。占領軍の監視があって、上演したら占領政策違反ということで逮捕されることも予想され

ました。

例えば、私はこの作品を発表するまえに、朝鮮戦争下、米軍の軍事輸送の拠点になっている国鉄吹田操車場の労働者のたたかいをルポルタージュした「連結深夜作業」という一幕ものを書きましたが、これは前記人民演劇集団の雑誌「新劇場」が募集した反戦戯曲にトップで入選しました。それはレッドパージのあと国鉄の職場にのさばった民間派幹部を吊しあげながら平和署名を集めはじめた国鉄の職場を描いたものですが、上演したのは龍大実験劇場で、国鉄から追放されて、なお労働組合の統一のためがんばっていたレッドパージ組の統一委員会の協力を受けて、衣裳等を集めました。この上演の日、会場周辺は警官がとりまき、会場の中にも私服がまじっていました。前進座が弾圧をうけていた時代で、前進座はまともな公演もできなかった頃ですから座の幹部は台本を見て、「こんな作品を上演したら逮捕される。やめた方がよいのではないか」とまじめに忠告してくれたこともあります。しかし龍大実験劇場は勇敢に上演しました。まあ、こんな状態だから「米どころ報告」は改作が必要でした。

劇団内で改作委員会ができて、私も加わり

ましたが、そのうち、上演可能な方向への改作ということ、日本共産党主流派の綱領に従った方向での改作というように変質してゆきました。

既に書いたように、京芸は「一週間の記録」というルポルタージュ劇で最初の大きな飛躍をしました。それは熱演で好評だったし、「米どころの報告」はそれを更に発展させたものとなるはずでした。

しかし、文工隊と、その発展した(?)ものとして移動公演をやっている(前記のように淡路島でとうとう岩礁に乗りあげたような)劇団が、一方で「北京のどぶ」の成功の余勢で「米どころの報告」を改作しようとするのですから、私をはじめにシエイクスピアの五幕ものの形式からうんと学びたいと云ったことなどはすっ飛んでしまいました。

「北京のどぶ」の老舎には他によい作品もありませんが、近代劇の劇作法としてはあまり優れたものと云えないが小説家らしい光った場面と感心するような台詞がありました。劇作法の欠陥を考慮して改作を充分にするほどの力は京芸には不足していました。(台本があるのを見てもみましたが、テキストレジはかなりやっていますが、劇作法に迫るものでは

ありません。)だから、「米どころの報告」の改作にあたっては、「米軍をじかに出さないで、それを充分感じさせるように根本的に構成しなおす」ということ他は、「もっと貧農のたたかいを明らかにできないか」「村の半封建性が描かれていない。農民はもっと遅れたものではないか」「波乱万丈、もっと深も笑いもあるものにしてほしい」などと云うもので、改作ではなく、別の新作となっていくべきでした。

主観的教条的な改作、岩礁にのりあげた移動公演の経験をぶつけた改作は、成功するはずではありませんでした。

11

「米どころの報告」の改作と、その失敗を詳しく書くことは省略します。とにかく、より真実に肉迫し、そのドラマ化を追及すると云う姿勢から後退し、手を加えることにとんでもない方向におちこみました。「報告」と題名をつけた、その意図などは吹きとんでしまいました。

「大阪の農村がはたして米どころと云えるのか、米どころとは新潟の方のことではないのか」「村人が『われわれは』などと云うの

はおかしいのではないか。もっと遅れていて個人主義的なのではないか」というようなおかしな意見、農村をまったく知らない発言が多くて、近代の農民組合運動、小作論議などを体験した近畿型農村のことは一般にわからないとする議論に、私もはじめは抗いました。が次第に負けていきました。村の半封建性をあばき、貧農に依拠して反封建のたたかいをすすめて、しかもそれを実力武装蜂起に結びつけていくというのですから、私もそういう誤った党主流派に属しているものですから、混沌としてしまいました。(広島月の曜会の手による「河」の度重なる改作はその点で興味ぶかいものがあります。)

劇団内ニュースに記載された「米どころの報告」上演延期について」をよみかえすと次のようなことが書いてあるので、その悲劇性を私は痛感します。

「『北京のどぶ』を上演した京芸が次に何んな仕事をするか——この期待をみたすかみなさなきは、全関西ばかりでなく全国的な演劇運動の歩みを決定する重要な問題だ。」

「植田が現地とのレンタル、岩田が中心執筆と手分けして最後の馬力をかけたが、宇津木多忙のため現地調査は出来ず、テーマ、幕

割の大体は出来たが、具体的に執筆にかかると問題統出……」

「初稿は、その事実をありのまま伝えただけで全体の構成、人物の形象化には大きな欠陥があった。実写に終止して、典型的な描き方というリアリズムの問題での弱さがあった。」

「初稿におけるスケッチの面白さ——それは現実の断片の面白さ——が改作毎に失われていくという結果になった。(略) 改稿の筆を進めるほどむしろ初稿に戻って行く結果になった。」

「幹事会は以上の経過を検討し初稿に可能な限りの筆を加えて上演するか、又は根本的な改訂を施すか、もしそうすれば四月上演は不可能という現状を討議した。そして結局後者の方針をとったのである。」

ここで人物の典型化とか云うのは、教条的な貧農の人物づくりであった。

思えば、私はここでは現実を主張し、内容的な改作を拒否して、米軍を直接登場させるかどうか、その一点だけで改作に加わるべきだった。矛盾した行動をとる農民を描くことによって、はじめて状況性が描かれるし、状況を真にきりひらく典型的な人物も見出せるは

ずのものを、私自身が文工隊に身を移して、狂ってしまった。

この作品は、後に若干の改訂で、関西芸術座が上演してくれた。そうして、その後、訪中関西新劇団のレパトリーとして選ばれた。その時、中国に文化大革命が起った。私は作者として自主的に考えて、そのような中国へ持って行って、むこうに迫られて改作させられる危険を感じて、訪中作品に扱われることを拒否した。これは正しかったと思うし、そういう正しい判断を、この一九五五年の段階でできなかったことが可哀しい。

「米どころの報告」上演中止は、京芸をいっそう悲劇的にさせた。人形劇班は活躍していたが、芝居班は淡路で失敗した方向を重ねるのであった。「米どころの報告」のかわりにチエホフの「叔父ワニヤ」があげられたが、これもテキストで失敗(！)してしまった。文芸演出部の持った悲劇性が劇団を危機に追いこんで行った。「北京のどぶ」で得た成果を奇妙な移動公演で喰いつぶして行ったのである。

「一週間の記録」から「米どころの報告」改作への過程で、ルポルタージュドラマの持っているドラマ情勢の迫真性そのものを拒否

した時、インチキ情況による情況ドラマが頭を持ちあげてくる。刺戟のあるものを、と云った形式主義にふりまわされる。京芸はドラマへの追及力を失ったのである。

仲武司の「西陣の唄」によって、その後一時救われるが京芸が五〇年問題によって身につけた悲劇性は仲々脱けきらなかった。仲の次作「網屋佐兵衛治」は、まったくドラマらしい追及を失っていて、戦時下の産業報告会のドラマになっていた。この時は、伝統となった合同公演の宝刀を用いたのだが、宝刀もこのようなドラマの前では錆ついたのである。

以上、私の体験を通じての、五〇年問題論議を一応終りますが、情況分析の狂いから共産党が分裂し、ドラマに於てまで情況性を軽く扱うようになり、一方で組織的にも混乱して行った様子が少しも読者のみなさんに伝わればうれいと思います。「あの時はああするしか仕方がなかった」という式の論を私は強く拒みたいのです。それは、あんなことをまたもやりかえすことにつながるのですから。新劇のドラマづくりを怠って、「選挙劇団」におちこむ誤りを、私は克服してほしいと心から願うのです。(以上)

劇団通信

演劇サークルやぎ

初夏の候、全国の仲間の方々も元気に活動されていることと思います。さて私たちが去る6月5日に創立5周年記念第五回自主公演「キューボラのある街」(作・早船ちよ、脚本・蓬萊泰三、演出・宇間太郎)を、伊丹文化会館大ホール、観客四五〇名で、教育委員会の後援も得て、10万円近い黒字を残し、成功裡に終えました。

本公演に際し、劇団・四日市市民劇場の森さん等にわざわざ伊丹迄来て頂き資料等の提供を受けましたことを紙上をお借りしてお礼申し上げます。又上演中に最前列に坐られたおばあさん4人は5時すぎより会場に来られ、開演と同時に持参の弁当を開けて食事されたのには、サークル員演技者も目を白黒させる一幕もありました。

次に今年度の後半スケジュールを記します
9月4日(土) 5日(日) 尼崎文化会館
第2回伊丹演合同公演
アルプゾフ作「イルクーツク物語」

12月 演劇サークルやぎ第一回親子劇場

題未定(於伊丹中央公民館)

(伊丹市千僧字船原二〇—九坂上方)

岡崎演劇集団

◇五月、本田英郎・作「勲章の川」を終えた所です。観客四六〇名、相も変らず頭打ちの状態です。岡崎での文化のレベルが遅れているとは思いませんが、地域に食い入る努力がまだまだ不足しているのではと自省しております。公演直前、トンダアクシデントがありました。公演前々日、主要の役を占める役者が交通事故にあい、入院という事態になったのです。前例のないことだけに、公演延期もささやかれましたが、ここで止めては、地域に根ざす劇団としての存在が疑われる、観客あつての劇団であるとの考えに立って、急遽、代役(演出者)をたてて公演に踏切りました。

◇来春は創作劇第二作が上演できそうです。座付作家夏目つとむ作「花祭りの里」以来のモチーフである、過疎を主題とした仮題「今だ、ぼくらの旗手は」が既に四稿を重ねています。劇団員全員による検討を重ねる中で稿をかき、来春には決定稿を目ざしています。

◇秋の第十六回公演は十二月五日(日)に定まりました。作品は未定ですが、八月一日に行われる新人公演(子ども劇場)稽古の中で、レバ選びの最中です。

(岡崎市元欠町三—一〇—三)

劇団生活舞台

昨年11月28・29日、創立20周年記念公演第2弾「他人の中」公演後、今年はまだ公演が持てていません。
10月に公演予定で、6月中旬に本を決定します。

8月には、九州、博多で西リ演総会・セミが開催されますので、仲間たちと御会いできるのを楽しみにしています。それまでには、10月に向けての稽古も本調子という所でしょう。

(福岡市中央区警固二—九—一八)

造形劇場

永いことご無沙汰、申し訳ありません。

劇団は三・四・五月の三ヶ月新本拠地へ移転の仕事に終始しました。「吉四六さん」に惚れこんで、未代迄、吉四六芝居をやりつづけよう、そのためには吉四六さんのふるさとである野津町に本腰入れて根を生やすには、土地も確保しようと思っていたところ、今度

町の中心部から徒歩十分、古代人も住みついたと云われる高台の一隅の松林三〇〇坪を入手出来、樹間を利用して大小五棟を建てました。夏は避暑地になる程涼しい筈です。農業をやる条件も結構そろっています。近くの山を歩くと山菜もたっぷりあります。これ迄のところは暑さ寒さにふれて、じくじく本も読めなかったのですが、これからは少しばかり人間らしい生活も出来そうです。東西リ演の皆様のお出でをお待ち申しあげます。

今年一月から七月までの公演日数四十五日、公演回数五十六回、上演校四十八小中学校・高校一校、一般五回です。夏休みは新しい作品の稽古に入ります。二期は高知県一ヶ月と福岡県内の巡演をつづけます。来年から又、鹿児島全県下を廻る予定です。(野呂祐吉)

演劇集団未踏

梅雨の候、うっとりしい毎日、皆様かわらず御活躍の事と存じます。

扱、私達集団は結成以来十年目にして古い古場をもつ事が出来(但、買取りではない)、この機を私達集団の第二期のスタート

することを確認、先づは「ミニミニ子供劇場」を専任化することから始まり、五、六月と連日学校公演を行っています。次に

◇七月十四・十五日(新宿文化会館) 平沢計七研究公演

◇九月八日・十二日(中野文化センター) 金達寿・作。立川雄三・脚本・演出 「朴達の裁判」

とスケジュール化し、劇団員個々の「生活をかえる」ことを課題としながら、専門劇団としての方向を目指して頑張っている次第です。

(東京都新宿区新宿一〇一〇一五 新宿御苑ビル TEL03三四一九三五〇) 劇団未踏

①本年一月より表記に稽古場兼事務所を借りました。カンパ有難うございました。大阪に

②二月より演劇教室第二期開講。5月30日、新稽古場にて、室生だけで創った

③5月8日。「課殺下山事件」、東大阪文化会館にて移動公演。初演よりよくなったと2度見て下さった方の批評。

④7月2日(金)吹田市市民会館にて打上げ公演。目下その再稽古中です。

⑤7月14日・18日第17回劇団総会。9月から創立15周年に入ります。11月に稽古場公演、来年5月№1公演、11月№2公演

78年5月№3公演、と20周年にむかって、どう劇団が歩んでいくのの基礎になる総会で

⑥8月、西リ演ゼミナールに参加。⑦9月、演劇教室卒業公演。新稽古場を拠点にし、何とか危機から脱出しようとしている現状です。

(事務局) (大阪市西区靱本町四一五八一) 新うつばビル4F)

京浜協同劇団

①川崎教育委員会と川崎演劇協会主催による「第五回かわさき演劇まつり」に、西沢実・作、小田健也・演出「はだかの王さま」で出演。四千人の定員に対し、六千名の申し込みがあり、盛況でした。(三月、二会場、3日5ステージ)

②第二十二期研究生(七人)が、集団創作劇「道しるべだらけの街から」をつくりあげ、教育担当北村誠一の演出で卒業公演。劇団はこれで「俺たちのベガサス」(第二十期研究

生)、「九〇二番船、進水」(劇団)に続いて三年連続集団創作したことになります。

公演は、黒沢参吉の育成による高津演劇教室(十三人)の集団創作「題名のないメッセー」(十三人)の形で行われ、一〇〇〇人の観客で満員、熱っぽい雰囲気にもまれました。

③第三十回記念公演は、プレヒト・作、小田健也・演出「コーカサスの白雲の輪」を再演することにし、七月、八月に五日間、川崎と横浜の三会場上演します。

④秋の公演は、金芝河作「金冠のイエス」を引続き小田健也氏の演出と安達元彦氏の音楽でやる予定です。「韓国」の民衆の痛みと怒りをわがこととしてとらえ、ガッチリとりくむつもりです。

⑤東リ演ゼミナール(鎌倉)の開幕まであとわずか。ゼミ実行委員会の事務局劇団になりましたので、公演活動と併行しての準備活動は実にすさまじい忙しさ。みなさんの御期待を上回るゼミにしたいと全力をあげています。ゼミ、あなたも課題をいっぱい背負って

きて下さい。(城谷紀)

(川崎区幸区古市場二一〇九) ゼミ問合せはTEL04五一―四九五二)

劇団京芸

〇「狐とぶどう」(フイゲレド作、近藤公一・演出)を九月より近畿地方の中・高校巡演の予定で稽古をすすめています。

〇五月より「俳優教室」をはじめました。現在、九名程の若い人たちが参加し、稽古場は活気をとりもどしています。

〇ゼミには新しい顔ぶれで参加する予定ですのでよろしく。

(京都市伏見区納所北城堀31-18) 劇研さっぱ

子供劇場第九回公演「ポントムトム」(山中恒・作、鈴木解子・演出)に取組んでいます。今回の役者は若い人が多く、技術的に不安はあったが、いざ取組んでみると、生き生きとしてすばらしい舞台ができています。前売りの活動の中で今迄になく好評なので、多くの観客に見てもらえて、黒字公演になればと頑張っています。

6月27日(日)小山市公民館 2ステージ 7月23日(金)栃木市民ホール1ステージ (栃木県下都賀郡大平町川連六〇八) 世仁下乃一座

4年目を迎えてやっと年2回(但し研究公演も含む)公演を組めるようになり、6/9

四谷公会堂にて第一回研究公演(太鼓・踊り他)一四〇名動員無事終了、春は太鼓をもって、国民春闘の音楽祭や前夜祭、文化祭等へ出たりして、忙しい半年でした。

秋は創作「小栗判官・賽の河原の舟遊び」(飯題)で2日間公演(東働演参加)を予定しております。ゼミで詳しく報告したいと思います。

(東京都練馬区羽沢二―二三) 第一美好狂15 岡安伸治方) 劇団湖

六月二七日の市民文化祭に参加するための民話劇「屁っこ姉さまが嫁に来て」のけい古にラストスパートをかけているところ

です。歌と芝居の新しい試み(合唱団との合同公演)なので、なかなか思うよういかず苦労しています。

この芝居が終わるとすぐ、十一月の空知芸術祭に向けてのけい古に入る訳ですが、 \wedge も、悩みの種は団員の不足で、毎年の活動方針の中に組まれてはいるものの、結果が出ない状態です。

先月、北海道ゼミが室蘭で行われましたが、湖からも3名出席し、それぞれに勉強してきました。いっものながら全道の仲間の熱気

にあてられて、奮起して帰りました。
十一月の全道演劇祭、空知芸術祭へ向って
個々の小々な力を全部出して大っきな舞
台を創りたいと思つてます。

劇団夜明け

(三笠市梶内住吉町九加藤方)
5月16日〜22日まで一週間、例年通りに小
劇場公演を行う予定でしたが、役者(にんじ
ん役)が突然ノドをこわして声が出なくな
り、本番まであと一週間というところまで来
ながら涙をのんで公演中止となりました。

団員がもう少しいたら(現在7人)、代役
も立てられたらうし、中止にならなくとも
延期ということも出来たのだが、残念でなり
ません。そのせいか最近の劇団員は元気があ
りません。いろいろ今後のことなんか話合っ
ても仲々まとまらず、秋に予定している公演
も危い様な状態になっています。しかし何と
か頑張って活動は続けて行かなくてはと思っ
ております。

劇団河童

(中津川市北野丸山)
現在劇団河童では、七月十七日公演の「御
本山農場」に向けて頑張っております。この
作品は、座付作家石上慎氏による創作で、市

民参加の演劇創りに全力を注いでいます。

舞台上に七〇名近い人間が参加すること
北見市において色々の文化活動をしている人
達の協力、援助をいただいているユニークな
芝居です。スタッフを含めると百名にもなろ
うとしています。今年は北見市開期八十年と
いう事もあり、特に、明治四十二、三年の北
見の開拓当時の農民の姿を画いています。劇
団さっぽろを始め、オホーツク近辺の劇団の
力をも借りております。

尚、前回の時にもお知らせしておきました
が、劇団河童創立二十周年を記念して、石上
慎戯曲集(収録六篇)を発行致しました。
それらの作品は劇団河童で上演したもので
す。その他、二十年の歩み、「遠くを見つめ
て歩いた日々」と題して、二十年の歴史も発
行になりました。

いづれも一部千円(送料別)で発売してお
りますので、申込みいただければ幸いです。
今年の北見は大変涼しく、練習も楽です。
之から暑くなる所の方々には身体に気を付け
良い演劇創りに頑張ってください。(みつ子)

劇団芳芸

(北見市幸町三三一 扇谷国男方)
劇団芳芸が沈黙を守って二年目、この間劇

団は劇団としての反省と共に、今日の演劇状
況を探索し、今日においての、リアリズム演
劇とはいかにあるべきか模索して来ていま
す。この沈黙の間にも、稽古場劇場として、
チェホフ、モリエール、サルトルなどを実験
的に取り上げ、演出、演技の面などを再点検
して来ました。今年に入って劇団のベテラン
連中がポツポツ復帰し、研究コースの講師を
つとめるようになりました。

芳芸の今年の計画は、九月に新人発表「三
家福」と第四回稽古場劇場として真船豊作
「裸の町」を上演します。又十二月には再び
モリエール作品「女学者」等を予定して、第
十六回公演として上演する予定です。
そして来年は、長い暗いトンネルを抜け出
たようにあらたな気持で、というより二年間
の沈黙の積重ねの成果として、座付作家荒井
敬亮の創作劇を五月に上演して行く予定です頭
張っています。

関西芸術座

(東京都品川区南大井一―一四一―一六)
◇何よりも嬉しいことはようやく「演劇会
議」が10部拡大できたことです。

◇予定していた「六月公演」(人形の家)が
演出者疾病のため中止するという事態になり

ました。これは単に現象的問題ではなく、劇
団の企画のあり方を問いかえさねばならない
問題を含んでいます。八月の劇団総会で論議
をつくしたいと思つています。

◇「関芸友の会」(二〇〇名弱)では、公演
中止にともない、上半期の、会員との交流の
機会が薄められることを憂慮し、劇団との共
催で、7月9・10日稽古場にて「文の里芸芸
まつり」と称する催しをもちます。

出し物には、会員側からは、創作一幕劇を
はじめ、狂言、日舞など。劇団からは詩の朗
読、口上「外郎売」をはじめ、旅日記スラ
イドなど二日間上演、近所の人たちにも呼び
かける予定。会費五〇〇円は、飲物代実費。
◇公演。「つちぐも」(荒木昭夫・作)を50
年5月より、全国おやこ(こども劇場)及
び、小・中学校公演として続演し、11月に
は、劇団初の北海道公演が予定されるなど、
好評のうちに52年3月まではぼスケジュール
が決っています。

「タルチュエフ」(モリエール・作)は高校
用として12月まで続演中です。

「虫」(藤本義一・作)は13年ぶりに東京
公演。6月4・5日、読売ホールで無事終了
しました。3ステージ、二〇〇名弱の動員

で、まずまずの成果をおさめました。この公
演では、東り演の仲間劇団、特に「未踏」の
皆さんや、「演劇会議」の萩坂氏などにも大
変協力を得ました。この紙面でお礼申しあ
げます。「関芸東京公演を成功させる会」発
起人(各界著名人一三〇名)のパーティには
藤本義一、野坂昭如、村山知義氏などの出席
をえて、盛会でした。

「虫」の東京公演劇評やアンケートも好評
で、ひきつづき公演、市民劇場を巡演しま
す。
◇秋の一般公演は「セザンヌ熊のようなあ
いつー」(柴崎卓三・作、道井直次・演出)
で、10月7・8日大阪郵便貯金ホールが決定
しています。画家セザンヌの半生をえがいた
創作です。

◇劇団附属研究所、専攻科生徒の卒業公演が
9月30日、国民会館でもたれます。作品は、
「日本繁栄学入門」を予定。演出担当、仲武
司。

この公演で、19期生は研究所を卒業、職業
或は業余の演劇人としてあゆみ出すことにな
ります。

劇団名表
(大阪市阿部野区文の里四一―一八一六)
△以上▽

本日(6月27日)第5期研究生の卒業公演
を終えてベンをとりました。出し物は「笛」
(田中千未夫・作、谷辺康浩・演出)で短期
間のケイコながら、約六〇人の観客に支えら
れて、ケイコ場での2ステージを無事終えま
した。卒業生六人のこれからの劇団活動を切
に期待しているところです。

さて、春の公演は、六月五・六日、落語芝
居と銘打って、人情噺「文七元結」(円朝原
作大滝敏彦・演出)を上演しました。

久しぶりの奮いもので、三味線も特訓の成
果(?)をぶつけたわけですが、地元老人ク
ラブの団体始め、五百余の人たちに楽しんで
もらい、毎日新聞劇評でも、「本年上半年の
第一の異色作」と過分の評価をもらいまし
た。今後の予定は、七月二四・五日の両日、
みなみ子供劇場で「かさじぞう」(栗木慶子
脚本、柘植洋・演出)を上演し、それから、
秋に賭けたいと思います。夏のゼミナール楽
しみにしています。(栗木英章)

(名古屋市南区沙田町三一四〇)
劇団あまんじゅく

劇団は前に作間謙二郎氏原作「峠」を公演
するという報告をしましたが、五月末に、劇
団の初公演は作間謙二郎氏書き下しの「ひ

げ」を公演することに決まりました。九月七日(火)一ステージですが、現在団員10名で、その他協力をいただき、公演むけて全員張切って稽古しています。

劇団八あまんじゅは、昨年(75)十一月に正式に再出発することに決定し、地元仙台市において深く定着して行くような劇団づくりを目指すと同時に、楽しく、見たくなる演劇を、そして、日常性のある演劇をしていくつもりです。劇団員はほとんどが演劇が初めての人がばかりで、自信はありませんが、チームワークで補っていかうと思っております。

気の早い話ですが、来年は六月に第二回公演を予定しております。よろしく。

(仙台市原町小田原字午房江下2)

国鉄アパートの一〇小椋正博)

劇団章の実

◇三月二五日に第二回総会開催。今秋期公演を劇団創立5周年記念公演として取り組むことを決定。公演以外にも①「劇団のあゆみ」パンフの編集②雑誌「らんぶ」の発行③8ミリ映画制作部の設立など、5周年記念に向けて多忙。

◇秋期公演が「キューボラのある街」に決定

し本読みに入る。東京小劇場の全面協力の声があり、劇団員ホクホクしています。でも東京小劇場から何をぬすむのが問題。この七月一日に映画「キューボラのある街」を上映。作品の事前宣伝と作品分析の材料に役立たせたい。

◇九月三日に山口県文団連の呼かけで、「周南文化祭」を開催することとなる。青年劇場の「チリ一九七三年」と結びつけたこの計画も第一回の「成功させる会」で順調にスタート。初めての試みだけに是非成功させたい。その一員である劇団章の実もはりきっている。

◇西リ演加盟の問題についても討議を深めた(下村清一)

(徳山市野上町二一三〇周南市民劇場内)

劇団静芸

七月四日、稽古場小劇場で、19期生が卒業公演に「瓜子姫とアマンジャク」(鎌田三郎演出)を上演します。研究生は十名ほどで、殆んどが女性ですから、劇団も賑やかになります。七月十日には、劇団定期総会が開かれる予定で、今年度の計画がきめられることになっていますが、今秋は小島真木の新作に取組む予定で、準備がすすまれています。内

「ひしめきあう不毛の季節から」移動公演。以上。(A・T)

(大阪市南区谷町七二二一)

新谷町第二ビル一〇三号)

劇団群馬中芸

手ちがいで大変おくれで申し訳ありません。上半期の主なる活動は、木村次郎・作「蘭学事始」の中学・高校公演、中村欽一・作「竹と竜」の小・中学校公演と親子劇場公演です。公演数は約六十校。四月に行われた春休み親子劇場では、前橋教組の「良い映画をすすめる会」と高校生、主婦の方など、一人一人の自発的な参加でできた「親子劇場をすすめる会」を中心に、今までにない活動が展開されました。一月公演で約千人の方が参加。新しい作品としては、風見鶏介が農村問題をテーマに一般公演レバを、木村次郎が民話素材にして中学公演レバを執筆中です。

(前橋市昭和町三一五一二)

上野市民劇場

梅雨も本番、早くも各地で被害が出ていますが、仲間の皆さんの地方は如何でしょうか。

緑に包まれた秋田・わらび座でのゼミからはや一年過ち、今年には江ノ島で再会出来る日

容は偶然青年劇場の「非行」(仮題)と一致していますが、負けずに頑張るつもりです。今年二月の東海ブロックゼミナル以降劇交流がすすみ、つくし「三匹のこぶた」、からっ風「強盗猫」、静芸「にんじん」「橋からの眺め」を相互に観劇し合いました。総会には元気で顔を合せましょう。

(静岡市昭府町二八九一)

劇団大阪

東西演のみなさま元気で御活躍のこととおもいます。

私達の劇団は四月に赤木正賢・作「白衣の告発」を上演しました。この作品は昨年来劇団のママさん達が選び、上演したいと温めて来た作品でした。最高七名の0才〜6才の子供達を保育しながらの取組で、一応全劇団員が保母、保父をしました。このことが子供を持った女性団員の活動参加の可能性を引き出し、何年も休団していた女優さんが今も週一回、全員が持ち回りの保育体制を組んで今後も活動に参加出来るようになりました。公演もママさん達の熱意とそれを支えた劇団員の気持が作品の内容と一致し、好評のうちに終えることが出来ました。

続いて、六月四・五日にプレヒト作「カル

も真近に迫りました。春から夏にかけての公演等で、御活躍のことと思います。私たちが伊賀の山奥で、相変らずパツとしませんが、結構忙しく、精一ぱい頭張っております。

活動報告

5/16 三劇協(三重県地域劇団協議会)

合同企画。公演「劇団がお「ゆきと鬼んべ」地元、上野市で県下の劇団が各々

制作、スタッフを分担して取り組んだ初の自主公演で具体的な実践を通じて相互に学び合い、交流を深めた意義深い公演でした。

5/23 「吉四六さん」青山町移動公演。

20名。

5/29 「吉四六さん」中部ブロックモデル上演。70名。

上演記録を出した「吉四六さん」も今ではすっかりなじまれ、嬉しい悲鳴上げ乍ら、二代目吉四六役(初代は退団)を中心に移動を続けています。

その他、太鼓構成の小形レバで小集会への出演、日舞や労音の照明の仕事と、十人足らずで、萬屋をやっています。但し創造、技術の向上を計る余裕が持てないことが悩みであり、目下の課題です。

△活動予定

。7/31、8/2 小劇場公演「鳩」(勝山俊介作)及び歌声、詩、映画を地元のサークルと協力して上演します。

誌面がなくなりましたので報告は以上にして76・ゼミナールの成功のために頑張ります。では又、江の島でノ

(上野市丸ノ内中央公民館内)
劇団きづがわ

こんにちは皆さんお元気ですかノ
劇団きづがわと改名して早や一年ノ昨年十一月ノ劇団にふさわしい創造をめぐめざして取り組んだ「傷だらけの手」(長崎の被爆詩人福田須磨子の生きざまを描いたもの)は、「脚本をのりこえた創造であった」等、好評を得ました。

そして春の取り組み地域公演No.4「若者たち」も二ヶ所、八〇〇名の観客と共に新鮮な舞台をつくり上げました。今回は地域の若者たちの協力で宣伝カーを走らせ、カンパンも立てて廻りました。夕食を済ませた家族連れが「アレッ入場料いりまんのか?」と気軽に来てくれる一幕もあり、「この次からのみます」と、無料入場者もかなりありました。

目下、秋の公演(革新府政助成新劇フェスティバル初参加)のレバ選考中です。

それでは皆さん、福岡であいましょうノ

☆五名の若い仲間が入団しましたノ

(大阪府大正区泉尾四二一七)

劇団すがお

みなさん、こんにちは。

まず△活動報告ノから。

□さわとう・あきら作「ゆきと鬼んべ」

5月17日(日)上野市産業会館2ステージ

この公演は三重県地域劇団協議会の協同公演として取り組み、地元の上野市民劇場、労演、教組の強力なバックアップで成功したものです。観客約千名。1

6月27日(日)員弁郡東員町福部小学校。

1ステージ。学校が日曜日に振替授業を行なって、学校ぐるみ地域ぐるみの観劇会で、観客約七百名。

□これからの予定

新しい試みで「ミニミニ親子劇場」の活動に入ります。これは、今までの親子劇場が市民会館公演で経費の面や技術の面で負担が大きく、又、観客ともっと接点の強い公演等々の理由で企画したもので、地域との接点も強まることを期待しています。市内

10ヶ所程度で、劇団員を班編成で各々の公演を責任をもって制作企画することになっています。内容は――

演劇 ころぼう仙人

大型紙芝居 日本の民話から

ゲーム。映画。などで約90分120分

まだこれからです。がんばらなくちゃノ

夏のゼミ楽しみにしていますヨ(阿方記)

(桑名市大福二二九一伍藤方)

人間座

◇前号の「劇団通信」欄に予告させて頂いた通り、「京焼」(「清水焼」)の歴史と現状、またその未来像を追求するわらいの創作劇『奇峰亭先生の幻の壺』を来る九月の「京都府文化芸術劇場」で上演発表するべく準備を進めています。この劇のなかでは、工芸と工業の関係、伝統継承と芸術創造の問題、近代技術とメチエの関係などを出来る限り幅広く俯瞰しながら、別途に、「新劇とは何か」「新劇に欠けているものは何か」「何故新劇は面白くないと云われるのか」等々の命題をもあわせて考えてみたいと思っています。

何しろ、「古都」京都は、茶・華道・能・狂言・歌舞伎・京舞・絵画・工芸など、ずっしりと重い伝統世界が空間を埋めつくして

居り、「新しい」ものは育ちにくいといふなかなか厄介な土地柄。私たちとて、それなりに努力はしてきたつもりでも、いっかな「地域に根ざす」に到りません。どうすればこの「状況」が切り拓けるか。模索したいわけ

◇「奇峰亭先生の幻の壺」上演日程は左の通り。

九月 二日(火) よる時間未定

九月 二日(水) よる時間未定

九月 二三日(木) (秋分の日)

マチネーのみ・時間未定

場所いづれも府立文化芸術会館

(京都市左京区聖護院蓮華蔵二七)

青木ビル内)

徳島・劇団未来

度々激励のお便り戴きながらご沙汰ばかり申訳ありません。昨年来、徳島部落研と劇団未来の共同で、田淵豊君の「結婚式の日」という芝居にとりくみつつ一方看護婦養成所の演劇部の指導をやっております。

「結婚式の日」は、昨年7月と11月の2回上演し、反響を呼びました。今年は8/1に鳴門市で上演予定。現在これに向けて、困難な自治体交渉も含め、頑張っています。

若い看護婦さんたちは昨春秋、「にわか医者」(モリエール原作)を小品に脚色したのをやり、その後、「さっぱ夜はなし」を所内で一回、労演交流会で一回、そして7/4には老人ホームでやりました。

この間劇団独自の仕事としては、昨年8/30、「人を喰った話」を郷土文化会館、そして今年9/4同じく郷文で、現在狂言「鏡男」を土台にしたものを脚色中、人数が減ったので、いろいろ困難はありますが、やる気があればやれることを実証すべく頑張っています。

この間照明器具の製作もすすめ、200A配電盤、5KW電子式スライダー及び500Wベビー7台300Vフラット17台を製作、県文化協会の補助金三万円などで、録音用デンスケの購入など、武器も大分ふえました。何時でも孤軍奮闘の汚名をばん回すべく、劇団再建をめざして頑張るつもりです。よろしく指導下さい。誌代は別便で近日中に送ります、不悪。

(徳島市南佐古八番町五―16齊藤さとし)
中野勤演

こんにちは。今年の中野区の成人のつどいに昨年11月に公演した「元禄中野犬政談」の

ダイジェスト版をもって参加を手にじめに、三月、代表小坂忠念願の生活詩集「終戦っ子口説」の出版を祝っての詩の朗読会と父帰るの研究公演を喫茶店シモヤにて上演しました。

目下七月初めの中野勤演民衆劇場第13回公演・改訂版「元禄中野村犬政談」にむかって連日稽古、連日オルグの最中です。中野に根ざした地域劇団をめざしてまだ三年目、少しづつ中野区民の中に中野勤演の活動が知られるようになり、昨年の公演六五〇人、研究公演一五〇人の観客をふまえて、今年七月には千人の観客動員を目標として集団の力量を高めつつ組織体制を強化していきたいと思えます。秋はベトナム問題にとりくみます。

(牧山)

(東京都中野区新井二一五―一六)

葉月マンシオン 小坂忠方)

劇団さっぽろ(?)

前略、しばらくごぶさたしておりました。5月20日・22日のアトリエ公演「密の味」「坊やに下剋」は奮闘のわりに、観客動員は予想外でした。昨秋のアトリエ公演が六九六今回は六八二人と目標の一〇〇〇人台には程遠い結果となりました。

公演総括、劇団総会でも「創造」と「経営」の問題でかなり論議を呼び、現状分析の甘さと、取り組み方に対する改善の姿勢の弱さをつくづく思い知らされました。

これからは現状の悪さを洗い出し、問題点を一つ一つ、つぶしていく作業が大切だと思います。

総会で指摘された劇団組織の建て直しも、日常活動の見直しからはじめました。目下3人の新人を加え、基本訓練と8月からの小劇場「彦市ばなし」の稽古中というところではあります。

秋の公演はまもなくレバが決定しますが、いつになく全員が燃えている感じですが、東リ演ゼミにはできるだけ多く参加をするつもりです。

(札幌市西区手稲宮ノ沢四八五一四一) 編集部註・劇団名の記載がなく不確かでしたが、諸般の状況から「劇団さっぽろ」としました。誤りの場合はお許し下さい。
八戸市民劇場

八戸市民劇場では7月に入って二つの大きな行事を大成功に終らせることが出来ました。一つは7月4日に開かれた第15回総会です。この総会は八戸市民劇場が10月文学座公

演の「ハムレット」から2ステージに移行するためにどうしたら出来るか、という大きなテーマで開かれた大事な総会でした。当日は仙台の渡辺事務局長をお迎えして特別講演もあり、56サークル、82名の代議員が熱心に意見を出し合い、サークルを基礎に大きくサークル数を増やし、必ず2ステージを実現しようという確認しました。

もう一つは、青年劇場公演の「かげの磐」特別観劇会です。郷土の劇作家小寺隆嗣氏が一般公演のために大巾に補筆し、2時間10分にまとめ、八戸で公演されたものです。この作品は昭和47年8月国立劇場で行われた全国高校演劇コンクールで八戸北高校が最優秀賞に輝やいた舞台を見て、深い感銘を受けた青年劇場が企画して、今年と来年、全国巡演するもので、東京で公演され圧倒的な好評を受けているものです。

7月1日(木)の公演は目標の一〇〇〇名で大成功し、大きな感動が会場をつつみましました。作者の演劇講座、劇団員とのレセプションなど楽しいとりくみもありました。これらの成功を土台に私たちはより一そう観演運動をさせていきます。尚7月31日から8月3日まで全国高校演劇コンクールが八戸市公会堂

で開かれます。(副委員長・貝吹重見)

(八戸市三日町丸福ビル三F)

劇団いこら

昨年に引き続き、「劇団いこら・友達劇場」を7月27日に公演します。

子供達は二本、「きつね物語」(高学年)「ふなと雷魚と目覚時計」(低学年)にとりくみ、毎日曜日頭張って意気盛んです。「いこら」も「彦市ばなし」で参加します。今は子供達から叱咤激励を受けています。太鼓―何故か評判が良く、村の祭の宵宮にまで花がかり、うれしいやら……やら。

今年のゼミは大きい事はいいません。勉強させて頂きます。

(和歌山県有田郡金屋町吉原四四六)

佐々木敏明方)

劇団どろ

遅くなり申しわけありません。

◇5月29日、第10回公演「第三帝国の恐怖と貧困」(フレイト作)を了りました。観客数は昼二三五、夜二八五(内学生六〇)。県民土曜劇場(兵庫県主催)参加としては二回目ですが前回の観客数を上廻ることができず残念です。

◇秋期公演には「鳥」(堀田清美作)を予定

しています。劇団として今までにない芝居なので、全員意欲的にとりくんでいます。8月には広島での合宿も計画しています。

◇春、若者座の「鳥」を観劇しました。西リ演の仲間の芝居を県外遠征して観るのは初めてで若者座の方には暖いもてなしをいただき感激しました。月曜会の方にも多分にお世話になり、この誌面を借りお礼を申し上げます。ほんとうに仲間のあたたかさを感じました。

(高砂市曾根町二五〇五 川西真理)

劇団レオ

昨年の加盟以来ついで遅れて、初めての通信です。昨年の9月以来準備した木下順二作「夕鶴」を今年3月に、又後藤志げお作「笑った姫君」を4月に公演しました。

「夕鶴」は若い人たちを中心にしたキャストで上演し、八〇〇名、「笑った姫君」は、丁度この地の花見行事とかち合って五〇〇名足らずしか組織できず若干の赤字となりました。

レオの親子劇場は好評で、「夕鶴」がすごく美しい舞台だった―としか話題にならないのに比して、「よかった、おもしろかった、見応えがあった」と各層から声があがって

ます。(花見でこれなかった人たちに何れ再演します)
「夕鶴」は8ミリのカラートーキ(約40分)に記録し、あちこちから上映申しこみや、フィルムをかりたいと申しこみがあり、何ヶ所かで映写会をし、レオのPRに一役買っています。「笑った姫君」はオールスターキャスト?のため、手不足で映画化ならず、くやしい限りです。スタッフ不足がこたえます。

今劇団では、県内各地からの移動公演要請に何とか応えたいと、職場を変えようという団員もおり、7月末に地元五所川原市、8月に木造町、9月にむつ市が実現しそうです。そのために今、後藤志げお作「うぐいすの尻」3幕にとりくんでいます。本当は、7月の奥羽ゼミにモデル上演もノと思っていたのですが、全幕は長いし、一幕だけではダメとの事であきらめました。一見リアリズム演劇らしからぬ作品ですが、こどももおとなもみんなに何かを掴ませ、大いに笑わせようというもので音楽をふんだんに使います。やはり、リアリズム演劇ではないかと思えます。

できればフィルムにとりゼミへもっていき、夜部屋で上映といきたいところです。昨年の

ゼミの記録を8月にもっていくつもりです。何とか5名は参加できるようにです。

「演劇会議」とりあえず5部づつお送り下さい。(後藤志げお)

(五所川原市松島町七―八七)

劇団木々の会

◇昨年10月に「ゆきと鬼んべ」、11月に「人を喰った話」を上演。その後中だるみが続き6月にやっと総会を終えました。この間に若い仲間達が続々と増え、毎日のケイコがハリのあるものになっています。11月に開催される、広島市青年演劇祭にむけて、シラ・デイレニーニ作「密の味」を張切って練習中です。

◇劇団の代表者が変わりました。

(広島県佐伯群五日市町美の里)

一丁目八―九―一 石部久人)

演劇集団わだち

◇四月二六・二七日、No.3小公演として、菅谷俊一氏作「後瀬川」を上演し、大映労組の御協力をえて、単独公演としては初めての時代に取り組みました。

◇六月から約一月半の予定で「演劇教室」をすすめています。基礎的なものを身につけようと思いましたが、何分初めてなので思っ

いるような成果があるかどうか？ 今後続けてゆく試験台になればと、全員が講師兼生徒で頑張っています。

劇団山形

◇3月13日公演の「雪の基標」(勝山俊介作)は一二〇名の観客を迎え無事終えることが出来た。特に東北ブロック(ふくしま・仙台小劇場)の方々にたくさんおいて頂き厳しい暖かい批判や褒め言葉をいただいたありがたいございました。その後、仙台小劇場の方々に劇評をレポートまでしていただき本当に有難うございました。◇劇団は四月の中旬に総会を開き、今年度の活動を決めました。主なものは、五月から七月上旬までの演劇の勉強会。これは各パート(演出、舞臺、装置、照明、衣裳、小道具、効果……等)毎に、担当者を決めて講習会形式で進めていくやりかたです。

◇七月末に東北ブロックゼミ(今年は山形が担当)。八月の東リ演中央ゼミ参加(現在10名参加予定)。十一月中旬に公演。現在そのレポートリイ選定中です。

◇「京子よ泣くな」に続く創作劇を、ということで、山形市から車で2時間程入った無医

村のへき地に二〇年間生き続けた女医さんを、前回の原作者が「周子の生涯」として出版したのをきっかけに、これを劇にしようと思ったはじめました。一週間ほど前に、すでに原作者を含めて、第一回の現地取材を終え、現在構想中です。

八月の東リ演のゼミでは全国の仲間にごえることを楽しみにしております。

(山形市緑町四一八一 松井光義方)

劇団つくし

①前年12月1日に後援会が発足。これからの創造活動に力づよい支援を受けました。

②5月に、第8回富士宮市「こども祭」に、ミハルコフ作「三匹のこぶた」、柴崎卓三作「ぶす」を上演。

③6月20日には、全日本アマ演劇協議会主催の第2回関東甲信越「アマチュア演劇研究大会」にて「三匹のこぶた」をモデル上演。

なお7月に総会が予定されています。

(富士宮市西町20-2 野沢方)

劇団協同

連絡遅くなって申し訳ありません。

◇今、第二〇回公演「夜明けまえに歌え」三幕の最後の追い込みに入っています。

七月十六、十七日の2ステージ、一八〇〇

計3回公演

場所・福井市文化会館(千三百収容)

観客目標 三〇〇〇人

ん氏作「はやてに走れあまんじゃく」の公演を四三〇余りの人々の参加の中で上演しましたが、何分団員不足(10名)のため、終始四苦八苦の中で公演で、演出、効果等に今後の課題を残すことになりました。

始めての本格的児童劇の取組みでしたが、子供達の中に少しでも芝居のおもしろさを知ってもらったのは大きな成果だったと思います。(小学生二五八名)。

全団員一同十一月公演目指して新しい意欲に燃えはりきっております。

(北海道羽幌町港町6 東出秀夫方)

福井劇の会

◇今年の上半年の活動は、当会初の民話劇「竜の目玉」の創作及び上演一本にしはり目下最後の仕上げに入っています。

福井劇の会・ゆきのした文化協会提携企画

創作民話劇「竜の目玉」4幕7場

作・かみもとこいち(ゆきのした会員)

脚色・福井劇の会創作委員会

主催・福井劇の会、ゆきのした文化協会、ゆきのした文化協会

い「竜の目玉」公演に協力する会。

出演・福井劇の会

日時・七月九日(夜)十日(昼・夜)

名の観客動員と、働く者の生活に密着した舞台づくりをめざし奮闘しています。

自治体との関係も昨年選挙で革新から保守へと変わり、補助金等どうなるかと思っていましたが、今回公演に対する補助金として九万二千元出るようになりました。

又、この舞台は、地域のうたごえサークル(二団体)の方々に協力出演してもらっています。「成功させる会」も結成され、公演当日まで四回の会を催し、稽古場見学、作者を囲む会、オルグ、当日の協力と、劇団員の少ない我々にとっては大きな励ましを与えてくれています。

◇演劇会議33号が出る頃には、一月に上演した「ある遅い出発」の再演の稽古に入っているとあります。総会、ゼミで仲間のみなさんと会うのを楽しみにしています。(車田悟)

(立川市曙町三一四八七 黒田方)

劇団「青い麦」

大変永らく御無沙汰しておりました。

劇団「青い麦」は、S46年に誕生して、今

まで年一回の公演活動(S48・50は休演)を

してまいり、今年で満5年目になりますの

で、これを機会に年回の公演をすることに

なり、上半期の児童劇は、6月6日、しかたし

◇秋の公演は、「河」の移動公演から学んで

県内どこへでも出掛けることのできる体制も

考え、「象の死」と「結婚の申込」の二本立

になります。甲府公演は十月十七日(日)で

すが、それ以前に甲府外での公演を考えてい

ます。

◇いままでのけい古場を解体撤収して土地を

返しました。新たなけい古場の土地を石和の

笛吹川ぞいに一七〇坪購入し、登記も済ませ

ました。これから将来の展望も含めて、どん

な建物にしてゆかみんまで相談です。(解

体撤収、土地購入はすべて劇団員からのカン

パと借入れです)。

(甲府市青沼一八五)

劇団名古屋

日々暑さが増して来ましたが、皆さんお元

気で御活躍のことと思います。

◇公演の総括

3月12・13日(3ステージ)に名古屋市民会

少年のための芸術劇場として、名古屋市民会

館中ホールにて、「あ、野麦峠」(作・大橋

喜一、演出・久保田明)を上演。観客数三〇

六一名。

6月21・23日(3ステージ)名演小劇場に

て「一黒人との対話」(作・マリオ・フラッ

ティ、沢・岩田治彦、演出・久保田明)を上
演。観客数四一八名。

「あ、野麦峠」で多数の観客を動員した私
たちでしたが、「一黒人との対話」では、小
劇場ということもあって、観客動員に「あ、
野麦峠」でみせたような「燃え」がとぼしく
再度制作についての計画性を考えさせられま
した。一方、「一黒人との対話」では、個々
の充実をはかるために、スタッフとキャスト
の兼用をさせ、劇団内だけのスタッフ制を取
りました。この公演は、自分たちの想像力を
確かめたい、その共通の動機を探り深めてい
く作業のあらたな第一歩になったのではない
かと思っています。

◇展望

芝居をすることによって自分が変わり、そ
のために自分をこわし、掘りかえし自分を発
見しつづけるという作業の中で、この「一黒
人との対話」は今秋予定している集団創作劇
「朝鮮を見てるか」(題未定)を公演する
ための一ステップとなり、また「これまで手
がけなかったいろいろな芝居に積極的に取り
組んで行こう」という姿勢の出発点の役目を
はたしました。

◇近況

1名計15名がフレッシュながんばりを見せて
います。

◇4月30日。劇団の中心メンバーの一人杉山
一実が脳腫瘍のため36才の若さで亡くなりま
した。私達一同、悲しみに茫然となりまし
た。葬儀の際には皆さんから種々御配慮を頂
き有難うございました。夫人の村瀬きく子
も、2人の幼児をかかえながら、夫の志をつ
いでがんばって行く決意です。今後どうにか
よろしく願います。

◇20年近く住みつき、プレハブながらけい古
場まで作って5年目の現在の土地が、お寺と
市との土地関係のことから一年以内に立ち退
かねばならなくなり、7月公演後、全員で方
針を立てることになっています。団内では劇
団の根本的再出発として改めて決意を固める
時期が来たと話しています。

(名古屋市東区東横2丁目八一一九)
劇団からつかせ

第8回公演「強盗猫」(立川雄三・作、
布施佐一郎・演出)が6月3、4日、6月26
、27日の4ステージを終えました。トータル
観客数七〇〇。予定より大巾に減少。創作協
力券から一般チケットに切り替えてから伸び
が止ってしまい、この後伸ばしたのは、途中

公演を終えてホッと一息ついているところ
ですが、今秋予定している公演(前記)に向
けてチームごとに会を重ねているところで
す。

(新住所)

名古屋市熱田区新尾頭町五〇

TEL〇五二一六八二一六〇(一四)

劇団十年実

△活動報告▽

- ①新しい団員が5名六月に入りました。
- ②十月の公演に向けて作品選出の迫込みです
なんとか創作劇で上演できそうです。今回の
取り組み推進のエネルギーは特に若い女性の
成長の中から得たものです。
- ③昨年の夏、隠岐島へ、子供たちと老人への
訪問公演を自主的にやりましたら、今年はその
時お世話になった高校の演劇部の先生の依
頼により、九月末か十月初めに高校生たちに
芝居を見せに来て下さいとのこと。マスコミ
文化に毒された高校生が果立つ前に手作り文
化を、ということに招かれています。しかしこ
れは一劇団の問題だけではなく都会の自立劇
団と僻地の高校生たちとの良いコミュニケーション
を作るために、責任もてる演劇ができる
かどうかを悩みながら、前向きに検討中。
実現させる方向で。

から加わった12期の卒業生達でした。舞台成
果も前半(児童会館)と後半(青年婦人会
館)ではだいぶちがいました。わざわざ僕達
の公演にかけて下さった作者立川氏の助
言はこの作品をつかまえないおす上で大きか
ったと思います。今はこの公演のまとめの最中
です。このあとは秋の公演レバ選、7月末予
定の総会、そして13期生の発足と、またあわ
ただしい毎日となりそうです。

(浜松市曳馬町一四〇九)

劇団尼ヶ崎フアーベル

◇ついに本当の劇団と成らねば……。念願の
ケイコ場が出来ました。18坪の板敷です。場
所は阪神杭瀬のすぐ近くで、住所はあとがき
にご注意下さい。

オプザーバー参加3年。ついに今年西リ演
加盟の予定です。今後ともよろしく。

◇公演予定(尼崎フアーベル創立記念)

マイルグーツ物語

9月4日(6時) 5日(1時半) 於尼崎
文化会館。

◇公演報告

5月15日「銀河鉄道の恋人たち」2回30名
6月13日「黒い太陽」尼演連合同公演参加
(尼崎市杭瀬北新町3-47)

④十年実も八月十三日で五年になりました。
続けるのみ、から少し発展したいと思ってい
ます。

(大阪市平野区喜連東三丁目六番
三三一一〇一)

名古屋演劇集団

◇いま七月公演の追い込み中。イブセン・作
浦はじめ・演出「ヘッダガブラー」。7月14
日、17日、名演会館です。

近代写実劇の完成者イブセンの作品に取り
組むことは、その深い人間追求、簡潔な構成
等しい分勉強になると共に、百年近く前にイ
ブセンが追求した、男性中心の社会に対する
女性の反抗の姿が今日でも生き生きと感し
られることは驚くべきことでしょう。7人に絞
られたキャストは特訓の連続です。

◇三月の創作劇場が一応盛況に打ち上げたあ
と、年度末の総括・方針討議の総会、「奇蹟
の人」の学校移動公演(3月10日、5月25日
31日の5ステージ)、「アンネの日記」(再
制作)による親子劇場高学年例会(6月5
日)とひっきりなしのスケジュールが続きま
した。附属研究所も第13期が4月18・19日、
矢代静一作、沢田精一演出「七本の色鉛筆」
で卒業公演、続いて第14期が開講、女14名男

演劇集団息吹
遅れて申訳ありません。
尾尻コーボ4F)

◇劇団かみがたとの合流準備をすすめてつづ
それぞれ昨年の暮に総会を開き、①76年度上
半期には、小型移動劇場を企画し、きめ細か
く地域にはいりこみ、できるだけ精力的に地
元の人々と共に劇場づくりをおしすすめる。
合流準備として一本の作品を共に創り上げる
②その上立って下半期に、比較的大きな作
品を意欲的にとりくむ。などを申合せ、次の
取組みを企画、上演しました。

◇落語と芝居「初夏容浪花版」(なつすがた
なにわのにぎわい)。素人落語大阪風の会と
共催。古典落語三題と芝居。「河童証文」
(作・栗原省、演出・坂手日登美) 6/5八
尾市民ホール(満席) 6/10天王寺アポロホ
ール(満席)。「より日常的な文化創造」を
と叫んで、寄席小屋の雰囲気をつくり、笑い
のうずをつくることができました。「今度の
公演も是非観たいという気になった」との
声。

◇「七夕民話劇場」東大阪演劇サークル「あ
りんこ」と共催。「彦市ばなし」「河童証
文」の2本立。7/14東大阪青少年婦人セン

ター講堂。

◇その他、地元八尾地域の青年団や婦人会、町内会の人々と話し合いを深め、「河童」を持って、村ぐるみの劇場づくりをおしすすめています。「息吹」としては久しぶりの上げ潮です。これにのって運動をおこしながら、力をつけていきたいと思っています。次回作品

作・東川宗彦「牛」3幕を予定。
(八尾市堤町一〜四〇)

演劇集団あり

◇私たちは今年の定期公演として、5月21日米子公会堂で、チェーホフ作「熊」と劇団の宮倉義文作「しあわせの星座見つめて」の2本を上演し、観客数は雨のため予定より下廻り、二五〇名の参加者で公演しました。

今回は結成七年、通算13回の公演であり、第7回定期公演でもありました。当初四月公演を目ざしていましたが、中途でキャストの病気退団者が出たり、家族の入院等の事故が続き、公演の一月延期を行い、そのための農繁期にかかる等、何時も演劇創造が決して平穩に行くことなどありませんが、今回は特に問題も多くかかえ、充分に力を出し切った公演でなかったことを、サークルとして反省

年館を稽古場にして、毎週二回、月一回の日曜日を定期的な稽古場日としています。然し、公演間近になりますと、特訓日というのを設けて、稽古日を増やし、創造活動をつづけています。年二回、春、秋の公演を行なって居ります。特に秋は、東京働くものの演劇祭に参加して、多くのサークルや、演劇集団と、交流を深めています。

さて、今年はいままでどの様な活動をやってきましたか、また、今後はどの様なスケジュールになっているかを御報告します。
◇三月、港区青年館を利用している団体が互いの交流を深める意味で、若人の祭典が開かれ、麦の会の「23年の歩み」の写真展でもって参加しました。

◇六月四日、第44回公演ゴーゴリ作「検察官」を上演しました。本格的な、外国物は、会創立以来、はじめてのことであり、更に、ゴーゴリのもつ諷刺精神をどこまで観客に伝えることが出来るか心配でしたが、一月末より稽古を開始して、麦の会の総力をあけて頑張ってきたお陰で、どうやらその心配は、多少払拭出来るところまでの好評を得て、ホットしました。しかし、喜劇のもつ批評精神の創造性の難しさを痛感しています。

しています。しかしそれにも不拘、特に創作劇に対する反応は強く、サークル内では作品の弱点を気にし、舞台成果の弱さを痛感しているために、この予想外の反応にとまどいを感じています。

良くも悪くも、マスコミ文化の発達したなかでもやはり多くの観客は、身近で新鮮な創作劇を強く求めていることを裏付けていると思います。観劇の感想文にしても今までになく十数通寄せられ、感想文集も作り支援してくれる人々との意見交流を行なっています。今後は一層、観客の要求とサークルの芝居創りのあり方が共鳴し合うような、少しでも充実した創作劇を中心に、活動を継続して行くとしていきます。

これからの活動は、九月二十二日、神戸市での国鉄関西演劇祭参加と、十一月十四日、米子市での鳥取県演劇連盟文化祭へ向けて、サークル創作戯曲完成のため取組んでいます。

(米子市昭和町二三宮倉方)

鋼路演劇集団

お元気ですか。今年の北海道鋼路は夏の訪れがおそく寒い日がつづいています。
第六回公演「コンペア野郎に夜はない」は

◇その公演終了ホットする間もなく六月十三日には、全国の港に働く仲間たちの「全国港漕のうたごえ祭典」に照明、その他、裏方等に参加しました。

◇六月二十七日臨時総会を開き、東京働くものの演劇祭参加のための上演台本、藤川健夫作「傷だらけの手」(民主文学一九七五年十月掲載)が決定しました。

◇上演日は、10月二十八、二十九日の二日間です。この二日間の私達の公演を皮切りに十一月末まで、東京働くものの演劇祭が行なわれます。是非、御来場をおまちして居ります。

◇「20年の歩み」という私達サークルの歴史のパンフがございます。(一部三百円)御拝読戴ければ幸甚です。御一報下されば、御送付致します。
(吉岡記)

連絡先〒133 東京都江戸川区北小岩七の三の二〇 演劇サークル「麦の会」

TEL03 六五九一八七〇四 吉岡利根雄
仙台小劇場

今年の公演活動は「鳩」「どろぼう仙人」の小公演でスタートしました。準備不足もあって観客数二〇〇と物足りない小公演でした

5月22・23日終りました。動員が五〇〇人と予想を下廻る結果に少々ガッカリ、この期間毎週のように演劇公演が続いたためでしょうが、改めて観客運動の重要性が提起されました。

次回はアトリエ公演No.4として、9月10・11・12日「俺たちのヘガサス」。No.5、11月5・6・7日「スガナレル」の上演。そして来年五周年にむけて創作劇。劇団は三つのグループに分かれて活動に入っています。

どんな成果が生れるか、不安と期待とではりさっています。尚、今年の新人九名加わり六月末に新人学習会を行いました。

(鋼路市員塚一〜六一九 加藤方)

演劇サークル・麦の会

全国の仲間のみなさん、御元気ですか。種々な悪条件のなかで、御活躍のこととお察し致します。私達「麦の会」は、東リ演には加入して居りませんが、此度「演劇会議」の通信欄に掲載させて頂くことになりました。よろしくおねがいします。「演劇会議」は殆どの会員が読ませて頂き、皆さんの御活躍振りを知り多くの励ましを受けています。麦の会は、今年で、創立から23年を経ています。現在は、会員三十三名居ります。東京都港区青

が、年二回の本公演とあわせて、すぐれた小品紹介の場として定着させていく方針です。

七月八日〜十日は「銀河鉄道の恋人たち」の四ステージ公演です。けいこ場の移転、内装との平行けいこで、いささかけいこ量が不足であっています。成果のほどは東リ演総会セミで報告できるでしょう。

けいこ場が新しくなりました。ピルの二階十八坪です。家賃がかさみますが、けいこ場公演などもできそうなので、ここを拠点にもっと多彩な創造活動を、とはりきっています。けいこ場に電話がつかまりました。〇二二二(64)二三三〇です。(夜間のみ)
九月には団地での小公演が予定されています。

(仙台市鉤取字大谷地三〜三 早川方)

劇団四日市市民劇場

現在は、しかたしん作「はやてに走れあまんじゃく」という作品にとりくんでいます。それから毎月第二土曜日午後には、市内の「こどもの家」という児童福祉施設で定例の、土よう子ども劇場を開き、子どもたちに喜ばれています。移動公演も活発で、月一回は、どんなに遠くでも、足をのぼして公演を行うようにしています。このように一寸し

た児童劇ブームですが、森の創作劇「戦中派」(仮題)も順調に書き上げられつつあり、劇団員から脱稿を期待されています。

△今後の公演予定▽

しかた・しん作「はやてに走れあまんじやく」。

8・29(日)四日市市立図書館
10・30(土)四日市市民ホール

S 52・2・27

森賢郎作「戦中派」(仮題)四日市市民ホール。(林武男)

(四日市市栄町4-9 アンデレセンター内) 劇団ふくしま

(福島市笹木野末梨下41-3 嘉藤方)

◇7月10日(土)第8回公演として「鳩」(勝山俊介作)「ぼく生きたかった」(大橋喜一・山田善靖作)を昼夜2回上演しました。入場者、昼10名、夜10名。入場料七〇〇円(当日八〇〇円)学生五〇〇円(当日六〇〇円)。アンケート回答数、昼の部20、夜の部7。

評価のあられし。

「鳩」について、リナレータの処理、じやまだだった。(舞台下手にスポットをあてたまま出通しだったため)。麻は少しふけて見え、高遠先生は「わが子の生死を思いつづけ

ている」という風には思われなかった。しかし麻の生き方については「すばらしいと思っただ」という意見が若い人たちに目立った。

「ぼく生きたかった」について、初演にしてはよくできた。母らしさがもう少し欲しかったが、父について、空中を走る場面が印象的、パントマイムの場面がよかった。銅鑼の芝居より良かった。全体として胸をうたれた。劇団ふくしまを見直した。

以上のような声がかかれた。目下団内で全体を総括中です。ゼミナールではっきり申し上げられると思います。



つねに
働らく人たちとともに
歩んだ作者の、劇団の
苦節二十年をここに

こばやしひろし 作品集2

劇団はぐるま創立20周年記念出版
収録作品 「書けない黒板」「つくられた英雄」「植の木」「豚」「ひしめきあう不毛の季節から」
装幀/板板晋治 頒価 1700円

○発行/演劇会議発行所
○申込先/演劇会議発行所 川崎市川崎区渡田4-11-3 萩坂方 TEL (044) 333-0775
劇団はぐるま 岐阜市西野1丁目 TEL (0582)65-1852 振替名 古屋4525



関西における戦前プロレタリア演劇の研究 △二〇▽

大岡 欽 治

大阪地方のプロレタリア演劇

日本プロレタリア演劇同盟

プロット大阪支部の活動

一九三二(昭和七年)(三)

前号は、この年に展開された日本の演劇史上、画期的な、国際的な革命運動に、日本プロレタリア演劇同盟(プロット)が、参加しようとした出発点を紹介した。プロット機関誌「プロット」第二号の、この国際演劇デーのための二月増刊号にプロットの現勢が書かれていると書いたが、全文は長いのと、村山知義の「演劇的自叙伝」第八十五回(「テアトロ」第三八〇号、一九七四年十月号)に出ているし、倉林誠一郎著「新劇年代記・戦前篇」(白水社刊)にも抄録されているので、ここでは、プロット大阪地方支部に関連する

ものみを経て紹介することにする。

『プロット』一九三二(昭和七)年

二月特別増刊号(発禁)

一、国際的競争の場合

大阪戦旗座——チェッコ・ネメツの劇

(註)但し相手劇団の紹介もなく、現在まで不明

二、外国の同志へ——プロットの現勢図

一、プロットの組織(略)

二、地方支部(準備会)及び加盟劇団

三、同盟員

大阪 戦旗座 一七人(準備団員

四人) 個人加盟(六人)

四、機関誌

プロット機関誌「プロット」一九三二年十二月より発刊

「プロット」総発行数二千三百

(書店販売千六百、地方組織配布七百部)

大阪 一〇〇部

五、演劇サークル

演劇サークル数——二二〇

サークル人員——三四二五人

大阪 労働者サークル 一七

サークル人員 三〇三人

六、演劇新聞

プロット出版部発行、演劇サークルの全国的統一の組織者として、

月二回発行、創刊は、一九三二年

九月二十日

総計 二三人

「演劇新聞」総発行数一八千

(内訳、地方組織の配布数一七八

五二、書店販売数一七六八

宣伝紙、残品一三三七九)

演劇新聞通信員数一二十人

大阪 同盟員、サークル員配布数

一〇四、書店販売数一八〇、計

一二八四

通信員数一五人

(註・私も通信員の一員だった)

七、各地方支部(準備会)加盟劇団

D 大阪地方

支部創立 三一年十二月二十日

大阪戦旗座及び六名の個人加盟員

を包括する。

東京と共に日本の主要工業都市たる

客観的条件に育まれて、活発な

活動を続けている。

戦旗座

一九二八年六月六日創立、直ちに

プロット加盟

東京左翼劇場と共に、長き××

(革命)的伝統を持っている。

劇団創立以来の公演回数、十二

回。その主要脚本、「炭坑夫」

「おまつり」「早鐘」「プロ床」

「二人羽織」「莫迦の療治」「戦

列への道」「生きた新聞」「太陽

のない街」「土地・斗争」

三一年度中の移動活動回数、二十

二回。

主要脚本「炭坑夫」「プロ裁判」

「プロ床」「莫迦の療治」「泥

棒」「公判斗争」「荷車」「三湯

合同」「二人羽織」「銅像」「百

姓床」

八、九(略)

十、新興劇団協議会

大阪新興劇団協議会

現在加盟劇団。戦旗座(プロット加

盟)構成劇場、ナッパ服劇団、裏の

劇場

同伴者劇団に対する戦旗座の「曳

船作業」は活発に行われ、三一年十

一月、構成劇団との共同公演「太陽

のない街」の圧倒的成功に依って、

益々その指導力を強固にしている。

」

これが、この時点におけるプロット大阪地

方支部と大阪戦旗座の現勢であった。そし

て、このような状況の中で、IATB(国際

演劇)デーに参加したのだった。

まづ、そのために、この年一月における大

阪地方での活動を調べてみると、

プロット機関誌「プロット」の三月号(第

四号)に、プロット常任中央委員会書記局の

一月の地方活動の内に、次の如く記録報告さ

れている。

」

一月に於けるプロット各地方活動報告

大阪地方――

プロット常・中・委・書記局

大阪地方――

新たに結成されたプロット関西地方評議会

の決定にもつづき、IATBデー対策として

は、大阪地方は単独の催しをもって戦い、京

阪神協演による三地方巡回プランは四月に延

期した。

支部組織部は各地区組織責任者を決定し、

サークル組織の具体的活動に入った。

関西新興劇団協議会は解体し、京、神各地

と共に、大阪に於いても大衆的組織として新

興劇団協議会が近く結成される。

鮮人劇団が近く生れる。

戦旗座

中旬に於ける新築地「風の街」公演、下旬

構成劇場「母」公演に於て、全員による後援

を行った。

二月IATBデーのための公演に、アレク

セイ・イワーノフ作「装甲列車」を市内今里

劇場にて上演すべく着々準備中

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

集している。

資格としては将来プロレタリア演劇の道に

進み行く決心のある者でさえあればよい。の

で希望者は至急、北区中野町三丁目九三、戦

旗座事務所へ申し込んでくれとの事である。

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

」

☆ 戦旗座拡大強化万才!
 ☆ 基金三〇〇円集ること万才!
 戦旗座二月公演万才!

基金受入れ報告

合計 六拾七円貳拾銭也
 (団体では××車庫に恐らく大阪市電の労働組合、全農有志があり、あとは個人となっている)

支出報告

合計 六拾七円貳拾銭也
 (俳優鑑札代 岡町公演のための支払 公演損失費、事務所費など)
 差引残高 ナシ

(これは「大阪戦旗座報告」の最後に添付されているガリ版のピラから写したものが当時の劇団の観客支持者に対する態度を示す一資料と見ることが出来るだろう。)

このような状況を押しきって、戦旗座はIATB・国際デー参加の公演として、イワノフ作「装甲列車NO1469」と、久保栄作「ファッシュ人形」を上演した。

まづ、残されているプログラムによって、スタッフ・キャストを掲げておく。

I・A・T・B デー記念大公演
 国際演劇 IATB日本支部・日本プロレタリア演劇同盟

大阪 戦旗座公演

構成劇場
 ナッパ服劇団

一九三二年二月二三・二四日午後六時半

今里劇場 助演

I ファッシュ人形

配役 作・久保 栄
 人形売り 吉岡 義夫

II 装甲列車No. 1469

原作 エ・イワノフ
 翻訳 熊沢 復六
 改修 富田 常雄

時一 一九一九年の秋

第一景 花屋の一室
 ナチエジダ(ネゼラアソフの母)

近藤 泰子
 セミヨン(ワアリアの養父)

新田 育男
 ネゼラアソフ大尉 辻井 輝夫
 ワアリア(大尉の許嫁) 芝 迪子
 セリヨウジャ(ワアリアの弟)

坂谷 国一
 旗手オバブ 坂山 健一
 バルチザン 横山 信一
 外にカザツク兵

第二景 海岸
 ミイシャ(学生) 佐野 四郎
 第一の漁夫 山上 三吉
 第二の漁夫 多田 俊平
 ネゼラアソフ大尉 辻井 輝夫
 旗手オバブ 狭山 健一
 ヘルシイニン(農夫) 吉岡 義夫
 ナスターシヤ(ヘルシイニンの妻) 石井 波津子
 ズノオポフ 古河 和夫

ヘクレワアノフ 田 淵 貢
 第三景森の中の停車場
 マントの女 清水 スミ子
 教師 村上 四郎
 老婆 宮川 章子
 旗手オバブ 狭山 健一
 ネゼラアソフ大尉 辻井 輝夫
 駅長 泉 正夫
 繻帯の百姓 筒井 五郎
 袋を持った百姓 大西 郁二
 支那人シン・ピン・ウ 横山 信一
 外に兵士、機関手、避難民大勢
 第四景 教会の屋根
 ミイシャ 佐野 四郎
 ヘルシイニン 吉岡 義夫
 第一の漁夫 山上 三吉
 第二の漁夫 多田 俊平
 シン・ピン・ウ 横山 信一
 オコロク 木村 守也
 ヘトロフ 前田 竜夫
 長老 村上 四郎
 アメリカ人 大地 東洋児
 百姓女、百姓大勢
 第五景 鉄道線路のある土手
 ミイシャ 佐野 四郎

ヘルシイニン 吉岡 義夫
 第一の漁夫 山上 三吉
 第二の漁夫 多田 俊平
 老人 坂谷 国一
 オコロク 木村 守也
 シン・ピン・ウ 横山 信一
 百姓大勢 横山 信一
 第六景 装甲列車の射撃室
 ネゼラアソフ 辻井 輝夫
 旗手オバブ 狭山 健一
 ヘルシイニン 吉岡 義夫
 百姓大勢 吉岡 義夫
 第七景 農家の納屋
 エゴオル(ヘルシイニンの父) 古河 和夫
 ルキシチナ(ヘルシイニンの母) 宮川 章子
 ナスタシヤ 石井 波津子
 ヘルシイニン 吉岡 義夫
 隣人たち
 第八景 バクレワアノフの家
 バクレワアノフ 田 淵 貢
 マアシヤ(彼の妻) 藤井 貞子
 セミヨノフ 辻井 輝夫
 ヘトロフ 前田 竜夫

第九景 停車場倉庫
 セミヨノフ 九木 芳夫
 エフメンコ 辻井 輝夫
 ズノオポフ 多田 俊平
 ヘトロフ 古河 和夫
 マアシヤ 前田 竜夫
 ヘルシイニン 藤川 貞子
 労働者 百姓大勢 吉岡 義夫
 演出 九木 芳夫
 演出助手 大岡 欽治
 舞台監督 久保 賢
 製作 浅野 猛府
 製作 青山 俊一
 衣裳 天城 純
 衣 石井 波津子
 小道具 渡辺 三郎
 若木 三哲
 渡辺 三郎
 大山大悦
 宮原悦夫
 小林孝一
 外村 晋
 効果作曲 外村 晋

このプログラムの欄外の上段には「戦旗座公演批判会……二月廿五日午後七時より……会場・新世界 パンヤ食堂二階……会費一〇銭 モリモリ参加しろ」下段には

「国際演劇資料展覧会・近日開催 会場・未定・市内数ヶ所・主催プロット大阪地方支部」

と二つの予定が印刷されている。

(註・この公演批判会は、大阪の南の興行街で、通天閣のある盛り場の新世界の大通りにあるパンヤの食堂という大衆食堂の二階で行われた。うろ覚えの記憶では三十人位集合したように思う。

なお会費十銭とあるが、このプログラムのパンヤの食堂の広告には

大衆向本式洋食 十銭より

パンヤのサイダー 十銭

コーヒにケーキ付 五銭

御宴会と集會も 五銭から

と並べてあるので、昭和七年時代の物価、及び大衆の生活の一端がうかがえる。)

この公演が、大変困難な劇団事情の下に行

一つは、大阪労演機関誌「大阪労演」一一〇号(一九五八年六月号)に書いた「関西の新劇運動」(第二一回)の昭和七年度内の記事である。

この公演は、IATB国際演劇デー記念公演として、構成劇場、ナッパ服劇団の助演で行われた。

構成劇場から渡辺三郎、多田俊平、狭山健一、近藤泰子、宮川章子などが参加し、舞台装置は浅野猛府が担当した。

イワノフの「装甲列車NO1469」は、河原崎長十郎が、市川左團次(二世)が昭和四年にソウエトで歌舞伎を紹介した際一座して、みやげに買った台本を翻訳して、心座で昭和四年十月に上演しようとしたが、禁止になり、更に翌五年、新築地劇団も土方与志演出上演しようとして禁止になったもので、戦記座としては大物すぎたが、構成劇場の援助を得て上演した。(下略)

(註・(下略)の処は、これに続く十行文であるが、これに「プロット」報告書によ

われたが、同時に、治安維持法下の特高の妨害工作もあって、決して「太陽のない街」以来の劇団の上げ潮的傾向の内に、安々と行うことが出来たのではなかった。

次に挙げるような各種の報告、記録が、これを示している。

まづ、プロット機関誌「プロット」一九三二年五月号(第六号)に掲載された、プロット常任中央委員会書記局発表のものをみよ

う。

大阪地方――

戦旗座

「装甲列車」公演

京都と同様の理由で二月十五日を廿三、廿四日に延期された、戦旗座「装甲列車」公演は、今里劇場に於て斗われた。

第一日 二四三名(内労働者二二一名)
第二日 二一九名(内労働者一八一一名)
約二〇〇円欠損

このソウエトのバルチザン斗争を描いた

戯曲は、東京に於いては絶対禁止を命ぜられていたが、大阪に於いて上演の合法性を獲得したものだ。

次は、同じく同誌にのった「日本に於ける国際的十日間」(生江健次)という総括的論文の内の「大阪の項」から採った。

大阪地方支部では、戦旗座が二月十四日、十五の両日を予定し、劇場を決定して準備を進めていたのであるが、所轄署の干渉(渉)の為に二十三、二十四の両日に延期して「装甲列車NO1469」と「ファッシュ人形」を上演した。「八月十五日に向って」と「農民を救へ」は不許可になっている。十二月五日にはIATBの為の集會を、少数であるが開催している。

以上は、一九三二(昭和七)年二月の公演のあと、プロットによる報告、記録であるが、この公演について、戦後になって書いた私の記録が二つある。

ればとして書かれているものである。しかし、今回の執筆に当り、その十行文の記事が、他の事項と混乱して書かれていて、全く間違っている。この機会に、この十行分はカットするように訂正しておきたい。

続いては「赤旗」に連載された「近代日本演劇の足跡」第六回(一九六八年一月二〇日号)に書いた、戦旗座の「装甲列車」による国際演劇デー参加の記事がある。

「前略」

(一九三二年一月には構成劇場の「母」の上演を引きつづき強力に応援したが、前年からIATB(国際労働者演劇同盟)の方針による演劇オリムピアードを目標としての、国際演劇デー推進のため、二月十五日の国際演劇デーのための公演を企画した。上演作品としてイワノフ作「装甲列車NO1469」と小型演劇「八月十五日に向って」(三好十郎作)「農民を救へ」(鳥公靖作)を検閲に提出した。

「装甲列車」は、東京では一九二九年(昭和四年)十月、心座によって上演しようとし

て公演前日に禁止された作品だったので、検閲への提出台本に慎重な配慮――たとえば、党员、日本人、赤衛軍、シベリヤ鉄道沿線、などのト書きは全部消して――出したために、部分カットで制限付許可になった。

内容はロシア革命にたいしてシベリヤからソビエトを顛覆(てんぷく)しようとして、反革命軍が日本その他の帝国主義軍隊の応援でシベリヤ占領を意図したが、勇敢なバルチザン斗争によって、その企図は粉砕される、というテーマである。

最初は演劇デーの当日の上演の予定だったが、延期されて二月二十三日、二十四日の両日上演され、小形式の二本は却下となり、代わり久保栄作「ファッシュ人形」がつけ加えられた。

「装甲列車」はイワノフ原作、熊沢復六訳富田常雄改修、九木芳夫、大岡欽治演出、浅野猛府装置のスタッフで、構成劇場、ナッパ服劇団(労働者劇団)の助演により、本邦初演の記録を残した。会場の今里劇場は、大阪東部の盛り場の小劇場で、観客数は、二十三日二百四十五人(内労働者二百二十人)、二十四日二百十九人(内労働者百八十八人)。経営的には二百円と報告されている。

以上が、大阪戦旗座の「国際演劇デー」に参加した公演記録の公表されたものであるが、当時、劇団内部において、如何にこの公演を批判反省したかの記録が、幸いにも私のもとに残っている。「一九三一年十月—三二年八月」の戦旗座報告のコピー（未発表）の内に含まれているので、この公演に関する処だけを書き抜いてみる。

プロット大阪地方支部報告書（一九三一年十月—三二年八月）より「戦旗座報告」

一九三二年二月二三、二四日

IATBデー記念公演 今里劇場

「装甲列車NO1469」

観客数 六〇七人（一回平均三〇五）

（内、労働者 四〇五、学生 二、一般 五一、招待 一五一）

二月公演は、大阪市東端のヘンビな小劇場しか利用出来なかつた事、並びに最初の決定（十四、十五日）が、二十日の総選挙をひか

えていた事によって、それ故に特に我々は重要視したが、警察当局の干渉にあり、日取の変更、変更による公演日の不十分な宣伝、特に「太陽のない街」公演の全市的動員を中心プランを立てられていた等が基因して、動員において失敗した。ここで我々の計画がズサンであり、又脚本選定において場所と観客対照との充分な考慮が払われていなかった事が批判される。

「太陽のない街」後、大阪朝日会館は、我々にフワサされてしまった。

二月公演に於ける経営プランは「太陽のない街」における観客動員数を資料として、二千人の動員目標をたて、財政的には「太陽のない街」を考へて、前売券を発行せず、公演基金を大衆的にまき起す事と同時に、劇場員には最低五円の責任額を負して準備金を調達し、基金として四十八円六十四銭、劇場員十五人より百二十四円五十銭を調達し、活動資金に当て、活動資金は、当日の売上げから返す約束にて借入れしてきた金、入質した金、高利貸から借りて来た金であった。が結果に於て二百円の欠損を見た原因としては、日取が変更された事も一原因にはなるが、「太陽

のない街」を基準にしていた事、劇場の地理的事情を調査しなかつた点、総ゆる方面より見ても解る如く、少し計画性がなかつた事がいえる。

組織的計画性の欠除。この一つの現われとして、二月公演が取り上げられる。

今里劇場という地理的調査がなされず、劇場の定員四百人に対して、二千人の動員率を立てて財政プランを立てたという点に、如何に計画性に欠けていたかが知られるであらう。会場借入れに対する困難も一原因となるであらう。

十一月「太陽のない街」上演以後、我々の唯一の劇場であった朝日会館の封鎖は最大の痛手である。大阪地方の如き劇場の小さい処であり、あつても大部分松竹系統のため、借入れに対して非常な困難がともなう。現在に於ては、中心の中央公会堂があるが、劇場としては不完備であり、会場費三百円という莫大な金額に登り、それも契約と同時に納入しなければ、何時契約があつても解除するといふ有様だ。だからといって、我々の演劇活動を放棄してはならない。大衆の文化的欲求に於て、我々は活動をなさなければならぬ。

「装甲列車NO1469」観客数、出支表
観客数 労働者四一人 一二四、九五円
一般 五二人 二九九、三二円
欠損 一四七、三七円

レパトリーと検閲

IATBデー記念公演

「装甲列車NO1469」エ・イワノフ原作、富田常雄改作・脚色

ソビエト同盟における反革命軍との斗争と労働提携。スタンダード劇

検閲・制限付許可

「八月十五日に向つて」三好十郎作

IATBデーの宣伝、小形式劇

検閲・禁止

「農民を救へ」島公増作

東北飢饉教授のアピール 小形式劇

検閲・禁止

「ファッシュ人形」久保栄作

社会ファシストのバックロ 小形式劇

検閲・制限付許可

「装甲列車」は、東京において再三禁止されたので、本邦初演である。（戦後京都新劇団合同公演において、完全上演された。）

本年一月以後、我々の脚本に対して、保安検閲関係の実権は完全になくなり、直接、特高思想係によって検閲がなされるようになった。

（註・従来検閲に提出する台本は、普通では、一週間前、二部という規定であつたがこの時から、我々の場合には一カ月前、台本四部ということになった。保安係検閲、特高思想係検閲、憲兵隊特高係検閲という三重の検閲網が実施されたのである）

その為に、脚本の病的却下は少なくなったが、検閲において苛酷となり、公演自体は許しても、その内容は骨抜きになつた。と同時に却下される場合は「申請取下げ」を強制し、テイサイのいい禁止をなす様になつた。理由は、申請のものは改作する事によって、再び検閲をうける事が出来るが、却下されたものは、表題変えのものでも受けつけぬという事になる。

（註・なお、東京で許可されても、大阪で却下されるものもあり、それで地方独自性を強調する場合も屢々あつた。）

最も極端なカットは「装甲列車」であつた。殆んど一頁に朱線のない箇所はなく、一場は殆んど全部とられてしまった。これでは

検閲上における彼等の無能さを、彼等自身の手によって完全にバグロしたので、その後は最小限度のカットで、我々の脚本に致命的打撃を如何にして与えるかという積極的検閲態度に出た。

その検閲態度の露骨な現れは、特に小形式のものに見る事が出来る。

「八月十五日に向つて」は国際的提携をうたつてゐるから、又シュプレヒコールというもの、アチの効果が強いため、という理由で却下された。

「農民を救へ」は、ブルジョアジー並びに、その手先共の東北飢饉救済のインチキをバクロされては困るという理由で却下された。

「装甲列車」は、赤軍—バルチザン—白軍の関係が、徹底的に鮮明にされているし、大衆的蜂起、並びに暴力の行使、破壊行為と戦争反対が、その制限の中心である。彼等はハッキリといつてゐる。「戦争」という言葉は一さい使わせないと。

（註・「ファッシュ人形」は、幸いにも検閲台本が残されているので、次号で具体的にカットされた場所を示すことにする。）

創造的活動の成果と諸欠陥

「装甲列車」は、我々が手がけた最初の観劇物であるだけに、最も困難したものである。これは観劇の演技上に無経験と、内容の理解の不充分と、相まってギョコチないものとなってしまった。(洋装した日本人)しかし、演技者の二、三に著しい進歩を見る事の出来たのは見逃してはならない。又、全体の統一という点から見れば、装置其他においても「太陽のない街」よりは一步前進を見る事が出来る。

稽古期間

一月廿六日—二月廿三日(一回日取変更)

日数 二九日

× 會員會議—三回 演出會議—三回 読合せ

× 一回 立稽古—十七回 舞台稽古—一回

(徹夜の「通し」の舞台稽古をやったことは身体を弱めたといえ、完全な舞台稽古として非常によい経験を得た。)

演技者の構成

戦旗座—十四、構成劇場—十四 ナッパ服

劇団—五、計—三三

× 各班の構成と新メンバー

演出—三 演技—十四、大道具—二 照明—二 衣裳—一 (内新メンバー七)

(つづく)

本稿に関する資料文献

日本プロレタリア演劇同盟機関誌「プロット」一九三二年二月特別増刊号(第二号)

三月号(第四号)五月号(第六号)

日本プロレタリア演劇同盟機関誌「演劇新聞」一九三二年三月二十日号(第十三号)

「大阪無産新聞」一九三二年一月二十日号(第三号)

「プロット大阪地方支部報告書」(コピー)

「戦旗座報告」(一九三一年十月—三二年八月)

大阪戦旗座発行

一九三二年二月二三、二四日公演プログラム、基金募集ピラ(ガリ版)

大阪労演機関誌「大阪労演」(二一〇号)

一九五八年六月号

「関西の新劇運動」(第二一回) 大同欽

治

「近代日本演劇の足跡」(第六六回)

「赤旗」一九六八年一月二〇日号

「大阪戦旗座・イワノフ」装甲列車NO1 469」 大同欽治

劇評

こじか座の「人形の家」

猪野建介 (劇作家)

昭和五十一年四月二十三、二十四日の両日、杉山市民会館中ホールで、こじか座二十周年記念公演としてイブセンの「人形の家」が上演された。この企画を耳にしたのはたしか去年の十一月、愛媛県高校演劇研究会が誕生して第一回愛媛県大会が開催された際、畑野氏から伺ったと思う。内心驚いたが、しっかりやって下さいよ、と励ましの言葉をかけたように覚えている。驚いたというのは、大変なものと思っただけから。

そして二十年のキャリアがあるとしても、あの大作の難物をどう料理して客の前に出すのか、いままでのこじか座のレパートリーからみて、いささかの不安がつきまわったのも事実であった。秋から冬、冬から春と、公演までの長い長い苦渋が思いやられた。

しかし、私のつまらない杞憂はみごと蹴飛ばされて、幕は開いたのだ。だからまず、こ

こまで持ってきた畑野氏を中心とする座員全員の、その勇猛心と、情熱と、努力に最大の敬意を表しておかねばならない。

こじか座の創立者であり、演出担当の畑野氏はパンフレットの中で次のようにいっている。「私たちはこの「人形の家」を高く評価する。それは家出したノラもヘルメル以下登場人物すべても否応なく「人間は何か」について考え、それなりに「人間」を発見しているからである。(中略)古典は現在にかけているものを永遠に提示し続けるものである。古典が迫る人間の意味について私たちは素直に考えたい。そして、古典の中にある今日的意味を正しく表出してゆきたい。今日ほど人間が「人間」を見失いがちな時はない。「人間」を発見することが実はもっとも焦眉の間題であることを改めて私たちに考えさせてくれるのがこの作品である。「今日のノラ」や

「今日の人形の家」はきょうも私たちのまわりに無数に在る。」

これによってこじか座が「人形の家」をとりあげた意味など演出意図は明確にうかがえるわけで、作者が「この作品は婦人解放を歌ったのではない、人生の描写である」といってきたその姿勢に焦点を合わせたものといえよう。作家にとって人間の探究は第一義の存在理由である。幸か不幸か「人間」というものは余り変わらない。いま尚、万葉が生きており、シェークスピアが生きているのも、そこに「人間」があるからにちがいない。「人形の家も」自我の確立というテーマのもとに書かれたものであろうが、人間探究という作家としての信念には不動のものがあつたとみるべきであろう。

事実、私はこの芝居を見終って、「人間の懐れさ」といったようなものをしみじみと感じさせられた。ヘルメルの徹底したエゴイズム、クログスタットの荒廃した精神、リンネ夫人やラング先生の悲しいまでの心情、これらはすべて日常われわれが、あらゆる場で接するものであり、又、私自身の中にも多かれ少なかれそれらのものは巣くっている。ノラにしても、自我の確立をなし得た勝者である



が、その勝利の片隅にいしれぬ孤独と寂寥がひそんでいるのを感じなかっただろうか。勝ち誇ったその心奥のどこかに、思いもよらない空洞がポッカリと開いているのをみながら、たてあろうか。

そうしてこれら谷底に突落とされて傷ついた人たちは、それぞれ自分なりに這いあがろうと努力をすることになるであろうが、このような状況は私たちの現在となんら異なるところはない。われわれ庶民のうすら寒い僻れさ、その憐れさは抱きしめたいような憐れさである。つまりこの芝居をみて、登場人物すべてが実に身近かな人間として私の眼に映ったのであって、その限りではこの舞台は一応成功したといえるのではなからうか。

演出も至極く自然で、肩をいからせたところがない。あの作品から受ける重苦しさというか、やりきれない暗さというか、そのようなものを出来るだけ排除しているのもよかったと思う。

装置（藤本さん）も、照明（田中、今井さん）も、効果（竹村、佐々木さん）も、地味ではあるが、よくマッチしていたと思う。衣粧（高木、三津井さん）もノラの衣粧には苦心のあとがみえたが、全体的に抵抗を感じさせ

せるようなものはなかった。大体、裏の仕事というものは自己顕示欲が強くてはいけないのだ。装置を感じさせない装置、効果を感じさせない効果……、そういった心構えが二十一年の歳月の中で醸成されていたのであろう。

次に演技について少しふれてみたい。多少の苦言を呈しても、それでヘコタレルような、可愛い仔鹿ではなくなっている。いや、二十年もたつと、コジカゴンという怪獣に変容しているかもわからない……、そうなる、かえってこわいのだが……。

まづノラである。ノラ役の亀井さんは、ベテランで、達者な人なのだが、大役に張り切りすぎていたためか、セリフにも、動きにもゆとりがなくて一本調子のように思われた。つまり、夫のための、クログスタットからの借金とニセの署名、それを夫に気づかれまいとして、殊更にあかるく陽気な態度で夫につくそうと心がけるのであるが、せかせかとした気持からか、どうも浮きあがってしまった、わざとらしさに終始してしまつたように思えてしかたがなかった。屈折した感情をもつと余裕をもってメリハリのあるように描いてもらいたかったと思う。しかし最後に家出を決意し、ヘルメルと対峙して女性宣言をす

る場面では、本領を発揮して、みごとにしめくくったのはさすがであった。

ヘルメルの野呂氏は、一応うまくこなしていたようだ。セリフの発声に少し難があったが、柔かい身のこなしは好感が持てた。ところが、最後のノラとの対決の場では、亀井さんのノラとは反対に、息切れしてしまつたような感じになったのはどうしたことであらうか。

松井氏のランクは出色の出来ではなかつたろうか。飄々とした感じだが、よく抑えがきいていて、時に足元をよろめいてみせたりするが、足はちゃんと板についている。セリフ廻しや、所作から三島雅夫を想起させたが、それはともかくとして、いかにも味のある演技が印象的であった。

クログスタットの大塚氏は初舞台とのことである。初舞台だとすればまづまづといいたところだが、やはりギョコチなさが眼についてしかたがなかった。他の人たちは大体歩いているのに、本当に歩いていないのだ。松井氏とは逆に足が板についていない感じはいなめなかつた。

リンネ夫人の藤田さんは好演だった。正直なところはじめはそんなに思わなかつたのだ

が、進行につれて次第によくなつていったようである。役柄をよく心得ていて、地味ではあるが、芯の強さをうまく表現していたと思う。今後成長してゆく人ではなからうか。

その他、乳母、女中、メッセンジャー、子供さんたちは特にこれという破綻はなく、子供さんたちは可愛いかった。それだけに、ノラならずとも私たちが心が痛んだ。

これは演技だけのことではないのだが、ノラが家出を決意してヘルメルと対決し、遂に出ていって暮になるまでに約三十分近い時間を要した。女性宣言というか、人間宣言というか、この作品では最も重要な個所を、時間でどうのこうのというのではないが、現代の観客には、あんなにまでクドクドしくしなくともわかるのではなからうかという疑問を持つた。これは演出の問題も関わってくるのだし、今後、検討して欲しい課題ではないかと思われる。

以上、的はずれの評をしましたが暴言多謝。それにしても、こじか座は二十年もよく生きつづけたものである。殊に愛媛の特別に悪い演劇的風土の中で、もがいたり、あがいたり、苦しみつづけて生きて来たのだから、特

に高く評価するべきである。

「特別に悪い演劇的風土」といったのは、人為的にそうなっているというのである。例えば、高校演劇一つをとってあげても、ここ十数年の間、各高校間の演劇部の交流は許されず、「高校演劇コンクール」を開くことが出来なかつたのである。ところが、昨年秋、やっとその厚い壁が破られ、第一回の演劇コンクールを久々ぶりに持つことが出来たのであった。これには畑野氏たち心ある人たちの長い不屈の努力がその蔭にあったのである。

劇評

「左の腕」(劇団潮流)を観て

かたおかしろう

(劇作家)

「左の腕」の舞台化となれば、前進座のそれと比較検討ということになるのだから、幸か不幸か私は前進座の舞台を観るのがしている。だから、劇団潮流の歩みの中で、今度の舞台を考えてみたい。

劇場で出会った何人かの知人たちが、声を揃えて言ったことは「潮流さんは企画がパツグンやねえ」という感想だった。去年の大阪新劇フェスティバルに「遺書配達人」の公演で、戦争責任と戦後民主主義の未熟部分を衝いた舞台は、松本克平(俳優座)、藤山喜子

(関芝) 小林泉(関芝)らの客演のこともふくめて大きい課題を投げかけたものだった。そして、今度の「左の腕」を第一弾として系統的に「松本清張の世界」に挑もうというのである。すでに第18回公演として秋に「霧の旗」が第二弾に予定準備されている。

戦後民主主義文学の特異な旗手として、松本清張の世界は圧倒的多数の読者をつかみ、他の追従を許さない地位を築き、なお現役としてその巨歩をさらに前進させようとしていることは衆知のことだ。

この清張文学の足どりを舞台化という仕事で追跡してみることは、様々な意味を持つだろう。社会的視野を頭健な基盤にしながら極めて柔軟な大衆性をあわせもつこの文学は、硬直しがちな新劇の悪しき伝統に、大衆化の樹液を注入してくれるだろうし、推理の構造は、いっそう劇構造の楽しさを学ばせてくれるだろう。

そういう試みとしての「左の腕」の舞台を期待して観たが、期待を半ば満足させてくれて、半ば疑問をのこした感じがした。

脚本・演出が高松昌治だったが、高松はか

の足になってしまっている。少くとも、稽古場へ通う時ぐらいいは着物で通すぐらいの自発性が欲しいが、きいてみると若い女優さんもジーン姿で通っていたようだ。

脚本の問題を考えてみたい。高松脚本の秀でていた点は、卯助の半生の背景の書きこみであろう。

主人公卯助が無宿人になるにいたった時代の背景に天明三年に關東、甲信越を襲った大凶作からはじまる民衆の苦辛の運命を克明におさえている点は見事だ。これがなければ、犯罪がなにゆえに犯罪なのか、犯罪を生む社会の犯罪性は浮かび上がってこなかっただろう。清張氏の原作では短篇小説ということもあって、その突っこみを読者に期待した形でさらりと終っているが、高松は、ねばり腰で善良な卯助の一面へ立ち戻って独り語りの芝居でそれを描こうとしたのである。

ただ、その方法が、独り語りで、字数にして一〇〇〇字強の長セリフで書きこんでいるのが、やや芝居の緊張をだらけさせてしまうのいがいとも残念だ。ここで明かされるドラマの真相をクライマックスにするためには、戯

なり徹底して、歌舞伎的処理を駆使した。下座囃子を流し、立居指導に舞踊家の志賀山勢州を招き、板矢真紀の装置もまさに世話もの屋台ががちりと組んだものだった。

卯助を演ずる藤本栄治をはじめ、俳優諸君のセリフまわしも、下座にのりながら、いかにも歌舞伎の伎に挑戦したものだった。たしかに、その挑戦ぶりは、相当なものだった。かなりの稽古努力がうかがえて、歌舞伎通の観客筋をも「手」をうたせるものになっていた。しかし、なぜか隙間風が流れてくるのである。つまり、挑戦はあくまでも挑戦なのであった。劇団の指導的俳優である藤本栄治などの研究ぶりはまさに脱帽ものであったが、それにしても「ようやはらる」という感想が先に立ち、そこから「卯助」を覗きつけられなかったのはどういふわけだろう。察するに藤本はいかに歌舞伎手法で卯助を料理しようかに全力投球したのではなからうか。卯助をいかに演じさるかという稽古過程の中で、必然的に歌舞伎伝統のセリフまわしや、立居振舞が出てきたものと思えないのだ。

限られた枚数で、歌舞伎伝統の継承を論じきれないが、簡単に言ってしまうと、一つの

曲の前半からそのための伏線をいまい少し巧妙に張りつめておいて欲しいのだ。

だから残念なことに、芝居のクライマックスが、父と娘の情愛場面に傾ききって、この卯助の人間告白が影薄くなってしまうのだ。

さらに、大詰めの、女将や銀次たちが卯助父娘を守っていくこととする決意にしても、そのことの途方もないほどの厳しさが伝わってこない。脚本、演出、演技ともに、この卯助の告白から幕切れまでに、もっと厳しい詰めが必要だろう。

銀次にしてもおあきにしても女将にしても、そこでは激烈な自己変革に身をさらすのだから、そこをくぐりぬけないと、あのラストの楽天的な手拍子は打てないはずなのだ。楽天性がその後も見張りつづけるだろう。上の圧力をはねかえし得る展望なのだ。高松は言いたいようだが、苦しい血を吐く自己脱皮のない楽天性というものは私は信用できない。

最終場面、おあきの笑いの演技の不鮮明さが、それを象徴していたようだ。

批評というといふ苦言が先立ってしまふ。が、潮流の「左の腕」上演は、近頃の快挙で

様式にしても、それはその役なり状況が要求するリアリティが生みだした様式であり型だと思ふのだ。それが型なり様式なりとして走り歩きすることが大へん奇妙なことなのだ。私は思う。そういう意味で、私は、逆に新劇の中から秀れた様式や型がもっともっと生み出されていいと思っている。

そういう発想が高松演出や藤本をはじめとする俳優諸君にどうあったのか、そこが疑問として私の胸の中のこったのである。

藤本の演技を観た某々氏が「えらい酔うてやったる」「旦那芸としては一流や」と悪口をたたいていたが、観客の中にはそういう藤口たかすばすまぬ雀氏がいるものだといえ、そういう藤口をたたかせる隙は考えてみなくてはなるまい。

が、様式が型がと、論ずるまえに、こういう劇世界を演ずる上は、例えばまず着物を着こなし、それで生活するリズムを身につけてほしいと思うのだ。これは若い俳優に特に目立って感じた点だ。たしかに志賀山氏の立居指導が行き届いていて、若い人たちもよく勉強しているが、指導が入ったところだけがピシッと決まって、そして芝居を要求しない日常的な流れの中では、例えば着物でない洋服

あることにちがいはない。

秋の「霧の旗」が今から楽しみだ。難しい事業にとびこむために、それを支えるための普段の積み重ねが準備されないと、その結果に露出する未熟さが、せつかくの良質を消しとばすこともある。俳優の小さなクセ、発声の未熟さ、上げれば限りのない小さな未熟さが、舞台上で独り歩きするおそろしさを、潮流の若い俳優たちが今度の舞台で知ったとすれば、秋の公演は期待をますますもてると言えよう。

寄せられた戯曲・台本・雑誌

浅野良二 「盆待ち」 「あかぎらい」

栗木英章 「夜明けの機関車」 (初稿)

宮倉義文 「しあわせの星座みつめて」

たけいし・いもと

「夜明け前に歌え」

季刊 「えひめ」 第三号

「高校演劇」 47・48号

プレヒトの会・集団創作

大橋喜一・矢野 喬・芳地隆介・山田民雄

「日本繁栄学入門」 三〇〇円

(演劇会議発行所にも若干有ます)

志摩敬子作「白い星流」

— 岡山職場演劇集団 —

岸本敏朗

(四回会)

幾度も素通りしながら岡山で降りたのは始めてかな、と思いつながら会場である中央労働会館へタクシーを走らせた。三月十四日午後一時近く、タクシーの運転手が道を間違えたくらいその会場は町中にひっそりとあった。三階、開演までもなくだろうと思われる会場にしては静かすぎて思わず「もう始るんですね？」と聞いた。それでも開演間際にどやどやと入り、兎に角二、三百人入るだろう会場がそれらしくなった時、幕があがった。

音楽も効果もなく、いきなりあがった。そして戸口らしいところで板つきしていた女性がそれもいきなりしゃべり出した。暗いなあ、顔がみえないなあと思ってるのとこれ又いきなり前あたり用のペビーが入った。バックは会場そなえつけの紺のカーテンのまま、舞台には必要な置道具を並べただけの装置、国鉄方式だ。二幕、三幕になるとその道

具が少し変り、バックの紺のカーテンがひきあけられて、コンクリートの壁に直接ライトがあてられる。

一幕は退屈だった。一人一人の演技者は異常とも思えるくらい集中しているのだがそれがかえって人形をおもわせる位生気が感じられない、これはどうなるのかなーと思った。二幕は深夜の看護婦さんが一人勤務している、それこそ労働現場だ。すると、突如として動きだした／徹底した写真——うごきそのものにはまだ滑かさを欠くが、入院した経験のある私はその緻密な現場再現のミザンセーヌにうっとりみとれた。ピンポン／患者が呼ぶ、懐中電灯を持って出ていく、点滴の用具を持って帰ってくる。電話がなる、仮眠しようとする、患者が不眠を訴えてくる、カルテに記入する、深夜の交替、一人一人の患者について正確な受け渡し——正に現場の再現だ。

三幕になって一人の看護婦がその場で倒れる、あれなら倒れるのが当たり前だ、と思ってる間もなく、正に病院で倒れた事を更に納得させんとするかのようになり、数人の友人看護婦が一人の医者のもとに一糸みだれず動いたのには恐れ入った。またたくまにその場の長椅子に寝かされ、ナントカ薬が何何注射、点滴の道具がそろえられ、看護婦が静脈に入りたくいと訴えた針は医者が代って懸命に入れてやり、ようやく、少し意識がもどったところで、ほっとした医者は立上り、煙草をすったところで幕がおりた。

ただちに会場で合評会がやられた。初めて見た作者はこれ又ひっそりして、さすがわの林田氏の奥さんかと思った位良く似ていた。集団の中に本職の看護婦さんが出演者を含めて三人もいる事を聞かされて、さもありなんと思いつつ、指名されて、この不思議な感動を今、整理しているのです、としばらくもどろしゃべった。

神戸から、滝の内氏、浅野氏、(いずれも国鉄出身)が来ていて、すすめられるままに、打ちあげ交流会に残る事にした。私達三人に鳥取のありの宮倉氏と、もと演集の創立メンバーの前田氏が外部からの参加で、

同じ会館の二階で皆がかたづけをおえて再集合同じくのを待った。午後七時一ようやくそろってはじめようとした時、宮倉氏は最終の汽車という事で会館を出た。

岩城薫氏。ここにも一人の演劇狂者が居た。劇歴31年を名乗り、自らキャップと名乗る演集の代表であり、役者を専門としつつもこの作品では演出をやり、創造、組織の中心として睥睨しつつも、「自分は将来、この集団で隅の方で釘打ちしか使われなくなっている時の来るのが夢だ」と豪語する。「それあ、その時でもあいつは俺をのけものにしやがったとあなたなと思いますよ」と私は辛じて抵抗したが、お前は事務局長ではなくジミ局長だとやられた。

全員のMEMバーが10人余の打ちあげは次第に酔いがまわって楽しいものになり、会館が9時迄と張り紙してあるのを気にする私に「何が9時か」とキャップは再び大喝し、堂々と交流会はつづく中、10時前、最終の新幹線に乗るべく中座した。一／脈打つ国鉄演劇の伝統——私は芝居を見ながら、交流会にひたりながら、何度もそうつぶやいた。

現在私達西日本の創造系譜を考える時、どうしても私の中にうかぶのは一つは昭和20年

代の京芸から流れ出ているんな所で花開かせた発展経路であり、もう一つ、戦後、咲き乱れた職場演劇の最後の砦としての国鉄演劇の底知れぬひろがりがあると思う。私達の創造理念を今、なんらかの検討を加えんとする時、この二つの伝統がどう位置づけられているのかという事の検討が一つの大きな鍵になると思う。何が京芸的であり何が国鉄的なのか是非一度つっこみたいと思ってるのは私などの劇団(きつと岐阜のはぐるまもそうではないかと思うのですが)は絶えずこの二つの流れの葛藤で進んでいるところが多いので人一倍そう思うのであるが、この岡山演集を見ていて、ここにも国鉄の伝統を脈々と伝えようとしている一つの演劇集団があるのだなあという思いにまず満たされた事なのである。それでもやはりこの集団でも今は国鉄労働者はキャップ一人になってしまっているのだから……。

それはまず、自分の職場をもっと鋭く、勝れて階級的に見つめる事から、始っていい。そして徹底した写真は見る人をして職業劇団には決してないものだと思わせる舞台を創り出し、最後には観客をして「今、自分の

労働に対してどんな誇りがあるのだろうか(合表会より)という疑問を感じさせるところにまで行く。でもやはり「重苦しい、せつばつまりすぎているが、もっと明るいものも職場にはあるのに」(同じく合表会より)という感じは、私達は芝居を見に来たのに、という思いにどこか守られて出て来る、この事はどうとらえて行くべきだろう。

でも兎に角、書き手を育ててゆく、そして下手でもなんでもがむしゃらに板にのせていくという国鉄方式はここから三人も書き手を創り出しているという。そして志摩敬子はきつとその中でも一つの総仕上げのな生れ方をしつつあるのだろう。彼女のすぐれた観察力と綿密な言葉のやりとりには三作目とは思えないひらめきがあった。次回を楽しみにしてますという会場の声は、この「白い星流」が今一步だったという思いと、にもかかわらず、そのような大きな可能性がはつきりと見え、現実感があつた。病院を描きつづける事は結構。次回は苛酷な労働そのものを描く事から今一步、より大きな虚構とどう取り組むか、期待したいと思つた。

感動を呼んだ「雪の墓標」(山形)

早川 寿

(仙台小劇場)

劇団「山形」の「雪の墓標」をみて、久しぶりに鮮烈な感動にうたれた。同行した仙台小劇場や劇団ふくしまの人たちも同じおもしろいであらう。

けっして熟したけいこ量であったと思えなかったし、それをカバーできるほどの力量を持つていない「山形」である。現に多場面のテンポある積み重ねによって生きてくるこの作品が暗転——明転の機械的なくりかえしにおち入ってしまった、流動感がいまいちの不満を残したが、それらのひっかかりもいつしか忘れさせるほど、観る者の心の奥深いところへじっくりとしみこんでくる感動は強烈であった。

それはこの作品そのもののヒーマンな怒りが強い説得力をもっていたことを抜きにし、

人どの「雪の墓標」でみせた舞台その奥深さがどこから生み出されたかをあまり意識してないのは、いづれも創造技術と劇的感動の関連を方法論として重視していないからではなからうか。

北海道ゼミあたりから端を発し、昨年春の藤沢研究会、わらび座ゼミナール、そして演劇大学とつづいての創造における「技術」と「創造主体の関わり」をめぐる論議は問題提起者の意図とはべつに、どこか水と油のように対立する二つの見解のように受けとられる傾向があるように思う。それには問題提起者の一面的強調も原因しているが、同時に受けとる側の到達している創造水準がおのずから全面的統一のな理解を妨げている一面もあったと思っている。

多くの創造体験をふまえている人や劇団はいざしらず、いまようやく着実な質の創造活動を展開しようとしている若い劇団にとってあの論議はどこか二者択一を迫らせる混乱を生じていると思う。かくいう仙台小劇場もそういう摸索の長い時間を費した。

ふたたび、「山形」の「雪の墓標」にかえ

て語ることはできない。作品の勝利である。だが、例をあげれば川邑そよを演じた山崎さんが舞台の進行につれて、しだいにますます川邑そよそのものなかへ深く入りこんでいくさまが観客席にいる私にはっきり伝わってきたのには目をみはらされた。

私にはこういう演技を文字で活写する力を持つていない。それはたまたまどこかの劇団のだれかが目をみはる役づくりをみせて話題になることがある、あれだと言ったら多少読者にも見当がつくかもしれない。ただ「山形」の場合、川邑そよこと山崎さんのそういう内面的な深まりの進行をまわりの俳優さんがその持場からじつによく援けていたことだ。あとの合評会でできたことだが、山崎さんが舞台そでにひっこむと出を待っている俳優さんたちがそっと声をかけてくれるのとともたすかったと言っていた。それだけ彼女

らう。「山形」の人たちの持っている、ある種の作品にみせる独自のナイーブな感性は他の劇団の追従を許さないまれなものだ。例えば「京子よ泣くな」や「雪の墓標」によせるそのような。それはもう山形の風土性と言ってもよいくらいのものである。そしてそのすぐれた感性は今回はそれがみごとな昇華をなした。劇団外から全く舞台経験のない人も数人も客演してもらってあのみごとなアンサンブルをつくったのだから、そう言ってもよいのだと思う。

今回「山形」がみせたこのみごとな昇華をわれわれはどうやら安定的にいつの舞台でも保障できるか、それが「山形」の課題であり、われわれ東北ブロックの課題でもある。いくつもの外的な制約があるとはいえ、自ら主体的に選択した上演台本でありながら、けいこの過程で作品との主体的な関わりが弱わり、あいまになり、観念的に処理されることあまりに多い。そういう空洞化を招くのはどこかに創造技術上の欠陥があるからにちがいない。

「雪の墓標」でみせた川邑そよこと山崎さんの内面作業の秘密も、そしてあの見事なアンサンブルをつくり出し得た秘密も、それ故

ははりつめた緊張と集中の馬の背をわたっていたことがわかる。

そこにはこの作品の持つ人間的な怒りをいささかも弱めることなく観客に伝えたいという「山形」の人たちの誠実で熱い共感があった。この人間的な怒りは川邑そよその人のものであり、それをまわりの善意の人々が貫かせたのだから……。

以上のことが技術的な難点や力量不足をこえて奥深い感動を生み出した要因だったろうと思う。昨年わらび座のゼミナールで上演した「京子よ泣くな」は「山形」の人たちが持っているナイーブな感性が演出力、演技力の不足のまにに無惨な敗北をなめた舞台であったと私は思う。あの感情過多とスローテンポは「山形」の計算外のものではあつたらう。それをこんどはテンポのある多場面構成という作品そのものが不可避的に要求する舞台展開によって救われた。

だから私は「雪の墓標」でみせた成功が、いつでもどの作品でも保障されている成功とは思えない。「京子よ泣くな」の再演がゼミでの多くの指摘があつたにもかかわらず、ほとんど改善されなかったのと同じように、ここそ綿密な分析検討がまたれるのである。同時に、舞台展開のリズム・テンポや演出上のさまざまな配慮、照明、効果、装置などもそれが観客への工夫と同時に俳優の内面へ働きかける重要なモメントとして意識的に追求されたとき「雪の墓標」はさらに高い質の感動をよびおこしたことだろうと思う。

ともあれ、「雪の墓標」は今年の東北ブロックが到達した重要な創造上の指標になったことはまちがいない。

公演翌日この舞台をめぐって「山形」、ふくしま、仙台小劇場の創造研究会が開かれたことも含めて、東北ブロックの成果であつた。



劇団道化と「奇跡の人」

高尾豊
(生活舞台)

昨年暮れであつたらうか。福岡と北九州を結ぶ新興住宅団地でOL殺人事件が起きた。まもなく中学三年生になる少年が警察の手によって逮捕された。事件のあと(道化)ではこの少年と頻発する中学生の非行が話題になったのである。「自分たちが北九州巡演をはじめたとき、この少年は小学生であり一度か二度は必ず道化の芝居を観ている筈だ」と。

この話を私は内山昇から聞いたのだがその時の彼の語る沈痛な表情は、自らの仕事の非力を悲しんでいるかのようであつた。そのときあらためて「道化」の存在を知らされた。

劇団「道化」が昨年創立十周年をむかえて、いままでの小学校巡演から今年は中学校を対象に「奇跡の人」を制作した。現在中学生がおかれている社会的文化的環境を考える

とき適切な演目であると思ひし、上演に取組む「道化」のなみなみならぬ決意のあらわれと現実に対する姿勢を感じる。道化十年の歴史を知っているものにとつて彼らの歩いて来た道は決して平坦ではなかつた。なかでも四年前、劇団の創立者であり支柱でもあつた齊田明を亡くしてからは一時期迷いもみえた。が年々幾多の困難を見事に克服して最近では森実重雄、中川豊子の創立者を中心にする専門劇団として生き生きと活動している。それでも真面目な演劇集団がそうであるようにまだまだ社会的経済的には全くくまれていない。

九州の小中学校(保育園も含めて)には年中関東地方やその他から有名無名の劇団や演劇集団が一粒の菓子くずにむらがる蟻のよう

どころに泥くさいまで真摯に活動している。この泥くさいが「道化」の真面目さでもあ

るのだが……。因に彼らが移動するとき照明器具とそれを仕込む鉄柱が二屯車一台、道具を載んだトラックの後をつけて走っている。

私に課せられたのは今年あたらしく西り演に加盟した劇団「道化」の活動の紹介といま巡演中の「奇跡の人」の劇評ということであつたが、今日まで逆に中学校での公演の誘いを受けながらも観る機会を持つことが出来なかつた。しかし私は五月末東区の小学校を借りての公開舞台稽古を観たのでそのときの印象から述べることにしよう。

中学校ばかりではなく、日頃巡演している小学校の先生方に対しても働きかける努力をすべきではなかつたらうか。おしまれてならぬ。

舞台は、ワイリアム・キブスン作・広渡常敏台本を底本にしており東京演劇アンサンブルが上演してすでに一定の評価の定まっているものであるが、「道化」の作品も充分に感動的に仕上がっている。最後の幕がおりガランとした小学校の講堂に明が入ったとき、私ばかりではなく一緒に観ていた先生たちもふくめて清々しい気分が附近を支配していた。

物語は三重苦の偉人ヘレンケラー(中野陽子)の少女時代の動物的なまでの生活を若い教師アニー・サリヴァン(浜地美貴子)の斗いを記録的手法で描いている。演出(内山昇)はアニー・サリヴァンに視点を据えてこの奇跡の人の実践活動を追求し展開して成功しているのだが、欲を云えば時折り舞台が平板に流されるのが惜しい。その原因は小さくない問題点を含んでいるようにも思えるのだが、例えば、戯曲は二場でアニー・サリヴァンとケイト・ケラー(菊地裕子)との最初の出合でいきなり主題を提起している。

ケイト 最初に、なにを教えるの？

の彼らに共通して云えることはテレビ出演をうたい文句にしたり、多色刷りのチラシやパンフレット持参で売り込み合戦を演じていることである。ひどいものになると失敗作(彼らにとってはどうでもよいことなのだろう)であつたり不評をかかると、次回からは集団の名称をかえて堂々とやってくる喜劇的集団さえある。

九州とはそんなに甘い市場なのだろうか。また買手側では二色刷りよりカラーのチラシに心ひかれ無名より若干でもテレビ出演の宣伝的実績を買う。そして失望し演劇から遠ざかる。観客であり観せられるところの子どもたちは面白くもなんともないお芝居に接して、売手の押付けるサービスに仕方なく笑い、沈黙を守り、あるときは友だちどうし騒ぎあい、終れば余儀なく教わつた通りに礼儀正しい拍手をおくる。そしてお芝居とはこんなものだという思いだけが三つ児の魂百までつづく。

劇団「道化」はこのような状況のなかで、九州に根をおろして創立当初かかげた「日本の子どもたちに夢を」、「子どもたちの創造性を育んで行こう」、「演劇を通してウソのない人間と社会を創ろう」の三つの柱をより

アニー 最初も、最後も……中間もことばです。

ケイト ことば……？

アニー 心にとつてことばは、目にとつて光以上のものです。

この主題がアニーとケイトだけでなくアニー・ケラー(今林正司)やジェイムズ(八木良彦)・ウィニー(松本己記代)に至るまで劇世界の進行の過程でそれぞれがどのような関りあいを持ち発展させたか、私にはそれが各場の持つ副次的主題やそれぞれの生活の陰に拭散しているように見える。

さきに見おわつたあとの清々しい気分と書いたが、私は道化の「奇跡の人」の舞台から強烈に突きささってくる力が秘められているのもまた見たのである。その力が舞台上から飛び出すならば清々しさを乗り越えて大袈裟に云うなら観客をして人生を変革するほどの力となるだろう。そのためには主題の主従の關係的確な描写とディテールの不充足さを克服しなければならぬ。それらは劇団「道化」の今後の課題であらう。

「吹雪のうた」(劇団支木)からの教訓

黒 沢 参 吉

劇団支木の「吹雪のうた」は、弘前と青森で上演され、両方の舞台をほくはみた。五月一八日終演後、劇団弘演のけいこ場での短い交歓の席上、意見をまとめられ、手紙で書きますと答えたのは、翌日の青森公演をひかえたとところで、あれこれ注文するのはよくないと判断したからだだが、そういうセーブをしないと、かなり打撃的なことを喋りかねない気もちだった。

「文化評論」に劇評をたのまれていたが、正直困ったことになった、とおもった。それ程、弘前の舞台は一応形にはなっているが、生気に乏しいだけない出来だった。

きしたみつおさんの戯曲(演劇会議32号掲載)は、前によんで感心し、車中でよみかえして、いっそう期待がふくらんでいただけに、がっかりした。舞台のよくない主な責任は、演出(作者による)にあるとおもった。戯曲

と舞台とは、次元のちがう世界だということ

を、改めて見せつけられた気がした。

それでも翌一九日、青森の市民会館のロビーで開演までかかって、気の重い劇評をまとめ(二〇日)切なので、そうしないと間に合わなかった)、それから、二日目の舞台を(あまり期待もなしに)みた。

みているうちに、おやおやおもった。

前夜の舞台と、だいぶ変わった印象である。

ひとりひとりの演技が、さほど変わったとはみえないが、役々のかかりに密度がある。テノボはあいかわらずタップリスローで、ほくの生理には合わないが、お客とはガッチリ噛み合っている。それが、景を追ってひとつのリズムにたかまり、劇場の雰囲気は熱くなった。青森の舞台は、かけねなしに成功だった。前夜から一緒だった関きよしさんの、芝居は生きものだねえ、という感慨がまことに言い

えて妙なので、ほくは可笑しかった。一夜で芝居がガラリと変わるのを、ほめていいのかどうかはともかく、変化の秘密のいくつかは説明できる。

昼の舞台稽古で、演技のテノボとドラマの緊張関係がみなおされ、一定の手なおしが生きたこと。景の転換をシルエットで見せ(弘前では暗転—それが長かった)、そこへラストでしか使っていない主題の音楽を流すことで、ドラマの断絶を防いだこと。

景のアタマに、姑役の演技者をだしカレンダーを判がさせることで、季節を明示し、進行にリズムをつくったこと。

そして何より、お客の量(弘前四〇〇にたいし、青森一〇〇〇)と質(地元劇団ということと、出稼ぎというアクチュアルな問題を扱っていることへの共感、期待)が、確保されたこと。

最後のことは、絶対といってもいい位の力だが、一面こうした応急的な改善については、関さんのアドバイスがあって、それを生かしたという話だから、弘前のままの舞台でも地元の青森でならうけいれられた、と考えることはできないだろう。

ともあれほくは、いったんかいた劇評を書きなおす破目になった。それは、弘前の舞台だけみた人が読んだら、甘いと言われそうな文章になった。

演出への不満とは、どういうことか。

せんじつめると、舞台が戯曲の忠実なあと追いなぞりだ、ということ。

演技者主体の自由な芝居になっていない、ということである。

芝居づくりの第一段階が、戯曲を青写真としての立体化を経過するのに至当かもしれないが、その先の展開は、演技者の解放された飛翔によらなければならぬ。極言すれば、演技が作者にとってもいもかけないものであるほど、芝居は生きている。戯曲によっては、そういう展開が望めない場合もあるだろうが、「吹雪のうた」はその可能性をもつ作品だ。だのに演出は、舞台を戯曲の可視の範疇に閉じこめてしまった。作品への愛着がふかければふかい程、作者による演出は演技者にたいして保守的になりやすい。

そのあらわれは、説明的で意外性に乏しい行動、テンポのない平板な会話、過剰なおもい入れ、常軌的で常套的なミザンセーン等に指摘できるが、それらは、作品の主題が要求

している緊張感や今日性を削ぎ、古くさいお芝居のワクにはめてしまう。ほくたちにみえた範囲でも、支木の演技者たちは創意性や表現力に秀でていておもうのだが、惜しいことに演出はそれを発揮させられない。

乏しいスペースで具体例は書ききれないが、戯曲ではドキッとさせられる会話やシチュエーションが、舞台上生きてこない。演技者の内部に、そこへいたる有機的な行動線がつかれていないのと、嬉しければ笑い、悲しければ泣く式の通俗的な演技のロジックから脱けでていないためだが、演出の主要な目標は演技者の内面より、劇の外面的まともにおかれている。

これは何も支木のことばかりでなく、ほくらの演出者は、本の深い読みとりと、演技表現の可能性の発見という、演出作業の基本を真剣に謙虚に勉強しないと、今日の観客からおいてけぼりをくう心配がある。お客の目は、肥えている。

青森での七景のアタマで、面白いことがあった。こは、七七才の出稼ぎ老農が重い堤防用ブロックを苦勞して運ぶ情景が始まるのだが、照明が入るや袖のかはれ、小道具のブロックを床からヒョイと拾いあげ、次にや

たら重くてたまらぬという演技に切りかえた。当然、爆笑がおこり、それは尾をひいた。興味深かったのは、このフィードバックを機に舞台と客席の関係が一変したことだ。小道具のブロックをさも重そうにみせかける、演技というものの裏をパッとみしてしまったその瞬間から生じたみる側からの親近感、分析の価値がありそう。同化を強いられたいお客が、解放された目で芝居をみることになった点で、あのトチリは怪我の功名であり、そこからひきだせる問題はいろいろある。

不満ばかり並べたが、ほくは青森まで出かけて損をしたとおもっていない。逆である。表現方法のこと、芝居のテンポのこと、方言のことその他で、地域の芝居を論じるとき、観客との関連で見なければ生きた把握ができない、と改めて教えられた。

ただ、その教訓から狭少な地域(現場)主義といった傾向をひきだして安住されてはこまる。青森のお客は、たしかに「吹雪のうた」をよろこんだ。しかし、もっと喜ばせることができたのもたしかだ。

きしだ演出の新しい意気込みを軸に、再演を実現してほしい、合評会の多くの声と一緒に、ほくもそれを期待する。

観劇雑感

——「血の婚礼」「離り島風土記」「虫」——

萩坂桃彦

このところほくの周辺にもいくつか心にとまる公演があって、創るよろこびには及びもつかぬにしても、出かけただけのことはあり、そのあと幾日は思いおこして心が充てるのである。礼状代りに（招待が多いので）感想など送って整理はしているが、その返事は、余り来ない。若しくは殆んど来ない。勿論それが怪しからぬということではない。

そうした中で、はぐるまの「血の婚礼」をみて、汲田正子さんから、克明な、演出者としての仕事の整理をされた真卒な返事をいただけたのは格別の思いであった。

「血の婚礼」はゆきとどいた気持のいい舞台で、ぼくはこれをしもアンサンブルというのであろうとふかく考えさせられた。演技者の技がせり合って火花を散らすとか、冴え走った演出者の処理というのとは異なって、観

ていて説得させられる作り方、あれなら誰にも出来そうだが、なかなか出来ない、そうしたあたたかみのある舞台であった。演出者が戯曲を、おのれのあれこれに合せて裁量することもありうるが、深々とその戯曲なり作者なり惚れ込むということはもって大切なことのように思う。

汲田さんと「血の婚礼」（ロルカ）の関係はそれだった。そこでロルカが表わされ尽したというのとはちがうが、少くとも一つのこゝと、詩人ロルカの熱っぽい、怒り悲しみを宿した民衆—農民の若い娘や若者たちに托した魂の高鳴りは伝え得ていた。それが、コッポツと手作りりで出ている。どこか幼なげな作り方と云えたとしても、密度はたかい。

このことは汲田さんも告白したように、ひとり演出者の能くしえたことではなくて、幽幻な味を出すことに成功した装置や森の木立

の隙間をさす月の光の青さやフラメンコの群舞から衣裳小道具の端に到るまで、全く、劇団や劇団外のみんなのお蔭であると。

たしかにそれであるにちがいない。しかしそれをかいくぐって生きつづけるのも演出者のこころである。「落ちこぼれないように」「一番不器用な人に勇気を与える」ことにひたすらに意を用いたという告白に、ぼくは感心した。

その機能のひとつに「こぼやし特訓教室」というのがあるそうである。これなども面白い。

はぐるまの提灯持と云われそうなのでこのへんでやめるけれど、定例公演ときめたのだからといって、アタフタと上演だけすればいいという例もほかに無くはないので、もう少し書く。どんな舞台でも、客は十人十色で、けなす人もあれば褒める人もある。賭けことのようなそういう不安定さを、当日の偶然性だけに托して「第何回公演」を続けるのは、どんなものかとぼくは思う。

だから、くどくこんな形で「血の婚礼」を示すのは、その作り方の紹介がしたかったからにすぎない。

訳本（渡辺浩子）への汲田さんのテキスト・レジュイはこの芝居のほとんど、成功の半分をしめるほどの努力がついやされていて、これは参考になると思った。

テキスト・レジュイが参考というのではなくて、演出者と台本との関係が、何年、何ヶ月もかかって、このように煮詰ること。煮つめた仕事をしてみせるのがそもそも演出者であるだろうこと。そのことが参考になると思えたのである。

よく、演出者がいない、育たぬの声をきくけれど、配線工事のように、あれこれと舞台作りが、当日あたりにどんなに達者だとしてもそれは、演出者としては「部分」でしかないだろう。戯曲を、惚れこんで読めぬ人、読まぬ人は、当初から演出は無理である。

語の次に、阿佐谷小劇場・劇団「展望」の「離り島風土記」というのを紹介したい。

この戯曲は、日本列島の最南端、沖縄の離島「波照間島」の島民の苦しい生活を描いたもので、全島珊瑚礁の島で農耕に適さず、僅かな漁業をかたえて生きていくが、過疎のきびしさの中で、青年たちの「いかに生きるか」がテーマになっている。沖縄出身の加屋本正

一氏が初稿を書き、劇団がこれを練上げた。島の古老たちの紛れもない島言葉や言葉として全くわからぬけれど哀愁を伴って伝わってくる手踊りを織りこんだ八重山の労働歌は、観客をひき入れてやまない。まさに堂々たるリアリズム演劇である。

こうして思い返し、書き乍らでも身体が熱くなる思いは、阿佐谷の、小さな商店住宅街の一角で、文字どおりバラック建ての小屋で満席で50人ほどの客れものの中で、全く、観客との馴れ合い、妥協を排して、あの本格的な芝居を醸せず演じていたということだ。折からの雷雨で、トタン屋根をうつつ雨の音は、セリフをかき消すのであったが、舞台は蟬時雨の集く真夏の情景をみせていた。こういう面接の場に立たされた観客は不思議な作用をするものであって、雨のやんだ時のやすらぎが熱い好意となって舞台にとどく。つまり、到底劇場とは云えないこの小さな客れもの障壁、不足を舞台と観客とのあいつ交流が補うのだ。そこでひととき充実した関係ができる。忙しさはみじんもなかった。

演出した大沢郁夫さんは僅かな関係の知人だが、芝居作りの足腰のたし加さは、ぼくはかねてから感じていた。

東京における地域に根づくことのむづかしさは格別だが、ぼくはこの大沢氏のような仕事の中にその可能性をみるのだった。演技ぶりもごまかせるものではなかった。凝縮が観客の想像をふくらませて、拡大した劇世界を可能にする。舞台から与えることが多いほど喜ばれるという芝居の慣習とは逆であって、限られた条件の中で、たとえば「離り島風土記」といっても風物の何一つ出せない部屋の中で、海の青さ、不毛の陸地への想像をかきたてる工夫は、これまたたのしいというほかはない。たとえばスミという農氏の妻は、何の手助けも借りずに、土の香、潮の香を身に染ませて舞台に立つことになる。それは林陽子さんという女優だったが、そのことが出来ていた。

ぼくたちは観客を迎えるだけでなく、観客をたじろがせ、挑ませ、同じ土俵にひきこまなくてはならない。この格闘の快感が成就したときにその客は、その劇団の観客となるにちがいない。その時こそ、役者が抜き難く物を云うにちがいない。

関西芸術座の東京公演「虫」が大旨東京の

観客に好評だったのには、熱演ということが欠かせぬこととしてあった。そこには、「東京への挑戦」ということが見ていて解るほどにあった。あつたと思う。しかしこの熱演は心よいもので、荒れず、破れず、手こたえのたしなさは、さすがに劇団の歴史を感じさせ粒の揃った役者の競演が喜ばれたのである。

「虫」というような戯曲も大阪ならでは芝居であるだろう。このことは作者の藤本義一氏が初演のパンフレットに書いていて、「新劇でない新派といったものもあつたし、作者が感傷にはしるるといったものもあつたが、演劇には変りがないと居直った」とあるが、作者を居直らせた、芸人世界への殆んど熾烈な恋慕執着は、この「虫」あたりが初めかもしれない。その意味では、後年、この作者が「そう深まってゆくあのどろどろした世界、「鬼の詩」や「おどろおほろ物語」「手妻紙蝶舞」「珍版真田軍記」などにみられるグロテスクとさえいえないような異相の世界、そこまでは行かないで、むしろ善良な庶民感情や素朴な人間味を見せる下積の芸人たちが、あたふたと這い上ろうとする姿を、やや人情喩的に見せたのが「虫」である。これは、「芸の虫」であるとともに「虫けら」の虫で

もあるだろう。時代に置き去られて、発狂する落語家円丸（山村弘三）は、誰しも感じられるように「欲望という名の電車」の幕切れのプランシ・デユボアにそっくりである。

だから、これは単なる「話」にはできないのであって、こうした芸人たちの盡めく背景、時代や社会が否応なく出てくること、終局の目的とということになる。それは演出の上でも既に指定してあって、むしろ、それに向って巧みに運ばれてゆく。あの万才師松子（松井加容子）の種っばいセリフの張りや、万才師英丹（北見唯一）の受けのうまさや、絵図面のように出てくる仕出しや群衆のあしらいなど、「成程これが、関芸、道井直次か」とぼくなどをも傾かせるのであるが、やはりこの、「事の運びのうまさ」は新派的と云われてもあらがえぬ一面もあるのだった。「虫」が観客に喜ばれたとするなら、それは観客の巧さである。

やりきれなさも、いらだたしさも、反発にしろ、共鳴にしろ、そこで客席のさわざにならぬ。ならなかった。山村弘三氏の落語が本職の風格を見せたということなどは「部分」の話だ。「虫」がいきいきとこんにちの観客と切り結べる一点、それはある筈だった。

の知ったことではない。知ったことではないが、藤本作品では、舞台化ではせいぜい「虫」までということにばくの場合にはなる。この作品だけが、作者がナイーブに世の中にむき合っている。関芸にとって「虫」は恰好な台本であった。

俳優座の「日本繁栄学入門」はどうしてもふれてほしいものであったが、適当な劇評の稿を得ることができなかった。

出揃った作者の顔ぶれや千田是也氏の手馴れたうちにも可成実験的な作業は、新たな刺激になったのであったが、ほく自身局外者になたてないので「批評」を言うことができない。批評はいえないが、いろいろ手痛い評判など大きくつれて、この余りにも真摯な企画が或は芝居の粧いをとりきれなかったということには、複雑な意味がある。

スケッチがスケッチのサイクルで成就することはむづかしいが、これを演劇の本質に射込むことはむづかしい。

ブレヒトの会は、きわめて困難なしかし有意義なしこをはじめたように、その末席の一人であるばくも、自覚して思う。

ここでまたついでの話になるが、藤本義一氏の作品は「虫」以外は厄介なことにおもえる。これは小説を読んでの発想なので余り当にはならぬが、たとえば、少し前、劇団創芸（横浜）の「鬼の詩」というのを観たことがある。いま思うと、これは脚色・演出（梨地四郎）もなかなかの出来であつて、原作への重ね合わせも色濃く、むしろそれ故にこれはおどろおどろした、何ともやりきれぬ芝居であつた。分り易くいえば気味が悪いのだ。咄家桂馬喬が、寄席で、客がからかって出した（脚色）投げ銭ならぬ馬糞の饅頭を食ったり、天然痘のあとの痘面の凹みに煙管を三十五本さげてみせるという幕切れは、ほくの神経では残酷に見える。勿論そうしたことだけを見せたのではないが、寄席の描写や馬喬の人間としてのおもしろさなどあつたとしても「馬糞」や「煙管」の強烈さは消えない。

藤本文学の語りの巧さにはひきつけられるが、こういふすがたで舞台でやられるのは、ぼくにはかなわぬ。勿論、これはほくだけの話である。これを演出し、演じてみせるものだし、客の中にそれを喜ばぬという保証もない。そして、当然そんなことは原作者

さてここまで印刷に廻っていた所で、未だ一つ二つほかの人からの原稿を待つ間に、未踏の「平沢計七研究公演」と京浜協同劇団の「コーカサスの白蠟の輪」を見ることになったので儀礼程度にしか書けないが、付け足しておく。

未踏の平沢計七研究も、思いつきでない粘っこい姿勢とそれに伴った計七戯曲の連続的復元上演は、確実に観客をとらえてきたようである。今回も四ツ谷公会堂の客席は満員であつた。本邦初演と称する「二老人」と新しく発見されたという「非逃避者」はどちらも、ゴツゴツとした、演説なども大胆に入つて来る平沢独特のもので、前者が革命後20年の世界、後者が世界プロレタリアートと国家の問題を取扱つていて興味深い。観ていて訴えられるよりも今では一種爽快である。

芝居に先だつて西田勝氏の「平沢計七の現代に訴えるもの」という講演があり、その中で、「未踏はいまは下手だが、将来大劇団になる可能性がある」というユーモラスななむけは、そのまま舞台の印象になった。好感の持てる熱の入った演技だ。

京浜の「コーカサス」は初演も見ており二度目である。初演の鮮烈な印象とは別に今度は、演出（小田健也）や演技の跡づけが見てとれ、やはりこれは力の入つた良い仕事だと思つた。

まず主役グルシェ（室野定子）が見ていて飽きない。一緒に見たこぼやしひろし氏も、これ迄の重い、固い京浜の演技体質が洗われ切れたとはいえぬにしても、これは「京浜のゼイ変である」という評価であつたが、ほくも同感である。

こんどの仕事には劇団ひまわりから見るとらにこなれた達者な演技者が何人か参加しているし、安達元彦氏指揮の生演奏のあづかる力も別に話では話ではできないが、むしろ、こうして攻め上げてくる創造のはざま、京浜がこれまでない熱っばいアンサンブルを得たということが大切だ。勿論今後の問題も含めて、これは云わなければならぬ。

ともだち

——プロローグのある一幕——

中村 おがわ

プロローグ

団地附近。

セールスマンのいでたちをした若い男、なれない仕事らしく、もう、ただただ疲れきって、投げやりである。登場。団地の建物をみて、ため息をついている。

ためらいながら、ベンチへ腰を下す。

主婦、二三人前を通りかかる。

主婦3 ああ、だめだめ、私たち、忙がしいの——行きましよう。

三人、立去る。

若い男 チェッ、何が忙しいもんか。ひま持てあましてんだよ、おれは……。

(団地の中へと入っていく。)

団地

太平家

(居間。ダイニングに続く。玄関。寝室と、一応、使用する場を作る)

居間で、ソファに腰下した桂子、次郎の絵のモデルとして、ポーズを作っている。サイドテーブルの上に電話器。

次郎(六年生位でもよいが、大人が扮してもよい)。

桂子 きれいかいてよ、

次郎、時々、母親をみて、黙々とかいている。

桂子 昔、お父さんねえ(思い出したように)、ねえ、美人かしら、母さん。(ふっふ……)と思出し笑いをする。姿勢崩れる)

次郎、桂子の傍へきて姿勢を直す。

桂子 はいはい。(姿勢を直す)お前は母さん似よね次郎。そして、絵をかくところはお父さんそっくり。あの人画家になりたいといってたのよ。でも、どうでしょう、こ

の頃は……(思い出して)そうだノ

起ち上る。電話器をよせ、ダイヤルを廻す。次郎、だめだなどという感じで、桂子を見る。

桂子 (受話器をとり) モシ、モシ、大隅さん? やっと通じたわ。おでかけでしたの? デパートへ。結構ですこと。掘出し物ございまして? えっ、何ですって、追突? あなたの車が追突されて……お怪我は? そう、軽いむち打ち。早速お見舞いに伺わなくては……。いえ、軽い、重いに関係ないの、大事になさらないで。全く、いつ、どこで災難に遇うか判らないご時世ですわ。今、ね、ついでといっちゃなんですけど、保険にお入りになっては、いざという時、後顧の憂なくしてね、ぜったい安心、保証つきよ。パンフレッド持って伺います。そんなことおっしゃらなくとも……。お宅の会社、不景気につよいでしょう、ね、ごらんになるだけでも……。そう。じゃ充分お考え下さい。そして……ええ……どうかよろしく……お大事にね。

受話器をおく、半分失望のため息。次郎母の顔を見つめている。桂子坐る。

桂子 次郎のお耳のためです。鬼にだってなるわ。

次郎、再び桂子の顔を描き始める。

桂子 (次郎を見ながら) 赤ん坊の時の可愛いさったらね……。知らない人まで、立止って、あやしてくれる程……。お父さんのご自慢の種でね、次郎。散歩には、いつもいつも抱っこしてってくれた。どんな寒い日でも……。あんまり寒い日だったもので、お前は、すっかり風邪を引いちゃって……。高い熱がどうしても下らないの。一週間も……。風邪じゃなかったのよ。それからお前は、オルゴールをならしてやっても振り向かなくなりました。病気になる前は、とても、お気に入りだったの、オルゴールが、音感のいい子だよなんて……。親バカもいところ……。

(一寸目頭をおさえる)
次郎、かけより、桂子の姿勢を直す。

桂子 きびしいのね、次郎は……。

電話のベルなる。桂子、立上る。不満そうに見上げる次郎に

桂子 電話なの。(その仕草をする。受話器をとりあげ) はい。太平でございます。あっ、大隅さんのおく様。先ほどは……失礼えっ、本当に? ……私、無理におしつけるつもりは……。いえいえ……。では早速、パンフを持ちまして、伺います。有難うございます。では、ごめん下さいませ。

受話器をおき次郎の前にきて

桂子 母さん、お仕事なの。

次郎、首をかしげる。

桂子 契約とれるかもしれないの。大口よあの方。お金持ちだから……。ガンバラなくちゃ……。今月は、先月の半分もとれてないの……。お前のためなの、次郎。お前が一生安心して暮していけるように……。着替えしなくてはね。

着替えのため寢室に行く。次郎、つまらなそうにあとに続く。

桂子 もうじき、お兄ちゃん帰るとおもうけど、土曜日だもの。(着替えながら)

電話のベル——。

桂子 次郎ちゃん。ホラノ

電話のなっていることを示す。次郎 反応なし。

桂子 そうか／＼だめだったね。

着替えの服のハスナーをあげながら、居間へ行き、受話器をとる。次郎もあとに続く。

桂子 もしもし。はい。太平でございます。

あ？ ーんだ、お兄ちゃん。はい。母さんよ。何？ ブラスバンドの練習でおそくなる？ 困ったわ……。母さんもうどうしても、出かねなくちゃならないの。ぜひお伺いしなければならぬお宅。ええ、もうじ

き。だから、あなたに早く帰ってほしかったの。次郎一人じゃ……。

振返る。次郎、さっきの画を描いていたが、顔をあげる。桂子何でもないという風に首を振る。

一郎ちゃん、ね、判らないの、何時になるか？ もしもし……。 (切れる) あ、せっかちね。あの子ったら。

受話器をおく。

次郎、ステレオをいじり出す。ビートルズの音楽、大きい音。

桂子 ああ、いけません、そんな大きい音出しちゃ。(音を止める)

次郎、かまわず、スイッチを入れる。(ポリリズムをあげる)

桂子 叱られるわよ。お兄ちゃんに。

桂子、次郎の手を押えて、止めさせる。

ふてくされる次郎。次郎と向いあう桂子。

次郎の肩を押えながら、そして次郎の顔を見ながら、一語一語はっきりいう。

桂子 もし、お父さんが、おかえりになったら……。

次郎、桂子の口元をじつと見つめている。電話のベル。

桂子 (再び受話器をとり) はい。太平でございませう。あ、あなた、次郎？ 帰ってますよ。午前中だけですから授業は今日……。ねえ、あなたの方は、何時頃お帰りになれますの……。え？ おそくなる？ ……いえ、毎度のことですから……。いや味をいってるわけじゃございませぬ。実はね。私も一寸出かねなければなりません。次郎が一人になってしまおうでしょう。一郎の方はあてになりませんのよ、ブラスバンドのコンクールを控えてるから、追ひこみの練習だなんて、生意気に……。他の学科も、あれ位、追ひこんでくれれば、いいのに……。じゃ、お夕飯はよろしいのね。いえ

いえ、おつきあいの大切なこと位、百も承知。あなたの足を引っぱってると思われたくございませぬ。(受話器をおく)

桂子 お客様のご招待ですって、お父さん——。何やってるか判りゃしないのよ、この頃のお父さんは——。そりゃ、出世するのは嬉しいけど——。

次郎、ステレオの傍に置いてあったトランペットを吹く。突拍子もない音。

桂子 ああ……。 (耳を押える)。しまっときなさい。けんかになるわよ、またさわったなんて。——さア、しまっときなさい。

桂子次郎からトランペットをとりあげて片付ける。

桂子 (ふと時計をみて) 二時五十分——。ぐずぐずしちゃいられない。ねえ次郎。お父さんもおそくなるの、おるす番してて遅戴。(ゆっくりと) おるすばんおねがいね。おみやげ買ってきてあげます。わかった？

次郎、こっくりうなづく。桂子キッチンへいき、ケーキをお皿にのせ持ってくる。

桂子 おやつ、ここへ、おいときますからね。あなたにも友だちが出来るといいのね。と・も・だ・ち……。よ。

テーブルの上に、ケーキをおき、次郎の手に、鍵をのせる。

桂子 母さんが出ていったら、ドアをしめてカギかけてね。(かぎをかける仕草) ね、失くさないように——。次郎一人で、このお家の中まもるのよ。できるわね。ガンバってね、おねがいよ。なるべく早く帰ってくるつもりだけど。

次郎、しっかりと胸をたいてうなづく。

桂子 ジャー……。

出ていく桂子。悲しそうに、不満そう

にあとをついて玄関までついていく次郎。

桂子 いったきます。おねがいね。次郎、鍵忘れないで。

出ていく桂子。しばらくしまったドアをみている次郎。身をひるがえしてもどり、テーブルの上に鍵をなげ出す。ベランダへ出る。しばらく外をみて居間へ。次郎、かきかけの絵をとりあげてじつと眺めている。きつとなり桂子の顔にひげをかき加える。

玄関のブザーなる。

次郎はきこえない。立上って自分の部屋の方へいく。

再び、三度、ブザーなる。

次郎、レーシングカーをかかえて居間にやってくる。

ドアのノブを廻す音。若い男の顔がのぞく。

次郎。居間から、ベランダに、レーシングカーを押して出る。

若い男しのび足で、姿をあらわす。そろそろと居間の方へ……。

若い男、部屋の中をじろじろ、見渡している。テーブルの上のケーキが目に入る。若い男おもわずつばをのむ。ベランダの気配に若い男となりの寝室の方へ身をかくす。手にケースを持ったまま。

次郎、テーブルの上の鍵に気がつき、玄関にかぎをしめに行く。若い男、そろそろと居間をうかがう。

次郎居間にもどってくる。ふと気配を感じて、振り返る。首をかしげていたが、ソファに腰を下し、ケーキをたべ始める。

若い男、次郎の後姿をみてつばをのみこむ。何度も何度も……。

若い男、急にくしゃみがしたくなる。こらえようとして、とうとう大きなくしゃみ。

はっとして次郎の方をみる。次郎振りむかず、相変らず、ケーキをもぐもぐ……。

ステレオの前にいき、見入っていたが、スイッチを入れる。レコードなり出す。

若い男 ビートルズの曲だ。

若い男再びくしゃみ。反応なし。

急に生き生きとする。調子をとってハミングする。

若い男、首をかしげて、そろりと居間の方に姿をあらわす。

次郎、ふと振り返る。そして、じっと、レコードにききいっている若い男をみると、立上って、あっと驚く表情。

次郎、再び絵をかき始める。

若い男、一瞬、態度を決めかねたじろく。

若い男 気がつかねえのかな。まさか……あんなでっかいくしゃみだ、きこえねえ筈はない。その手にはのらないぞ——用心……用心……。

若い男、次郎の前に立つ。

次郎描きかけの絵をかかけて、眺める。

若い男 大人しくしろ。さわがなければ何もしない……何も……。

若い男、大たんにもステレオに目をつける。

次郎、あとすさりする。

若い男 ステレオだ。

若い男 オ、オレはセールスマンだ。

次郎、若い男の口をじっと見る。

若い男 見るなよ。そんなにじっと見つめられたら、変な気がするよ、全く。みるなノ

若い男 もう一辺やんな、ウウ、たまらねえノ大好きさ。おれがまだ若くて夢も希望も

若い男、すぐに食べおわる。

若い男……ケースを示し

若い男 おお肩がいた、ヘンチなんかにふてくされてたバチだ。

若い男 おお肩がいた、ヘンチなんかにふてくされてたバチだ。

若い男 化粧品だけとよ……。おれなれてないもんで……。下手で、ことわれちゃったみんな。うるさいわよ、なんてノおしうりはしねえよ、決して……おふくろさんは？

次郎、若い男の顔をじっとみつめたまま。次郎、若い男の顔をじっとみつめたまま。

じっと自分を見ている次郎に気がつく。間。

次郎、何？という風に顔をみる。

若い男 それにしても、腹が減ったな。考えてみりゃ、ゆうべから、ろくなもの口にしちやいなかったな。部屋をとび出して……何してるんだ、こんなところでおれは……。

次郎逃げようとする。

若い男 おふくろさん……。おめえんところは

次郎、ソファに腰を下して、再びケーキを食べ始める。

若い男 待てノ

は おふくろさんなんてよぶわけないよな。じゃ、ママ……。ママだよ、いねえのか？

若い男 つばをのむ。

次郎の腕をつかみ、自分の方に引きよせる。ねじあげる。次郎、もがく。

次郎、わからないというように首を振る。

若い男 こいつ、おれをなめやがって……。おねがいだ、そのケーキ、おれにくれノ

若い男 (一寸手をゆるめ) 知ってたら、教えてくれノおれは怪しいもんじゃないんだ、ええノ

若い男 いねえのかノとすると、お前一人か？ (安心したようにいう)

若い男、次郎からケーキをひったく。

次郎、首をかしげる。そして妙な声をあげ恐怖を示す。

次郎、動かず。レコード終る。

呆然と見ている次郎。

若い男、次郎をはなす。

トランペットに目をつける。

次郎をみて笑う。次郎も笑う。

若い男 なーんだ、お前は……。はっはっは

若い男 ホウ、トランペットの実物か……。

若い男 笑うな。ステレオが買える位なら、

こんな泥棒みたいな真似しねえよ。これを
こうして、このボタンをまわしてと……。

鳴ったノ

口がきけないと判って、大笑いする。

次郎も思わず笑う。

次郎、色をなして取りあげようとす

る。

ポリウムを下げ、リズムにのって体

を動かしている。

若い男、さっきのレコードの曲を口ず

若い男 お前のか？

若い男 あっ、こうしちゃ、いらねえ。商

売々々といったところで、お前あいてに化

粧品でもねえや。くそノやっばり手っ

り早くだ。誰かが帰ってきてこのまま、

ご用でなごになっちゃ、とんだ間抜けの

三枚目だ。えいノおい金出しな。

(若い男手を出す。次郎、その手をじ

っと眺めている)

手相見てくれといってるわけじゃねえん

だ。カネだよ。金はどこだ。カ、ネ……チ

ェッ(舌打ちする)

若い男 きこえねえのにレコードかけていた

ってわけか。こりゃ、おかしい。おやし

んは？

若い男 ほかに家族は……。お前本当はきこ

えるんだろ。おどかしっこなしたぜ。

次郎は、じっと男をみつめている。

次郎、ステレオかける。

若い男 会社か？ おやしさんは、偉いのか

？？ゴルフ大会の優勝カップ。優雅でござ

るな。おふくろさんもおねえし。

若い男 そんなこと、いってやしねえよ。

若い男、レコードを止め、改めて、自

分にかけてみる。

若い男、あたりを見まわし

若い男 早いとこやっちまえばいいんだ。誰

もこねえうちに。

一度、やってみたかったのさ。

若い男 字は読めるんだろ？

テーブルの上に、一字一字読みながら
かく。

「か・ね・は・ど・こ・だ」

桂子の顔を描いた画をとりあげて眺め

る。次郎、とり返そうとするがあまり

えんだ、いいかい？

ポケットから、ボールペンを出し、さ

っき次郎のかいた画用紙に、自分もか

く。

次郎、うなずいて、自分のスケッチパ
ックから一枚出し、それにかく(知ら
ないとかく)。

若い男 ひげはやしてるよ、おっ母さんかい

？ 美人だな。おれのお袋なんざ、かけお

ちしちまってよ、おれが十の時、十二も年の

下の男なんぞ。きたねえよ。貧乏だった

し、おやしは働きもねえくせに、酒ばかり

のんでやがった。米作ってたて大したこと

なかったり、それにしても、お前は絵がう

まいな。なんだその顔は……。ほめたんだ

ぜ、おれは。もっと嬉しそう願したらいい

いじゃないか。お前は貧乏だったことはね

えんだろ。いいかい？ 貧乏ってのは何に

もなくなっちまうんだ。一人ぼっちになっ

ちまう。身も心も、切なくて……こう、い

いなアとおもう女がいたとする。貧乏する

とやさしい女も、やさしくなくなっちゃ

う。

次郎、かく。

若い男 (読む) 「知ら、な、い、よ。」

嘘つけ(かく) 「う・そ・を・つ・く・と

・た・め・に・な・ら・な・い」

次郎かく。

若い男 (読む) 何？「本当に知らない。知

っていたら、こっちがさきにもらう」

若い男笑い出す。

テーブルの上に、指でかく。

若い男 あ・な・た・は、誰ですか。
(若い男 ちらと次郎を見て)

誰でもいいわい。

若い男 失・業・者。もとはつとめてたんだ

けどよ、いつまでも遊んでるわけにはいか
ねえよ。

若い男、まじまじと、若い男をみつめて

いる。次郎の眼にたじろく若い男。

若い男 ふざけるな、かくしたってだめだ。

勝手に探すぞ。

若い男 何でえ、おれは、心変わりなんぞしね

次郎かく。

若い男 (しばらく眺めてから) そうかいノ
「かねはあるみんな銀行」
この野郎ノもつとも最近、自動振込で
やつて金をみんな銀行へもっていったら
って話もあるからな。

次郎か。

若い男 (間をおいてよむ) なに、うちは貧
乏だうそつげノこんなにも何もかも揃って
っていうのに……。なに……？

次郎のかくのそのぞきこむ。

若い男 (読む) みんな、ゲップ。

若い男 そんなこと知るもんかノ

(なお書きつづける次郎の文字を
読む)。

ほんとうに、みんなげっぶ。

若い男 勝手にしろ。(若い男 立上り、居
間から寝室を物色を始める)

次郎、男のあとについてまわる。

若い男、振返る。

若い男 チェッ、少し大人しくしててもら
うか。

洋服ダンスをあける。

ネクタイがずらり。

若い男 持ってやがるな。やんなっちゃう。

しばらくそれを眺めている。が、その
中の一本を抜き取り、もう一本抜きと
り、次郎にとびつく。

次郎、声をあげて、もがくが、組伏せ
られてしまう。

若い男、ネクタイで、次郎の手足をし
ばろうとして、まず手をしぼる。

玄関のプザーの音。

若い男、きつとなる。

プザー続けざまになる。

若い男 手を止めて耳をすます、そし
て次郎をみる。

次郎 何かという風に、若い男をみ

るが、すきを見て、はね起きる。
またプザーなる。

若い男 おい、誰かきたぞ、知らん顔して
いいのか？ ええ……そうか、お前はきこ
えねえんだった。

若い男、玄関へ出ていく。

間。

ため息をつきながら、玄関の方をうか
がっている次郎。
もどってくる若い男。

若い男 女のセールスマン、いや、ウーマン
か馬鹿だなおれも。ためえだつて招かざる
客じゃねえか、少々、プザーがなったから
ってビクビクしてやがる。

次郎 手をしぼられたまま、ベランダ
から下を見おろしている。

若い男戻ってくる。次郎を見ると、あ
わててベランダから、引戻そうとす
る。

若い男 見つかったら、どうするんだ、こん
な恰好のどこ……。ははア、それとも何か、

下のやつらに扶けをよぶつもりだったのか

おあいにく様。お前は……。それとも、ま

さか、とびおるつもりだったのかノバカ

だな、死んじまうじゃねえかノ手をしぼら

れたからって死ぬよりはましだな。

さア、こいノこっちへくるんだ。

次郎を引っぱりながら寝室へとって返
す。

寝室で、若い男あらためて、次郎の手
足をしぼる。

若い男 よしよし、大人しくしてろよ。

(ダンスの中を物色する)

若い男 指輪だノ

指輪をとり出し、赤い財布もとりに出
す。

若い男 指輪を手にとってみる。

若い男 (次郎に) ダイヤか、これ？ 違う

かノさっぱりわからん、まアいいだろう。

こんなのでも、買ってやればおれの女だつ
て、逃げなかったかもしれん。本物かな、

そうなら、一寸は金になるからな。

ポケットにしまふ。

次郎 抗議の身振り大声をあげる。

若い男 うるさいんだよお前。一寸は落ちつ

かせてくれよ。財布の中味はと……五万

……百、二百、三百……まアそれ以上、ま

ア仕様がねえノ(ポケットにねじこむ)

長居したな、悪かった。

次郎、一生けん命もがいている。

若い男、部屋を出しなに振り返る。

若い男 そうやってる中に、とけるだろうよ

あばよノ(玄関へ出ていく)

プザーなる。

寝室で次郎 いましめをとこうと、も

がいている。

若い男 もどってくる。

若い男 かぎは？

次郎もがいている。

若い男 お前も、一人ぼっちなんだろ？

いやだよな気分切なくて……。

次郎 若い男を見る。にらみつけるよ
うに……。

若い男 本当は、お前気がつよいんだな。そ
んなら、大丈夫だ。いいか……か、ぎ、
よ、こ、せ。

次郎 知らん顔

若い男 かぎはどこだ。

若い男 次郎を見下している。

次郎 ほどいてくれという仕草。

若い男 そうか、よしよし。

次郎の手をほどく、次郎 紙と鉛筆を
くれという仕草。

若い男、居間から画用紙とボールペ
ンを持ってくる。

次郎はそれを受取り、男の顔をみる。

若い男 うん、かぎはどこだ……何？ カギはない？ そんなことあるもんか、子供のくせに。やさしくすればつけあがって。

若い男、次郎のポケットを探る。ズボンのポケットから鍵がでてくる。

若い男 あったじゃねえか、大人しく出せばいいのに。おれはお前に好意を持ってんだぜ。その好意をふみにじっちゃ……そりゃないだろう。

若い男、玄関の方へいく。

若い男、自分のかくれ場所を探す。ブザー執拗になる。

若い男 お客だよ。

若い男、自分のかくれ場所を探す。ブザー執拗になる。

若い男、寝室の方に身をかくす。ブザーやむ。

若い男 (出てきながら) 結構客のくる家だな。もしかしたら、お前の友だちかも……。よしいまのうちだ。

三度目の正直——。

若い男 玄関へ出ていく。次郎、素早く、ステレオのスイッチを入れ、ボリュームをあげる。

若い男 あわてて引返す。

若い男 でかすぎるよ、音。

若い男 ポリュームを下げようとする。次郎 ボタンを、しっかり握ってはない。さない。

若い男 構うもんか、もう。ブザーの音。

若い男、意を決して玄関へ出ていく。間

となりの室のペランダより女の声。

女の声 もう一寸音しずかにしてくれない、赤ん坊がねたところなの……。

かけもどる若い男。次郎の手を、もぎとるように、はなさせ、ボリュームを下げる。そして消してしまふ。

女の声 有難う、しずかにしてくれて……。

でも、……おくさんおでかけになつてる筈、階段のところで会った時、次郎ちゃんが一人居るす番だといつてたわ。きこえない苦なのにあの子……。偶然かもしれないでもいいわ静かになつたんだから……。

若い男、いらいらしてくる。

部屋の中いったり、きたりする。次郎、時々、不思議そうに眺めては、筆をはしらせている。

若い男 お前は平氣の平左、大した野郎だ。一寸だけ、悪氣をおこしただけじゃないか。何でこんな目でえ目に会わなきやなら

ねえんだ。

人殺したわけじゃなし、三億円盗んだわけじゃなし、不正な金を横領したわけじゃなし、工場から毒を流したわけじゃなし、誰かをくびにしたわけじゃなし、クビになつたのはおれの方だよ。何をかいてる？ (ひょいと、次郎の画をのぞきこむ)

若い男 なーんだ、おれじゃねえか。そっくりだぜ。一寸いい男のような氣もするな。天才だぜ、お前。勿論、こいつはおれがいたただきだ。

若い男、次郎から絵をとりあげようとする。

次郎、悲鳴をあげて、画用紙の上につ伏せになり、とられまいとする。

若い男 知らせる氣だな。

次郎、その絵をおりまげ、しっかりとにぎりしめる。

若い男 知らせたら承知しないぞー

(紙にかこうとして思い直すテーブルの上にかく。次郎、紙にかく。) 若い男 (読む) さっきの指輪とお金、かえ

して下さい、そしたら、だれにもいいません。

若い男 金はある、知らせたら承知しない。(テーブルに指でかく)

若い男 いいか、いう通りにしないと、殺すぞ。

次郎をころす仕事。

若い男 またもや戻ってくる。次郎、再びレコードをまわす。

その音の高なり——。

若い男 となりこまれるぞ、今度はアパート中だ。止めるんだ。

若い男 今度もスイッチを止める。

次郎、我が意を得たとばかり素直に引下る。そしてにっこり笑う。

若い男 笑うな、おめえは、たのしんでるみていだ。おれにいてももらいたいのか、冗談じゃねえや、真剣なんだぞこっちは——。

お前の相手をしてるひまなんぞねえんだ。お前の相手だつて……

(じつと次郎をみながら) そうか、妙な氣分になつてきたよ、おれは……。わなだ、こりゃ。わなだ、わなだ。お前はあたまがいい、口がきけたら、さぞや……。いや、口がきけねえからいいのか……。おれは、どうしても徹底的に強く出られねえ畜生ノ

次郎の向い側の椅子に身を投げ出す。

若い男 しかし、こうしてお前と向きあつてるのもおちつかないな、おれは一人になれちまつたせいかな、一人も落ちつかねえけど……。 (口をつぐみ、思いこむようす) まぼろしかこれもまた……。おれの頭どうかしちまつたからこの頃。

次郎 じつと彼を見つめる。その顔はむしろ心配そうにまゆをよせる。

やめたと立ち上つた若い男の前に次郎たっている。

若い男 あ？ お前！ おれは一体！ そうか。なア——、おれ、もう帰りたいんだ。

(意識がこんらんしている模様)

次郎 手を出す。

プザーなっている。

玄関の方から (かすかに) お帰りになりまして、おくさまア！

若い男 ちえ、まさか、永久に出られないわけじゃないだろうな、おれは、正々堂々、出て行きたいんだ。

部屋の中を落着かず、次郎、男の様子を眼で追う。

若い男 (次郎の前に坐り) どうだ、おれと手を結ばないか。ええじゃれたい。

若い男「おれと」かきかけて、やめる。

若い男 いいか。

(自分で読みながらかく。

おれは、お前の友だちだ、だからお前のと

ころへ遊びにきた丈だ。

次郎かく。

若い男 (読む) チガウノドロボウだ。泥棒

? お前は、そんな風にみてたのか。

(若い男かく)

ちがう、泥棒ではない。

次郎 首を振る。

若い男 おれはお前の友だちだ、お前は一人ぼっちだろ。おれも一人ぼっちさ。一人位は話相手がいた方が、精神衛生にいいさ。

若い男 金を半分出す。

若い男 ホラノ これでもう泥棒ではないだろう、友だちだといってくれノ

次郎 考えこむ。

若い男 安心して、ステレオに触ったりしている。

若い男 本当に、こんなステレオほしかった

んだ。これ、舶来か。アンプがいいや

次郎 口を動かす。

若い男 何いってるんだ。まアいいや。ラ、ラ、ラ……(レコードにあわせて調子をとる) なつかしいなア……全く……久し振りで、涙が出てきて……。この唄が流行っていた頃、おれにも、希望ってものがあつた。東京へ出たら、きっと成功してみせる。歌手になってもいいとおもった。一寸、いい声してると思ったもんな。しかし声だけじゃ歌手にはなれない。ぜぜっこもいるんだって——、おれ、ステレオの組立て知ってるんだぜ、材料さえあれば——十ヶ月いたもんな、アンプの部分品作るところ——。中卒だつてバカにされて、あたまさちまつて——、金の卵だつていわれてたんだぜおれたち——。すっかりその気になつてたら——。おれたちやっばり、みそつかす——。それから、自動車工場へ入つてよ——。五六年もすればおれの作つてるような車手に入るかなつておもつてたけど——、とび出しちまつて——。おれ、やっばり、

短気でバカなのかな——。仲々、ないんだ

な、おれの肌にあうところ——。それでも石油ショックがなかったら、あの鉄工所やめなかったな、十人ばかりのちっぼけの鉄工所だつたけど——たのしかったな——。ところが、大親会社が一寸不景氣つて仕事を控えちまつたら鉄工所のおやじさん、くびくくちまつた、ついてないよア——。

おれは——
もっともいけないのが、セールスマンで奴だ。他人の夢をのぞくばかりで、自分に夢がないもんで、一寸とも売れやしない。おれは思つたら東京で働いたら、自分の家をおつたつるぞ——つて、ところが……。

若い男 何かかいて若い男に示す。
若い男 何？ 泥棒は友だちじゃない。さつき、返したじゃないかノ

(次郎 かく。)

若い男 (読む) 全部返して下さい。ぼくは知っている。……(若い男そっぽを向く)
知らないね、おれは……。

次郎 かく、若い男はもうのぞきこまない。
次郎 若い男の腕をひっぱつて、紙を

示す。

若い男 (読む) 全部返して下さい、そしてら、ぼくは許します。友だちになります。

若い男 じつと、その書いたものを見つめてる。

次郎 それをとり返し、かき足す。

若い男 (のぞきこむ) 本当の友だちになり
ます……(顔をあげ) 本当の友だちかおれも、ほんとうは、ほしいよ、本当の友だち。

間

もぞもぞとポケットを探る。そして、財布の中味と、指輪などテーブルの上へ出す。

若い男 こんなもの、くそ、くらえだ、さア
いいか、おれはお前の友だちだ本当の。

プザーなる。続けて。

声 太平さん

声(男) 太平さん——(どんと扉をたた

若い男 おいみてこいよ。

次郎に玄関を示す。

次郎玄関へいき、ドアをあける。

隣の女性 次郎ちゃんノ

管理人 太平さん——

あわてて室内に入ってくる。
呆然と立っている。若い男。

夫人 まア、指輪ノ これおくさんのです、

前に見せていただいたことがあるの。

管理人 貴様、泥棒だな、やっばり——おく

さん、百十番。

夫人 はい。

(電話のダイヤルをまわす。)

若い男 違う、泥棒じゃないわ、友だちだ坊

やの……

夫人 はい、こちら、××団地、五〇四——

は泥棒が——。

若い男 泥棒じゃないつてば。

(逃げようとする)

管理人 こら待てノ(若い男を組み伏せる)

何かしぼるもの(夫人に)

夫人 はいはい……次郎ちゃん何か!

管理人 これは何だ、金と指輪、お前はぬす

もうとしたんじゃないか。そうだろ、坊

っちゃん、危いところだったね。おとなりの

おくさんが、太平さんところが変だから、

見てくれと、通報下さってね、よかった、

きてみて……。

若い男 おい、おれは泥棒じゃないといって

くれ。坊や、返したといっけてくれ。

若い男 しゃせん、おれは……あきらめたよ。坊や、さよなら。

若い男を玄関の方へ引立てていく。

よ。坊や、さよなら。

次郎 何かいおうと一生けん命。遠く

から、バトカーのサイレンの音。

次郎 あ?

若い男 おい、おれは、坊や、それでも

友だちかい!

あとを追おうとする。

夫人 次郎ちゃん。

次郎 かい、夫人に見せる。

夫人 次郎を引きとめる。

次郎 もがいて、手をはなし、かけ出

していく。

夫人 私は次郎ちゃんをたすけたと思ってた

のに……。

夫人 次郎ちゃん。

再びバトカーのサイレンなり遠去かる

幕

紹介 芳地隆介戯曲集

人間蒸発・人間乾期

瀟洒な装束だが、重い、充実した内容である。収録作品は、「人間蒸発」「天国へ馬で行け」「裸婦をかざれ」「コレラにっぼん」「橋のある風景」「人間乾期」などで、最後の作品は、近作の「幽霊」ものと相俟って、小野宮吉戯曲平和賞にゆきついた。これらはほぼ十年にわたる仕事だが、一作毎に、作者の屈折の節目が、内容・形式の変化・深まりとともに、くっきりと見とれるのが興味ふかい。

読後、殆んど透明といえる、澄んだある「強制さ」を感じるが、千田是也氏はこれを「まさに今日の労働者がいる。因太くて、辛辣で、爽快である。敵が見えぬとか、仲間が見えぬとかといふ泣言は見当らない。かといって、やたらとイヤマキもしない。明確な着想、硬質な雄弁、抽象もここでは、知識の産物ではない。十数年におよぶ職場での闘争のギリギリの決着である。今日の労働者演劇は、この辺からはじまるのだと思う。」と評された。云いつくされている。戯曲の透明度は逆に上演への多彩な夢を誘う。

発行所 土曜美術社

東京都中央区新川二一二八一 府研ビル
電話〇三(五五二)二七四五

定価 一五〇〇円

あとがき

◇本号は出足がおくれ、ゼミ前に発行という約束もあって苦しい編集になりました。そんな中で宇津木秀雨氏の論文が完結をみたのはうれしいことでした。筆者にあつく御礼を申し上げます。
◇逆にいくつかの原稿を逸しました。「北海道レポート」「なかまの頁」「劇評」など。劇団通信も僅少ですが、こぼれました。
◇火星に着陸する科学の進歩をとげるのも人間なら、贈取賄汚職にどっぷり漬かる輩も人間。破邪題正などとは云いません。「演劇で何ができるか」。三たび、四たびと問われてゆくでしょう。東西演ゼミの燃んなることを願ってやみません。
◇「北東の風」「千万人と雖も我行かん」「断層」の作者久板栄二郎氏が急逝されました。遅ればせながら本誌も謹んで哀悼の意を表します。(もも)

演劇会誌 三三三号 一九七六年八月一〇日発行

定価 三五〇円

編集委員

黒沢参吉・こばやしひろし
若尾正也・仲 武司・土屋 清
岸本敏朗・萩坂桃彦

発行所 演劇会誌 発行所

川崎市川崎区渡田四一―一三
萩坂 方

電話〇四四(33)〇七七五

誌代銀行振込は川崎信用金庫小田支店一三三三二七